宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第261集

西都市所在

山城城跡（やまじょうしろあと）・
串木遺跡（くしきいせき）第４地点

県道杉安高鍋線（山城工区）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０２２

宮崎県埋蔵文化財センター

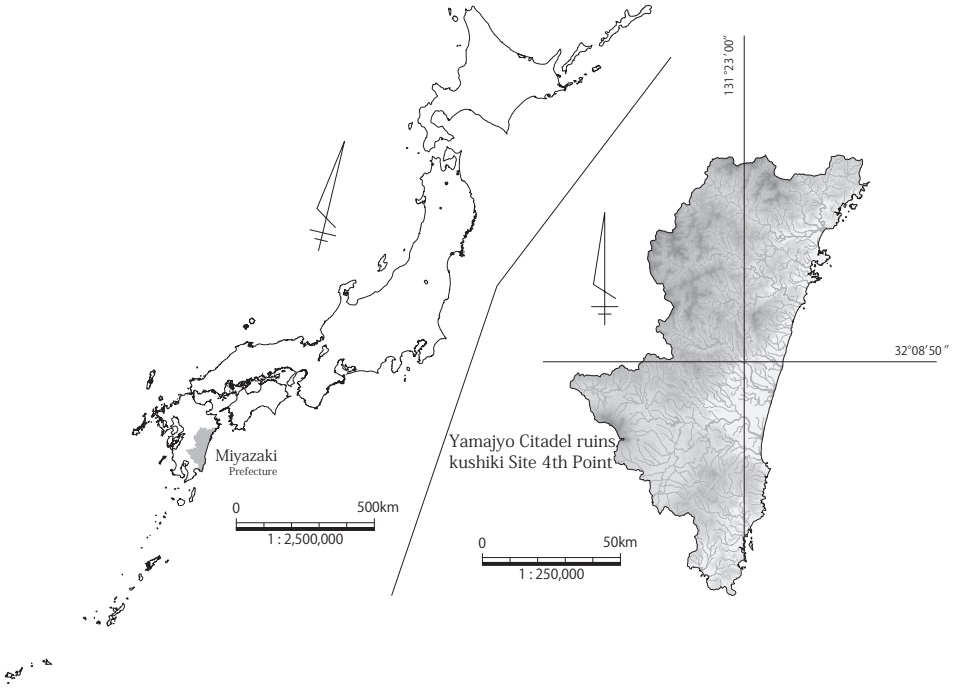
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第261集

西都市所在

山城城跡・串木遺跡第４地点

やまじょうしろあと　くしきいせき

県道杉安高鍋線（山城工区）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



２０２２

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、令和２年度に県道杉安高鍋線（山城工区）道路改良工事に伴い、西都市大字穂北字平城・串木で山城城跡・串木遺跡第４地点の発掘調査を実施しました。

本書は、その発掘調査の記録を掲載した報告書です。

今回の調査の結果、山城城跡では、古代から中世の柱の跡や溝状遺構、縄文時代早期の集石遺構を検出し、串木遺跡第４地点では、古墳時代中期の竪穴建物跡５軒を含む集落跡の一部や縄文時代早期の集石遺構の広がりを確認することができました。

今回の調査で確認された遺構や遺物は、穂北地区の地域的様相や一ツ瀬川左岸段丘上における古墳時代集落の展開を知る上で貴重な情報を提供するものとなりました。

この成果が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関、地元の方々に心よりお礼申し上げます。

令和４年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長　菊村　祐司

例　　言

1　本書は、県道杉安高鍋線（山城工区）道路改良工事に伴い、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した山城城跡・串木遺跡第４地点の発掘調査報告書である。

2　「串木遺跡」は昭和 63・平成元年度に発掘調査が行われ、串木第１遺跡、第２遺跡として報告書が刊行されている。今後名称等で混乱も予想されることから西都市教育委員会と協議を行い、今回、宮崎県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った２か所については、串木遺跡第３地点、同第４地点と呼称することとした。

3　発掘調査は、宮崎県西都土木事務所の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

4　山城城跡および串木遺跡第４地点の発掘調査の期間は、それぞれ以下のとおりである。

　山城城跡：令和２年８月 27 日～令和２年 11 月 13 日

　串木遺跡第４地点：令和２年 11 月 16 日～令和３年１月 12 日

5　現地調査における実測および写真撮影等の記録は、石塚啓祐・竹田享志・大竹進太郎・江藤建輔・橋本英俊が担当した。

6　委託業務に関して、現地調査における基準点測量業務を株式会社三興測量設計事務所、空中写真撮影業務を有限会社スカイサーベイ九州に、整理作業に伴う自然科学分析を株式会社古環境研究センター、石器実測を株式会社埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店に委託した。

7　本書に使用した遺物写真は、竹田の協力を得て、橋本が撮影した。

8　遺物および図面の整理は、宮崎県埋蔵文化財センターにて行った。図面の作成、実測、トレースは、整理作業員の補助を得て、主として橋本が行った。

9　本書で使用した位置図は、国土地理院発行の電子地図および西都市教育委員会発行の西都市遺跡詳細分布調査報告書（1986）をもとに作成した。

10　本書で使用する土層および土器等の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版　標準土色帖』に拠った。

11　石器の石材については赤崎広志に助言を受けたが、最終的な文責は編集者にある。

12　本書で使用した方位は、磁北（M．N）と表記するもの以外は、国土座標第Ⅱ系（世界測地系）座標北である。標高については海抜絶対高を示す。

13　本書使用した遺構略記号は以下のとおりである。

　ＳＡ……竪穴建物跡　　ＳＣ……土坑　　ＳＥ……溝状遺構　　ＳＩ……集石遺構

　ＳＨ……ピット

14　本書の執筆・編集は橋本が担当した。

15　出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査の組織……1
第３節　遺跡の立地と環境……2
１　地理的環境……2
２　歴史的環境……2
第Ⅱ章　発掘調査の概要
第１節　調査区の設定と経過……7
１　山城城跡……7
２　串木遺跡第４地点……8
第Ⅲ章　山城城跡の調査
第１節　基本層序……9
第２節　古代以降の遺構と遺物……9
１　遺構……9
（１）溝状遺構……9
（２）ピット群……11
２　遺物……11
第３節　縄文時代早期の遺構と遺物……14
１　遺構……14
（１）集石遺構……14
２　遺物……17
（１）縄文土器……17
（２）石器……17
第Ⅳ章　串木遺跡第４地点の調査
第１節　基本層序……25
第２節　古墳時代の遺構と遺物……25
第３節　縄文時代早期の遺構と遺物……39
第４節　時期不明の遺構と遺物……43
第Ⅴ章　自然科学分析の結果
第１節　自然科学分析の概要……53
第２節　放射性炭素年代測定……53
第３節　樹種同定……54
第Ⅵ章　総括
第１節　山城城跡の遺構と遺物……59
第２節　串木遺跡第４地点の遺構と遺物……59

挿　図　目　次

第１図　山城跡縄張り図…… 3
第２図　山城城跡・串木遺跡第４地点周辺の主要な遺跡分布図…… 4
第３図　山城城跡・串木遺跡第４地点調査区配置図…… 5
第４図　山城城跡・串木遺跡第４地点グリッド配置図…… 6
第５図　山城城跡調査区土層断面図…… 10
第６図　山城城跡古代以降の遺物実測図…… 11
第７図　山城城跡Ｂ区ＳＥ１平面・土層断面実測図…… 12
第８図　山城城跡Ｃ区 近世以降の遺構分布図 …… 13
第９図　山城城跡Ａ-１区 集石遺構、散礫分布図 …… 15
第10図　山城城跡ＳＩ１～ＳＩ５実測図…… 15
第11図　山城城跡Ａ-２、Ｂ区散礫出土状況図 …… 16
第12図　山城城跡出土遺物実測図（１）…… 18
第13図　山城城跡出土遺物実測図（２）…… 22
第14図　山城城跡出土遺物実測図（３）…… 23
第15図　山城城跡出土遺物実測図（４）…… 24
第16図　串木遺跡第４地点調査区土層断面図…… 26
第17図　串木遺跡第４地点遺構分布図…… 27
第18図　串木遺跡第４地点ＳＡ１～ＳＡ３平面・土層断面実測図…… 29
第19図　串木遺跡第４地点ＳＡ１出土遺物実測図（１）…… 30
第20図　串木遺跡第４地点ＳＡ１出土遺物実測図（２）…… 31
第21図　串木遺跡第４地点ＳＡ２出土遺物実測図（１）…… 33
第22図　串木遺跡第４地点ＳＡ２出土遺物実測図（２）…… 34
第23図　串木遺跡第４地点ＳＡ３出土遺物実測図…… 35
第24図　串木遺跡第４地点ＳＡ４平面・断面・土層断面図…… 36
第25図　串木遺跡第４地点ＳＡ４出土遺物実測図…… 37
第26図　串木遺跡第４地点ＳＡ５平面・柱穴断面・西壁土層断面及び出土遺物実測図…… 38
第27図　串木遺跡第４地点ＳＩ分布図…… 41
第28図　串木遺跡第４地点ＳＩ１～ＳＩ４実測図…… 41
第29図　串木遺跡第４地点ＳＩ５～ＳＩ８実測図…… 42
第30図　串木遺跡第４地点時期不明遺構分布図…… 45
第31図　串木遺跡第４地点ＳＣ・ＳＨ・ＳＥ・包含層出土遺物実測図…… 46
第32図　暦年較正結果…… 57

表　目　次

第１表　山城城跡出土遺物観察表…… 19
第２表　山城城跡出土石器計測表…… 21
第３表　串木遺跡第４地点出土遺物観察表（１）…… 47
第４表　串木遺跡第４地点出土遺物観察表（２）…… 48
第５表　串木遺跡第４地点出土遺物観察表（３）…… 49
第６表　串木遺跡第４地点出土遺物観察表（４）…… 50
第７表　串木遺跡第４地点出土遺物観察表（５）…… 51
第８表　串木遺跡第４地点出土土製品計測表…… 51
第９表　串木遺跡第４地点出土石器計測表…… 52
第10表　串木遺跡第４地点における放射性炭素年代測定結果…… 56
第11表　串木遺跡第４地点における出土炭化材の樹種同定結果…… 56

図　版　目　次

図版１　山城城跡・串木遺跡第４地点遠景…… 61
　１　山城城跡・串木遺跡第４地点遠景（北西より）
　２　山城城跡から平城跡を望む（南より）
図版２　串木遺跡第４地点調査区全景・近景…… 62
　１　串木遺跡第４地点調査区全景
　２　串木遺跡第４地点竪穴建物跡の切り合い（ＳＡ１～ＳＡ３）
図版３　山城城跡全景・溝状遺構・ピット群検出状況…… 63
　１　山城城跡調査区全景
　２　山城城跡土層断面（北西より）
　３　山城城跡ＳＨ・ＳＥ分布状況
　４　山城城跡Ｂ区 ＳＥ１検出状況（東より）
　５　山城城跡Ｂ区 ＳＨ検出状況（西より）
図版４　山城城跡溝状遺構・ピット群完掘・散礫検出状況…… 64
　１　山城城跡Ａ-２区 ＳＨ検出状況（南東より）
　２　山城城跡Ａ-１区 ＳＨ完掘状況（東より）
　３　山城城跡Ａ-２区 ＳＨ完掘状況（東より）
　４　山城城跡Ｂ区 ＳＨ・ＳＥ１完掘状況（東より）
　５　山城城跡Ａ-１・Ａ-２・Ｂ区散礫検出状況
図版５　山城城跡散礫・集石遺構検出状況…… 65
　１　山城城跡Ａ-１区 散礫検出状況
　２　山城城跡Ａ-２区 散礫検出状況（南東より）
　３　山城城跡Ｂ区 散礫検出状況（東より）
　４　山城城跡Ｃ区 散礫検出状況（西より）
　５　山城城跡Ａ-１区 ＳＩ～ＳＩ５検出状況（南より）
図版６　山城城跡出土土器…… 66
　１　山城城跡出土土師器
　２　山城城跡出土縄文土器（表）
　３　山城城跡出土縄文土器（裏）

図版７　山城城跡出土石器（１）…… 67
　　１　山城城跡出土石鏃・二次加工剥片（１）
　　２　山城城跡出土スクレイパー・二次加工剥片（２）・剥片
図版８　山城城跡出土石器（２）…… 68
　　１　山城城跡出土石核・磨製石斧・打製石斧未製品
　　２　山城城跡出土礫器・石錘・磨石・敲石
図版９　串木遺跡第４地点竪穴建物跡…… 69
　　１　串木遺跡第４地点 ＳＡ検出状況（北より）
　　２　串木遺跡第４地点 ＳＡ１～ＳＡ３床面遺物出土状況（北より）
　　３　串木遺跡第４地点 ＳＡ１完掘状況（北より）
　　４　串木遺跡第４地点 ＳＡ２完掘状況（北東より）
　　５　串木遺跡第４地点 ＳＡ４遺物出土状況（南西より）
　　６　串木遺跡第４地点 ＳＡ４貼床検出状況（北西より）
　　７　串木遺跡第４地点 ＳＡ５検出状況（南東より）
　　８　串木遺跡第４地点 ＳＡ５完掘状況（北東より）
図版10　串木遺跡第４地点集石遺構・溝状遺構…… 70
　　１　串木遺跡第４地点 ＳＩ１～ＳＩ３検出状況（北東より）
　　２　串木遺跡第４地点 ＳＩ１掘り込み完掘状況（北東より）
　　３　串木遺跡第４地点 ＳＩ４・ＳＩ５検出状況（西より）
　　４　串木遺跡第４地点 ＳＩ６検出状況（東より）
　　５　串木遺跡第４地点 ＳＩ７・ＳＩ８検出状況（東より）
　　６　串木遺跡第４地点 ＳＩ６掘り込み完掘状況（東より）
　　７　串木遺跡第４地点 ＳＥ１遺物出土状況（南より）
　　８　串木遺跡第４地点 ＳＡ掘削作業風景（北東より）
図版11　串木遺跡第４地点 ＳＡ１出土遺物（１）…… 71
　　１　串木遺跡第４地点 ＳＡ１出土土器（１）
　　２　串木遺跡第４地点 ＳＡ１出土土器（２）
　　３　串木遺跡第４地点 ＳＡ１出土土器（３）
図版12　串木遺跡第４地点 ＳＡ１出土遺物（２）…… 72
　　１　串木遺跡第４地点 ＳＡ１出土土器（４）
　　２　串木遺跡第４地点 ＳＡ１出土石器
図版13　串木遺跡第４地点 ＳＡ２出土遺物（１）…… 73
　　１　串木遺跡第４地点 ＳＡ２出土土器
　　２　串木遺跡第４地点 ＳＡ２出土石器（１）
図版14　串木遺跡第４地点 ＳＡ２出土遺物（２）・ＳＡ３出土遺物…… 74
　　１　串木遺跡第４地点 ＳＡ２出土石器（２）
　　２　串木遺跡第４地点 ＳＡ３出土土器
図版15　串木遺跡第４地点 ＳＡ４・ＳＡ５出土遺物 …… 75
　　１　串木遺跡第４地点 ＳＡ４出土土器
　　２　串木遺跡第４地点 ＳＡ４・ＳＡ５出土石器
図版16　串木遺跡第４地点 ＳＣ・ＳＥ・ＳＨ・包含層出土遺物 …… 76
　　１　串木遺跡第４地点 ＳＣ４・ＳＣ７出土土器
　　２　串木遺跡第４地点 ＳＥ１・ＳＨ出土遺物
　　３　串木遺跡第４地点包含層出土遺物

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

杉安高鍋線（県道 313 号）は、熊本県から西都市街地を経由せず宮崎市街地や宮崎港へアクセスする主要道路である。当該箇所（山城工区）は、大型運搬車両が頻繁に往来するものの、道幅が狭く見通しの悪さや急カーブに加え、歩道整備がなされていないなど、通勤・通学時の危険性から早期の道路改良工事が望まれていた。

平成 30 年６月 18 日付けで宮崎県文化財課が行った事業照会で、道路建設課から回答のあった県道杉安高鍋線道路改良工事に関し、路線内に周知の埋蔵文化財包蔵地２か所（山城城跡・串木遺跡）が存在することから平成 30 年 10 月 25 日付けで協議依頼を行った。

その後、埋蔵文化財の保護について協議を重ねてきたが、工事計画の変更が困難であるため、令和２年４月 23 日と７月２日に県文化財課が確認調査を実施した。調査の結果、古代の溝状遺構や中近世のピット群、縄文時代早期の土器・石器が確認されたことから、工事着手前に、山城城跡、串木遺跡第３地点、同第４地点の発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。発掘調査は西都土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。調査期間は、山城城跡の発掘調査が令和２年８月 17 日～令和２年 11 月 13 日、串木遺跡第４地点が令和２年 11 月 16 日～令和３年１月 12 日である。

第２節　調査の組織

山城城跡・串木遺跡第４地点の発掘調査及び整理作業・報告書作成は、下記の組織で実施した。

【調査主体】宮崎県教育委員会

【事業調整】宮崎県教育庁文化財課

埋蔵文化財担当リーダー	主幹	飯田　博之
埋蔵文化財担当	主査	藤木　　聡

【調査機関】宮崎県埋蔵文化財センター

令和２年度（発掘調査）

所長		山元　高光
副所長兼調査課長		赤崎　広志
総務課長		鈴木　勝代
調査課調査第二担当リーダー	主幹	東　　憲章
調査課調査第二担当	主査	橋本　英俊（調査・整理作業担当）
調査課調査第二担当	主査	石塚　啓祐（調査担当）
調査課調査第二担当	主査	竹田　享志（調査担当）

令和３年度　整理作業・報告書作成

所長	菊村　祐司
副所長	赤崎　広志
調査課長	飯田　博之
総務課長	鈴木　勝代

調査課調査第二担当リーダー　主幹　東　　憲章
調査課調査第二担当　　主査　橋本　英俊（発掘調査・整理作業担当）

第３節　遺跡の立地と環境

１　地理的環境

山城城跡・串木遺跡第４地点は、宮崎県西都市大字穂北に所在する。両遺跡とも、標高約 36 ｍの一ツ瀬川中流左岸段丘上に位置している。周囲には、九州山地を水源とする一ツ瀬川やその支流の瀬江川の恵みを受けた畑や水田が広がっている。低地との比高差は約 18 ｍである。串木遺跡第４地点の南側約 200 ｍには、県道杉安高鍋線の歩道整備事業に伴って発掘調査された串木遺跡第３地点（宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 260 集）が位置している。串木遺跡の範囲は、県道杉安高鍋線を挟んで 220,000 ㎡に及び、昭和 62 年及び平成元年度には、市道串木線の拡幅及び排水路整備工事に伴い、西都市教育委員会による串木第１遺跡及び串木第２遺跡の発掘調査が行われている。

２　歴史的環境

本遺跡が所在する一ツ瀬川の周辺には、縄文時代早期から中世にかけて数多くの遺跡が確認されている。(第２図)。

縄文時代の遺跡については、左岸側の串木第２遺跡で縄文時代早期の集石遺構３基、遺構に伴っていないものの押型文・貝殻条痕文・塞ノ神式・曽畑式・草野式・三万田式などバリエーションに富んだ縄文土器の出土が確認されている。また、串木第１遺跡では、串木遺跡第３地点と類似した配石遺構（県埋蔵文化財発掘調査報告書第 260 集第Ⅲ章第６節参照）が検出されている。

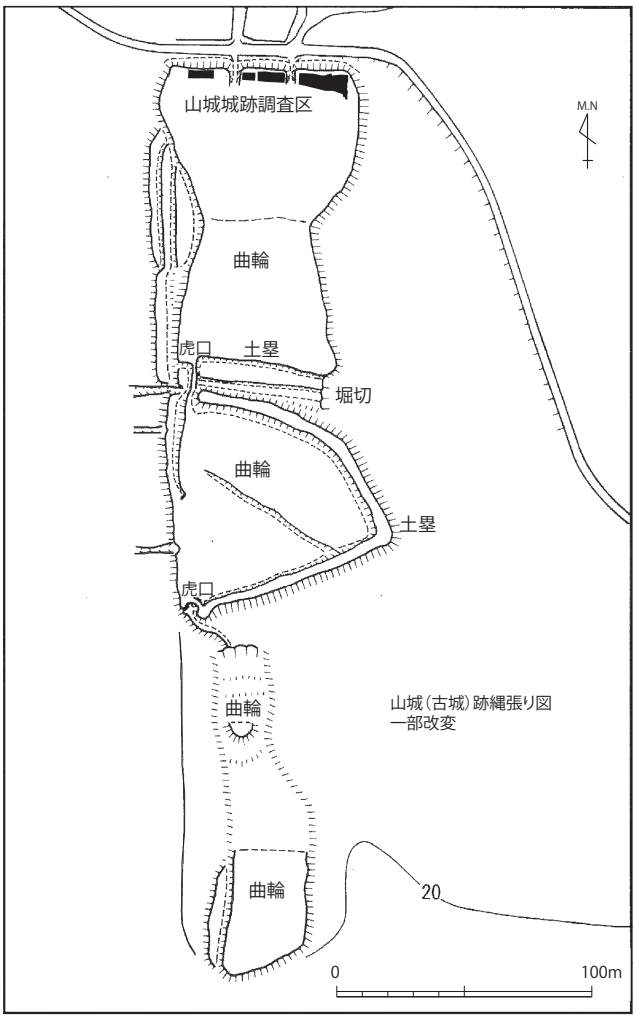
弥生時代では、串木第２遺跡で下城式系の甕や有肩打製石斧を伴った不整円形プランの住居跡１軒、方形プランを基調とした住居跡２軒（１軒は壁面に不整形の突出が認められる）が検出されている。住居跡は弥生中期後半～後期前半の時期であり、ほぼ同時期の住居跡としては、５㎞下流の一ツ瀬川左岸台地に位置する新田原遺跡で、花弁状住居跡や下城式系の弥生土器が確認されている。

また、串木第２遺跡では、石錘約 40 点が出土しており、串木遺跡第３地点でも調査区東側を中心にまとまった石錘の出土が認められている。こうした傾向は、一ツ瀬川右岸の宝財原遺跡においても多量の石錘の出土が認められるなど､一ツ瀬川やその支流域で漁撈活動が盛んに営まれていたと推定される。

古墳時代では、串木第２遺跡で古墳時代の住居跡１軒が検出されている。また、串木遺跡の北側には上穂北古墳群が立地し､東側を南流する瀬江川を挟んだ対岸の標高約 120 ～ 130 ｍの茶臼原台地上には、前方後円墳３基・円墳 52 基で構成される茶臼原古墳群が分布する。楯型の周堀を有する前方後円墳である児屋根塚古墳からは、内区に青竜と白虎、外周の銘帯に文字が浮彫りされた舶載四獣鏡や、蛇行剣など貴重な資料が出土している。茶臼原台地西側および南側傾斜面には、西都市内に３基のみ存在する横穴式石室を有する前方後円墳である千畑古墳（国指定前方後円墳）を始めとし、上江・囲・野竹等、数十基におよぶ横穴墓群が点在している。さらに南東に目を転じると、新田原古墳群が所在する新田原台地を眺望することができる。また、一ツ瀬川右岸には、320 基以上の古墳が分布する西都原古墳群が立地し、その中央には九州随一を誇る男狭穂塚・女狭穂塚古墳（陵墓参考地）の両巨大古墳がその偉容を誇っている。

中世から近世については、集落跡やその生産基盤となる水田跡・畑跡等は確認されていないものの、周囲には中世城館が数多く分布している。今回、調査を行った山城城跡は、『日向地誌』に古城の別称

がみられる。南東約２㎞に伊東氏四十八城の一つに数えられる穂北城が遠望できる。穂北城跡は平成元年から数回にわたって発掘調査が行われた。６つの曲輪と堀、土塁、虎口で構成され、それぞれの曲輪が高低差によって区切られる南九州に典型的な中世山城である。曲輪内から、華南三彩の盤、青磁、白磁、染付等の輸入陶磁器、土錘、土師皿等が出土している。南に約 10 ㎞には主城とされる都於郡城跡を望み、南東には、西都市と新富町に跨る有峰城を遠望することができる。そのほか、串木第１遺跡の東側には穂北神社が存在し、西側には古くから寺が存在したと言い伝えられている。また、山城城跡の東側（周知の串木遺跡の北西端）の竹林中には、五輪塔などの石塔の存在が知られており、他にも寺の言い伝えが残る場所が複数あることや、土師皿片が確認できる地点があることから、周囲に城館跡や寺跡関連遺構等が点在していた可能性が高い。



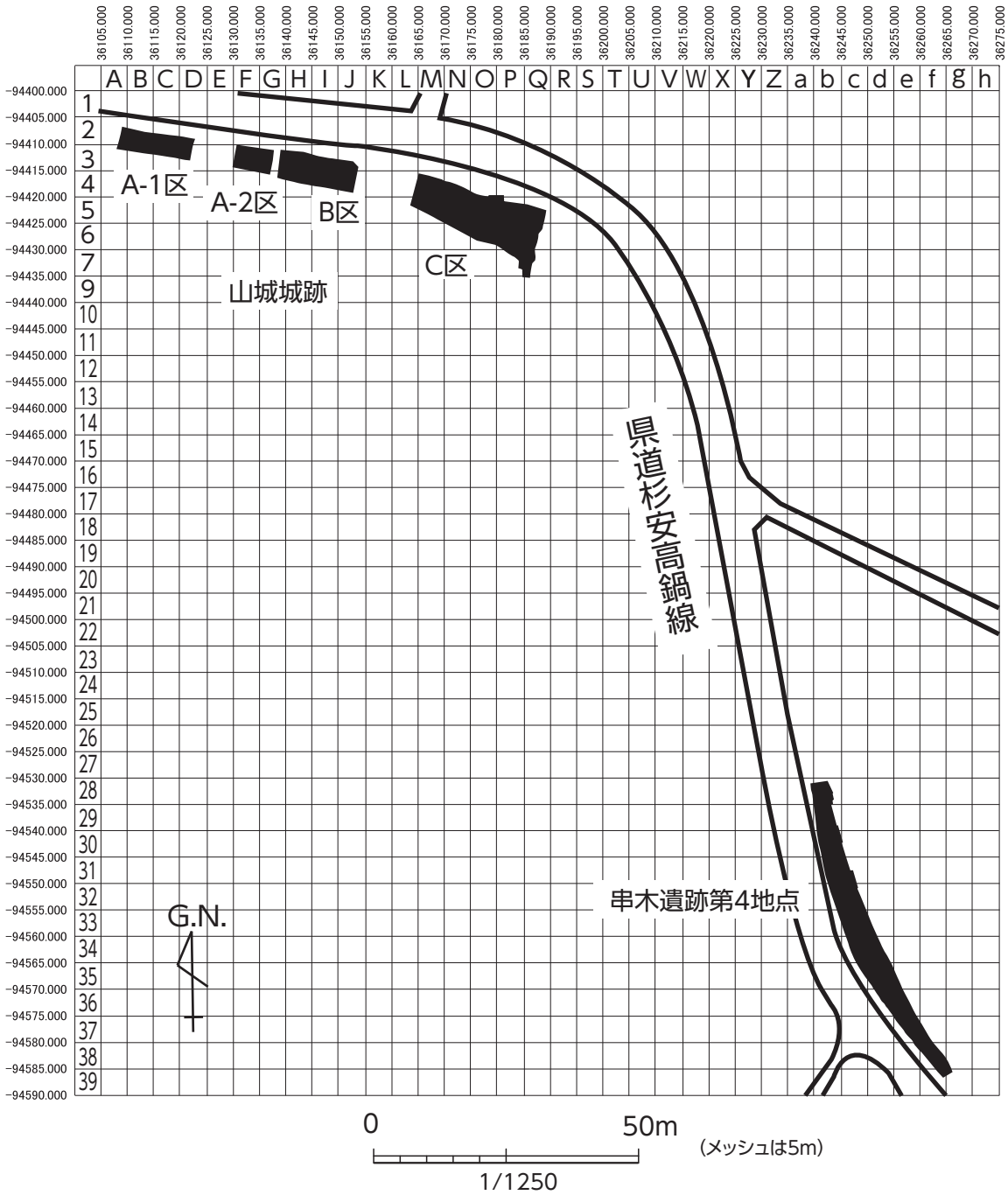
第１図　山城跡縄張り図

【参考・引用文献】
平部峡南1976 『日向地誌』
宮崎県1984 『妻・高鍋地域 土地分類基本調査 妻・高鍋』
西都市教育委員会1986 『西都市遺跡詳細分布調査報告書』
西都市教育委員会1991 『串木第１遺跡・串木第２遺跡・岳惣寺遺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
宮崎県教育委員会1992 『穂北城跡県道杉安・高鍋線道路改良工事関係発掘調査報告書』
西都市教育委員会1994 『宝財原遺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集
宮崎県教育委員会1998 『中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅰ』

1	山城城跡	2	串木遺跡第3地点	3	串木遺跡第４地点	4	串木第１遺跡	5	串木第2遺跡
6	平城遺跡	7	上穂北古墳群	8	大木原遺跡	9	大木原古墳	10	串木横穴墓群
11	上江横穴墓群	12	囲横穴墓	13	千畑遺跡	14	千畑古墳	15	茶臼原古墳群
16	竹尾寺跡	17	上野遺跡	18	牧ノ原遺跡	19	穂北城跡	20	千畑横穴墓群
21	松船横穴墓	22	杉尾横穴墓	23	轟遺跡	24	宝財原遺跡	25	丸山遺跡
26	西都原遺跡	27	西都原古墳群	28	石貫遺跡	29	童子丸遺跡	30	堂ヶ島遺跡
31	寺原遺跡	32	法元遺跡	33	堂ヶ島遺跡	34	上妻遺跡		

第２図　山城城跡・串木遺跡第４地点周辺の主要な遺跡分布図

第３図　山城城跡・串木遺跡第４地点調査区配置図



第４図　山城城跡・串木遺跡第４地点グリッド配置図

第Ⅱ章　発掘調査の概要

第１節　調査区の設定と経過

発掘調査は、道路改良工事の工程計画に合わせて山城城跡から着手し、その終了後に串木遺跡第４地点を開始した。山城城跡は調査区を南から４か所（A−１・A−２・B・C区）（第４図）に設定し、家屋移転後のB区より開始し、C区、A−１区、A−２区と順次調査を進めた。調査区の幅が約４～８mと狭いこと、山城城跡から串木遺跡第４地点までの距離が約250 mと離れていることから、それぞれの遺跡に仮の基準杭を設置した。調査終了後、図面上でグリッド（南北方向に整数、東西方向にアルファベットを付したものを組み合わせた）を設定した。

調査は重機により表土の除去を行った。B区は、家屋の基礎が想定より浅かったこともあり、アカホヤ火山灰の残存が確認された。アカホヤ火山灰層上面で遺構検出を行うとともに、調査区外周に排水を兼ねてサブトレンチを掘削し、旧地形の傾斜と土層の堆積状況の確認を行った。Ⅲ層（アカホヤ火山灰）が削平されている他の調査区では、Ⅳ層（黒色土）ないしⅤ層（暗褐色土）で精査を実施した。

串木遺跡第４地点では、南東から重機による表土の掘削を行った後、旧地形の残存状況に合わせて人力で掘り下げを行った。遺物は、トータルステーションを用いて取り上げ、遺構は、検出後に通し番号を付し、写真撮影を行った後、土層観察用のベルトを残しながら平面的に掘り下げた。

１　山城城跡（令和２年度：日誌抄）

８月27日　調査前準備。排土流出防止・安全対策等情報共有。西都市教育委員会、地元の方への挨拶。

９月８日　地権者立会いの下、事務所等敷設箇所の造成を開始。

９月９日　路線内の懸案事項について西都土木事務所担当者と現地で情報共有し、調査方針を確認。山城城跡B区より重機による掘削を開始。残存するアカホヤ火山灰層で精査し、溝状遺構、ピット群を検出。通学路にあたる穂北中学校等へ挨拶。

９月14日　曲輪東縁にあたるC区の表土を重機により除去。アカホヤ火山灰層は消失しており、土取り等の攪乱が激しく、包含層は東側でⅤ層（暗褐色土）、西側はⅥ層（褐色土）が残存。近現代の溝状遺構とともに押型文土器や剥片、石鏃等が散漫に出土。

10月５日　A−１、A−２区の表土を重機で除去。アカホヤ火山灰の残存は部分的。Ⅴ層（暗褐色土）面で散礫を確認。

10月15日　B区のアカホヤ火山灰層面で、ピット群と溝状遺構の完掘写真撮影。

10月16日　A−１区散礫を精査し、集石遺構を検出。A−２区、B区、C区について遺物の出土位置を記録し取り上げ。調査区壁面の土層断面の分層注記。並行して空撮に備え周辺環境の整備。

10月20日　山城城跡アカホヤ火山灰層残存部分の遺構完掘状況を空中写真撮影。散礫の分布状況記録。

10月26日　重機を使用してアカホヤ除去。縄文時代早期面の遺構検出を開始。

11月４日　A−１区で縄文時代早期の集石遺構５基と周囲に黒曜石片を確認。A−２区の散礫は集石遺構としてのまとまりは認められない。

11月６日　B区のⅤ層（暗褐色土）以下をサブトレンチで掘削。礫が散在するも集石遺構はなし。

11月13日　A−１、A−２、B区　集石遺構および散礫分布状況の空中写真撮影。集石遺構の実測作業を残し、掘削作業終了。

２　串木遺跡第４地点（令和２年度：日誌抄）

11月９日　安全対策と通学路の確保のため、県道と調査区の間に仮設ガードレールを設置。重機により表土除去。アカホヤ火山灰層は調査区南西側に残存。アカホヤ混黒色土で縄文土器片・石錘が出土。

11月11日　調査区壁面精査。土層の堆積状況から旧地形は、北（山城城跡側）に向かって高くなっていたと考えられる。調査区中央から北側の表土下はⅣ層上面まで削平を受け、縄文時代早期の散礫が露出。

11月16日　発掘作業員による掘削開始。調査区南側から中央部にかけて残存するアカホヤ火山灰層面で、竪穴建物跡と考えられる不整円形と方形の切り合いを３か所確認。ローリングタワー上からプランを確認し、周辺を精査。

11月17日　竪穴建物跡とみられる遺構と数か所のにじみ部分に、土層観察用のベルトを設定し、掘削開始。平面検出段階で切り合い関係を含め、建物跡は５軒程度と推定。

11月18日　調査区内に点在するピット群と溝状遺構の範囲確認と半截掘削。

11月19日　調査区南端で１号溝状遺構を確認。土層観察用のベルトを残して掘削開始。

11月24日　切り合った複数の建物跡は、平面及び断面観察の結果、３軒の切り合いと判断。また、調査区中央に床面付近がわずかに残る方形プランの建物跡（ＳＡ４）を確認。四分法で掘削開始。

11月25日　切り合った３軒の建物跡について、土層観察用のベルトを残し、遺物の出土位置を記録。並行し、床面までの掘削。ＳＡ４の床面中央部で焼土の広がりを確認。

11月26日　３軒の建物跡の中央に位置するＳＡ１の床面付近に完形の小形丸底壺、南西側床面付近に焼土２か所と炭化材を確認。南側に隣接するＳＡ２床面で大型の台石２個体、須恵器坏身、高坏脚部が出土。

12月１日　建物跡（ＳＡ１～ＳＡ４）の掘削と精査を開始。

12月７日　建物跡の平面図および分布図作成。

12月９日　建物跡床面遺物の取り上げ。調査区北西側Ⅵ層（褐色土）面で、一部環状に巡る小穴群を確認。

12月11日　調査区北端の排土置き場への動線上に建物跡（ＳＡ５）の一部を確認。重機により掘削範囲を拡張し遺構の広がりを確認。周囲のＶ層（暗褐色土）面に散在する礫の分布状況を記録。Ｖ層下面で集石遺構５基を確認。

12月14日　３軒切り合った建物跡のうち（ＳＡ１、２）の貼床を掘削し、掘方を確認。土層堆積状況が良好な調査区中央部のⅢ層（アカホヤ火山灰）を重機で除去。Ⅵ層上面で縄文時代早期の集石遺構３基を検出。

12月16日　縄文時代早期の集石遺構８基、調査区全体の遺構分布図、調査区南西側壁面分層および実測。

12月23日　調査区内全体を再度精査し、図面記録を追加。

12月25日　掘削範囲の埋め戻し作業完了。西都土木事務所へ発掘調査終了の連絡。

第Ⅲ章　山城城跡の調査

第１節　基本層序

山城城跡は、北側の平城跡の立地する丘陵から南に向かって延びる標高約 36 ｍの尾根上に立地し、南端部から一ツ瀬川の比高差は約 10 ｍを測る。今回の対象地は、宅地、畑等、区画された調査区が複数あったため、便宜上、西からＡ−１区、Ａ−２区、Ｂ区、Ｃ区の４区画に分けて調査を行った。重機による表土剥ぎの結果、住宅の造成や畑の耕作、土取り等による影響を少なからず受けていることが確認された。

基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：表土（耕作土）層厚は約 10 ～ 15 ㎝

Ⅱ層：黒色土（Hue10YR2/1）弱い粘性を帯びる。

Ⅲ層：鬼界アカホヤ火山灰層（K-Ah 約 7,300 年前）層厚は約５～ 10 ㎝

Ⅳ層：黒色土（Hue7.5YR2/1）やや粘性を帯びる 層厚は約 15 ～ 30 ㎝

Ⅴ層：暗褐色土（Hue7.5YR3/4）縄文時代早期遺物包含層

Ⅵ層：褐色土（Hue7.5YR4/6）縄文時代早期遺物包含層

Ⅶ層：明褐色土（Hue7.5YR5/6）粘性を帯びる

Ⅷ層：褐灰色土（Hue7.5YR4/1）強い粘性を帯びる １～２㎜程度の乳白色、黄色の粒子を少量含む

Ⅸ層：褐灰色シルト（Hue7.5YR5/1）

Ⅹ層：砂礫層（Ｃ区東端で確認）

各調査区の堆積状況は以下のとおりである。

山城城跡

Ａ−１区：調査区西端は大きく削平を受け、Ⅵ層（褐色土）まで消失している。また南側に向かって谷地形が入る。調査区の一部がⅤ層（暗褐色土）面まで削平を受けている。

Ａ−２区：Ａ−１区との間に小さな谷地形が入っていたと考えられ、Ⅶ層（明褐色土）付近まで削平された後に、盛土が行われている。調査区東半分にはⅢ層（鬼界アカホヤ火山灰層）の残存が認められた。

Ｂ　区：移転家屋の平坦な基礎の下に、Ⅲ層が残存し、周囲に部分的にⅡ層（黒色土）が確認された。

Ｃ　区：調査区東端は山城城跡の曲輪の縁辺にあたると考えられるが、調査区の東側では北から一ツ瀬川方向に延びる谷地形が入り、一部Ⅹ層（砂礫）が確認できる。耕作や土取りの影響で中央部から東側はⅥ層上面、西側はⅤ層上面まで削平されていた。

第２節　古代以降の遺構と遺物

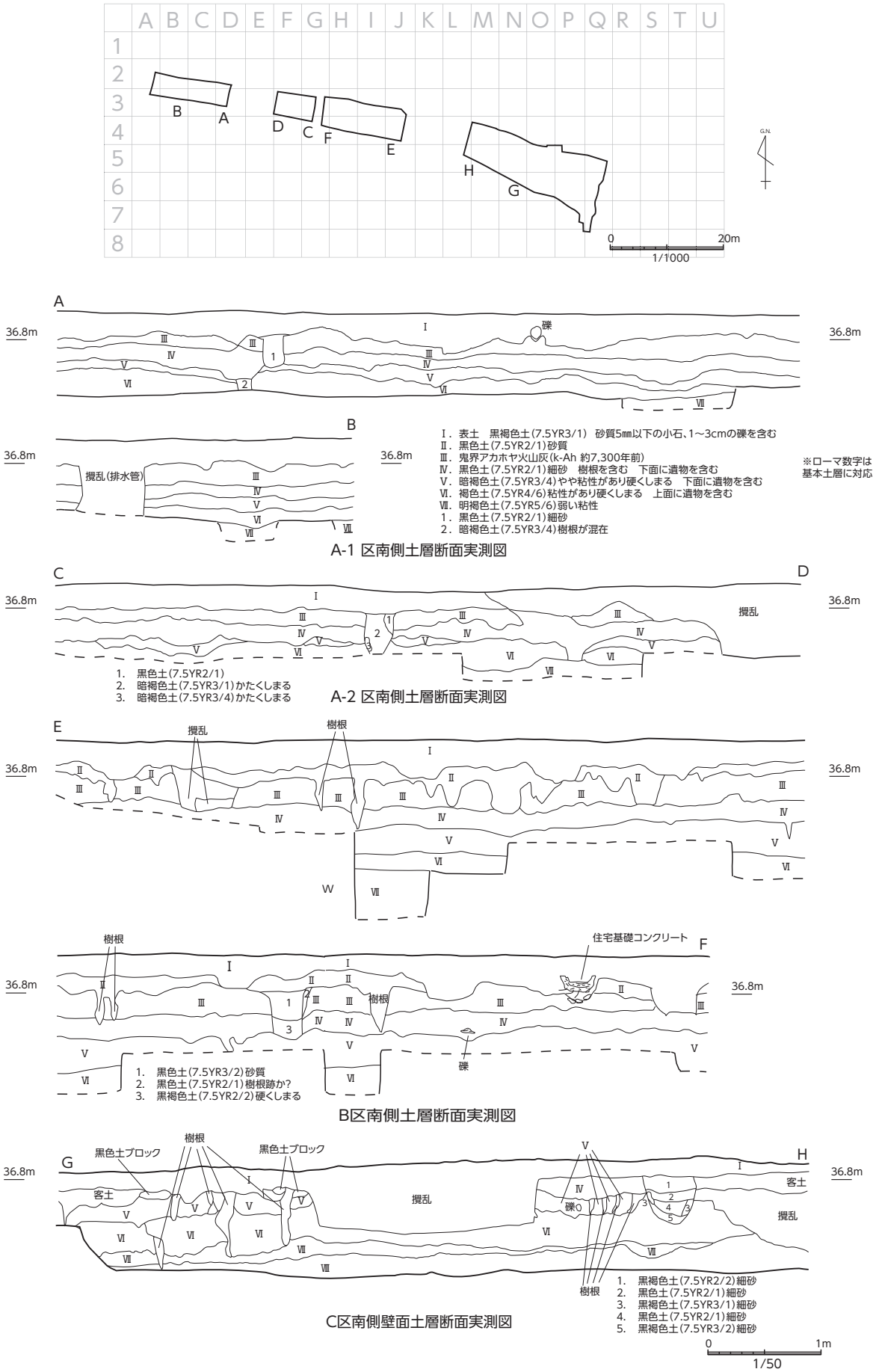
１　遺構

Ｂ区で溝状遺構１条とピット群、Ｃ区で溝状遺構２条を検出した。

（１）溝状遺構

１号溝状遺構（第７図）

１号溝状遺構（ＳＥ１）は、Ｂ区の北側で南東から北西にかけて検出された。両端は調査区外へ延びており、完掘時の計測値は、最大長約 6.5 ｍ、最大幅 0.55m、深さ 0.65 ｍを測る。N-62°-E を指向し、断面は



第５図　山城城跡調査区土層断面図

逆台形を呈する。床面は、ほぼ平坦である。検出された遺物は、石器１点（42）（第15図）で、溝の時期に帰属するものとは考えにくい。調査範囲内では、溝状遺構より北側にピットの広がりは認められなかった。埋土はピット群と類似したⅡ層由来の黒色土であることから、古代以降の所産としておきたい。

２号溝状遺構（第８図）

２号溝状遺構（ＳＥ２）は、Ｃ区中央東側の、Ｏ５グリッドからＰ５グリッドにかけて検出された。調査区北側壁面の樹木の攪乱中で検出されたため、掘り込み面は不明である。溝状遺構の軸方向はN-18°-Eで、直線的に延び、南西側に向け浅くなり消失する。現存長4.5ｍ、幅約0.25ｍ、検出面からの深さは0.08ｍを測り、断面は浅いＵ字状を呈する。埋土からは剥片、局部磨製石斧、礫、粘土瓦片が出土している。溝状遺構の用途を特定するには至らなかった。埋土に含まれる瓦等の遺物から、近現代の所産と考えられる。

３号溝状遺構（第８図）

３号溝状遺構（ＳＥ３）は、Ｃ区の中央西側の、Ｎ４グリッドからＭ５グリッドにかけて検出された。溝状遺構はN-18°-Eに延び、南北両端とも調査区外へ延びている。現存長8.5ｍ、幅約0.3ｍ、検出面からの深さは0.2ｍを測り、断面はＵ字状を呈する。文化財課による確認調査で、土師器坏（第６図１）が出土した遺構と同一のものである。

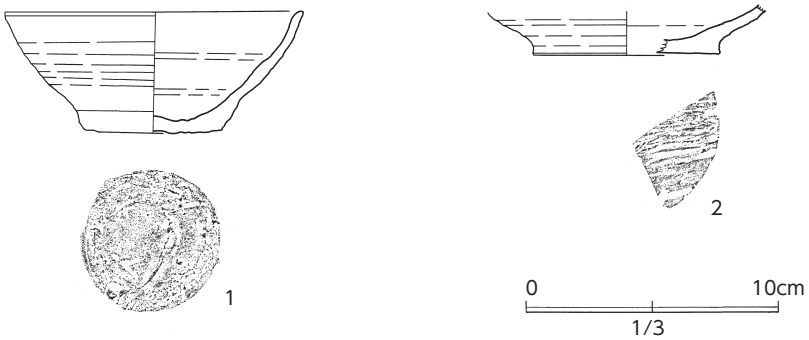
（２）ピット群

ピット群はＢ区を中心に分布し、106個に番号を付した（第７図）。直径0.2～0.6ｍ、深さ0.3～0.8ｍを測る。埋土はⅡ層に由来する黒色土で、アカホヤ火山灰の粒を少量混入するものと、混入の認められないものに大別できる。ピットの埋土内から、土師器小片や焼土を含んだものも認められた。現地で掘立柱建物の復元を試みたが、建物となるものはみられなかった。曲輪（第１図）の短軸に沿う方向に軸をそろえるように並ぶものは、柵列的な役割も想定される。また、ピット群は主として南側の調査区外へ延びていくものと推定される。

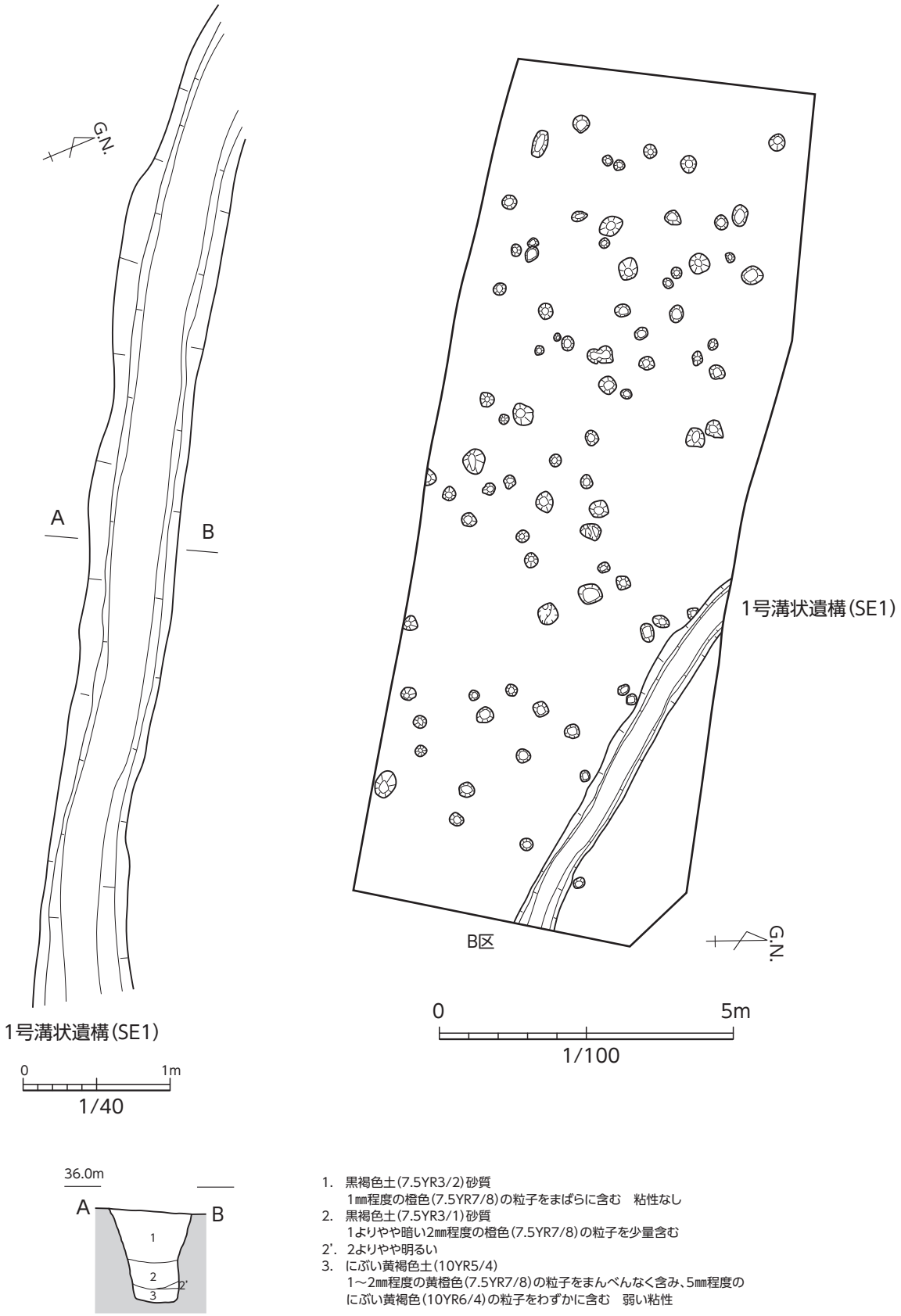
一方、Ａ-１、Ａ-２区で検出されたピットは、後世の削平の影響もあり、分布状況は散漫である。Ｃ区では曲輪の縁辺の掘削を行ったが、表土下はⅥ層上面付近まで消失しており、遺構の広がりは確認されなかった。

２　遺物

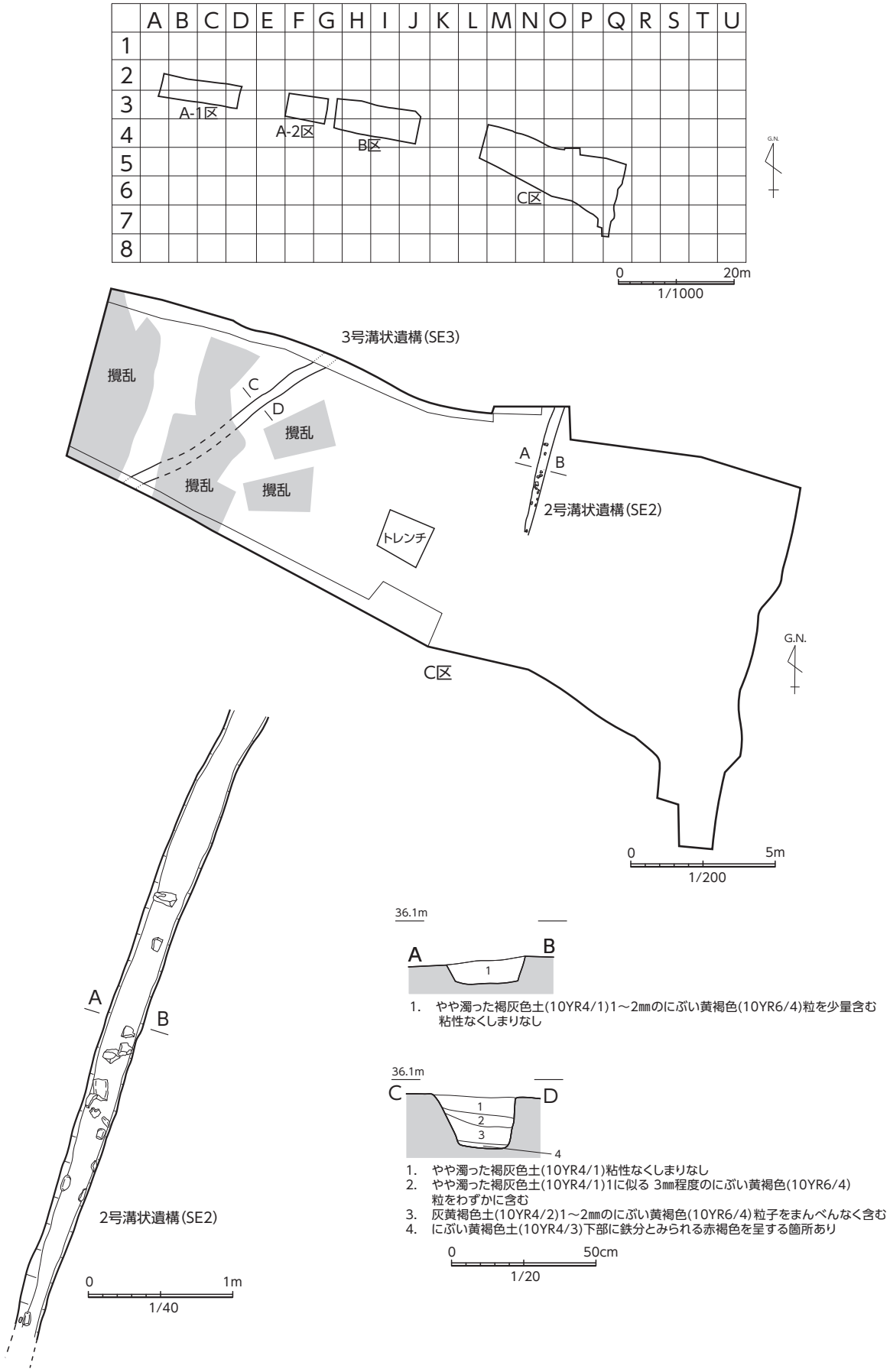
古代と考えられる遺物は、Ｃ区で坏２点が確認された。１は、確認調査の際、３号溝状遺構の近くに設定したトレンチで出土した。法量は口径11.9㎝、底径5.5㎝、器高4.9㎝を測る。底部から体部にかけ、やや直線的に立ち上がり、緩やかに内湾しながら口縁にいたる。口縁端部は、外方向に尖り気味におさめられる。１、２ともに底部はヘラ切りである。２は包含層出土である。胎土は精良で、内外面には丁寧なナデ調整が施される。



第６図　山城城跡古代以降の遺物実測図



第７図　山城城跡Ｂ区ＳＥ１平面・土層断面実測図



第８図　山城城跡Ｃ区近世以降の遺構分布図

第３節　縄文時代早期の遺構と遺物

１　遺構

Ａ−１区で５基の集石遺構を検出した（第９図）。

（１）集石遺構

１号集石遺構（ＳＩ１）（第 10 図）

Ａ−１区の中央付近、Ｖ層下部とⅥ層の漸移的な層位で検出された。５基確認された集石遺構のほぼ中央に位置し、最も大型で礫の密集度が高い。礫は約 1.2 ｍ×約 0.8 ｍの範囲に広がり、うすく赤化した砂岩の拳大から人頭大の破砕された焼礫で構成される。下部の掘り込みの平面形は長軸 1.0 ｍ、短軸 0.8 ｍの楕円形で、中央より南西側には、テラス状の平坦面が認められた。断面形はＵ字状を呈する。検出面からの深さは約 0.2 ｍを測り、配石は認められなかった。埋土はⅣ層由来の黒色土を主体とし、遺物や炭化物の出土はみられなかった。

２号集石遺構（ＳＩ２）（第 10 図）

ＳＩ１の南西側約 1.2 ｍに位置する。礫は、0.7 ｍ× 0.7 ｍの範囲に広がり、ＳＩ１と比較し、円礫や亜円礫が多く含まれる。すべて砂岩で構成され、大半は被熱によりうすく赤化しているものの、顕著な赤化等はみられなかった。下部の掘り込みの平面形は長軸 0.7 ｍ、短軸 0.65 ｍの円形で、検出面からの深さは 0.1 ｍを測り、浅い皿状の掘り込みを有するが、底面に配石は認められなかった。また、埋土内には遺構に伴う遺物や炭化物の出土はみられなかった。

３号集石遺構（ＳＩ３）（第 10 図）

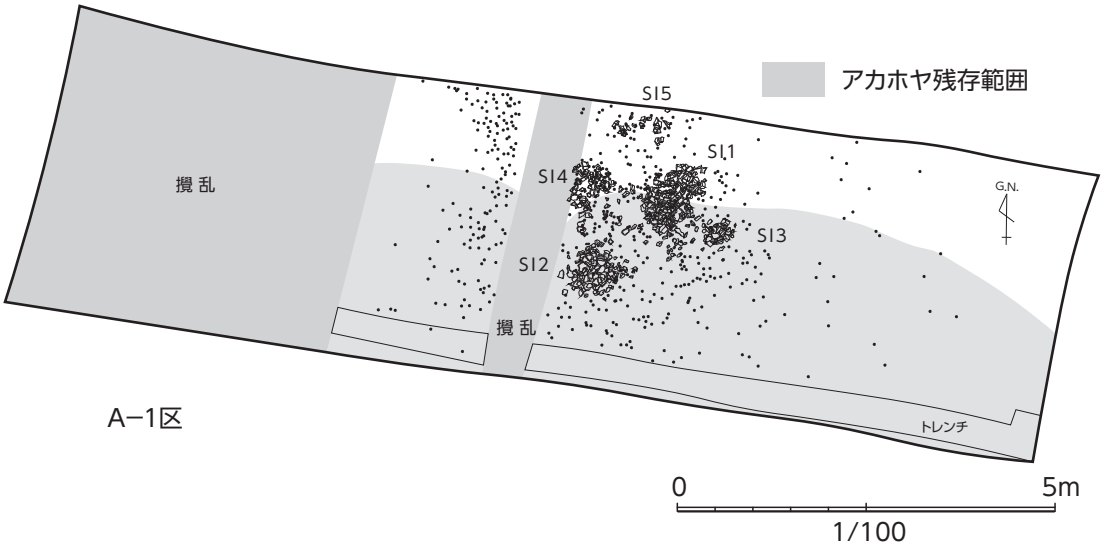
ＳＩ１の南東約 0.5 ｍに近接する。検出時には、ＳＩ１と同遺構の可能性を考えたが、精査を進めていく中で、礫の空白部分が広がることや、単独である程度密集したまとまりがみられたことから別遺構とした。５基の集石遺構の中でもっとも規模が小さい。礫は 0.4 ｍ× 0.3 ｍの範囲に広がり、10 ㎝〜 15 ㎝の砂岩礫で構成され、うすく赤化が認められる。掘り込みは楕円形で 0.47 ｍ× 0.45 ｍを測る。断面は浅い皿状で検出面からの深さは３㎝と浅い。配石は認められなかった。埋土はＶ層の黒褐色土で、遺物や炭化物の出土はみられなかった。

４号集石遺構（ＳＩ４）（第 10 図）

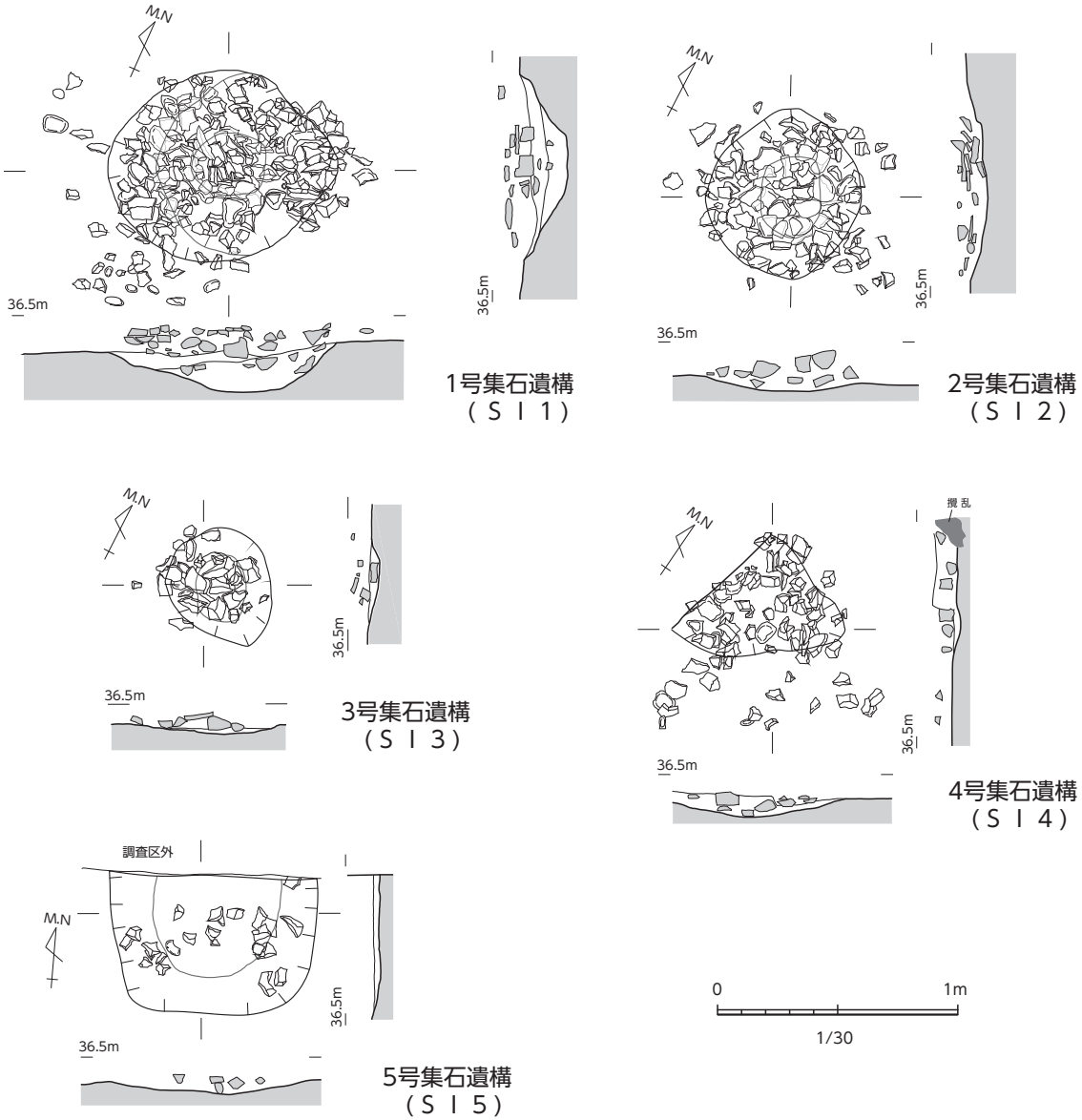
ＳＩ４は、ＳＩ１の西約１ｍに位置する。礫は 1.0 ｍ× 0.8 ｍの範囲に広がり、被熱により割れたとみられる砂岩で、赤化が認められる。遺構の西側は南北方向に延びる排水管敷設の影響を受け消失している。礫の散らばりや、壁面に残る礫の状況から、集石遺構の一部が残存したものと考えらえる。周囲にも散礫等がみられることから、集石遺構が別に存在していた可能性がある。下部の掘り込みは、現存規模で、長軸 0.6 ｍ、短軸 0.4 ｍ、検出面からの深さは７㎝、断面は浅い皿状を呈し、配石は認められなかった。埋土はＶ層の黒褐色土で、遺物や炭化物の出土はみられなかった。

５号集石遺構（ＳＩ５）（第 10 図）

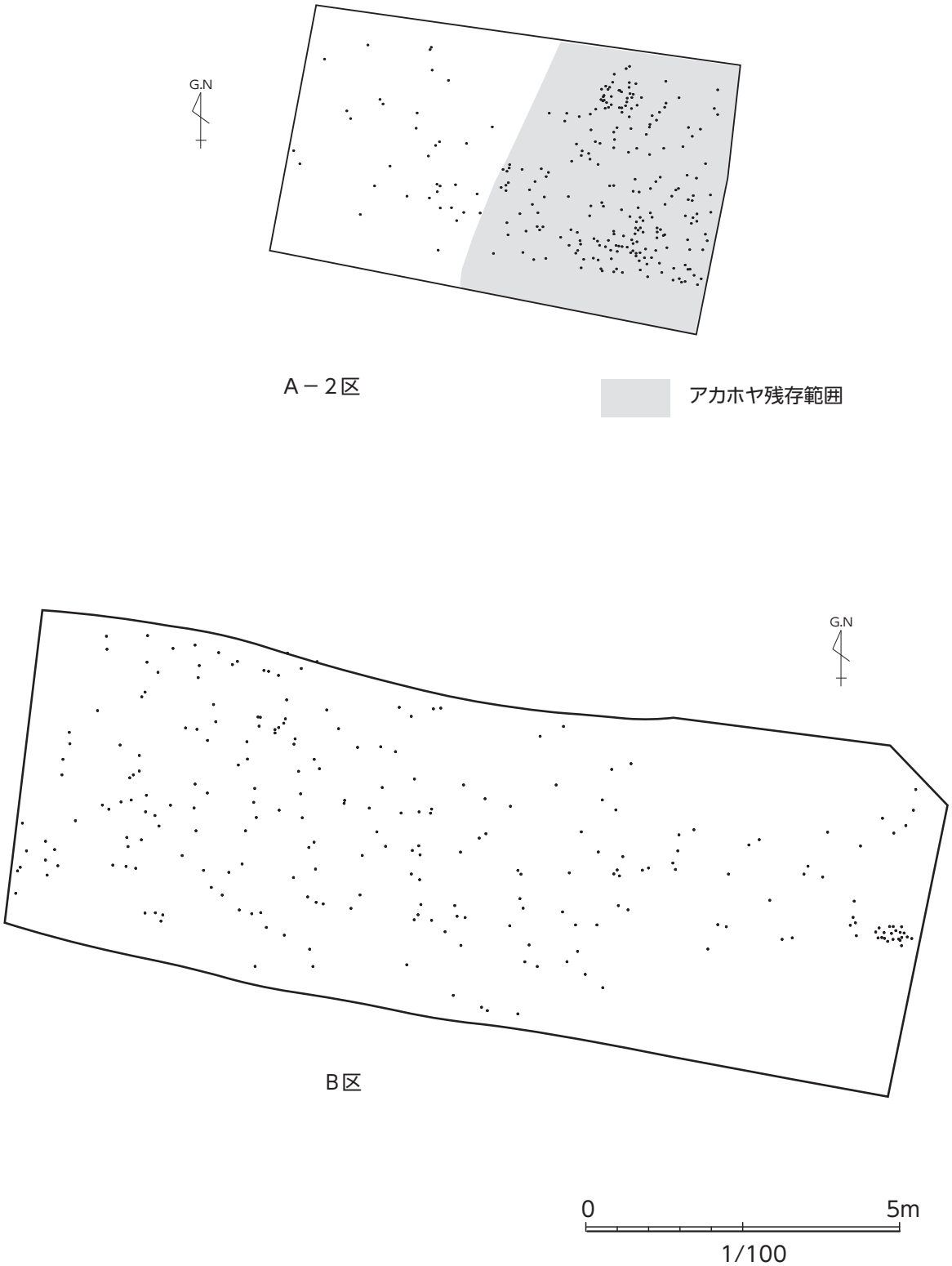
ＳＩ５は、ＳＩ１の北西約１ｍに位置する。遺構の北側部分は東西方向に溝状の攪乱を受け、礫が疎の状態である。一方、調査区北壁の断面に礫が確認されることから、集石遺構の広がりが推定される。礫は、0.7 ｍ× 0.5 ｍの範囲に広がり、被熱によって割れたと考えられる扁平な砂岩の角礫で構成され、赤化している。下部の掘り込みは、現存長で長軸 0.8 ｍ、短軸 0.6 ｍ、検出面からの深さは４㎝を測り、断面は浅い皿状を呈する。配石は認められず、炭化物や遺物の出土もみられなかった。



第９図　山城城跡Ａ−１区集石遺構、散礫分布図



第 10 図　山城城跡ＳＩ１〜ＳＩ５実測図



第 11 図　山城城跡Ａ-２、Ｂ区散礫出土状況図

2　遺物

（1）縄文土器

縄文時代早期に位置づけられる土器は、包含層であるⅤ層（暗褐色土）やⅥ層（褐色土）で出土した。縄文土器は小片が多く、器形による分類が困難なため、文様や施文部位に主眼をおき分類を行った。なお、個々の遺物の詳細については遺物観察表（第１表）を参照されたい。

Ⅰ類（第 12 図３～７）

条痕文をもつ土器をⅠ類とした。３～６は粗製の深鉢で、外面に横位、斜位の貝殻条痕文をもつ一群である。口縁部はやや丸みをおびる。内面はナデ調整が施される。７は小片で判然としないため、ここに分類したが、文様は斜方向の沈線の可能性がある。

Ⅱ類（第 12 図８～ 13）

押型文の土器をⅡ類とした。８～ 11 は、外面に楕円押型文を有する。８の口縁部には、押型文は施されず、横方向のナデ調整のみである。口縁内面の上部には、棒状の工具による斜方向の押圧が施され、下部には楕円押型文がみられる。口縁端部は平坦に仕上げられる。12、13 は外面に山形押型文が施され、内面はナデ調整である。12 の外面には、やや幅広い間隔の山形押型文が施され、口唇部は平坦である。13 は密に連続した山形押型文が観察される。

Ⅲ類（第 12 図 14 ～ 16）

無文土器をⅢ類とした。14、15 は無文土器の深鉢であり粗製である。14、15 ともに内外面はナデ調整が施される。15 は底部付近にあたると考えられる。16 は深鉢の底部である。やや厚手で平底を呈するとみられる。内外面ともにナデ調整が施される。Ⅲ類は、無文土器としたが、Ⅰ類の胴部、底部の可能性もある。

（2）石器

石器は、山城城跡の各調査区のⅤ層下面～Ⅵ層で石鏃、スクレイパー、剥片、石核、打製石斧、磨製石斧、石錘、礫器、磨石、敲石などがまばらに出土した。

石鏃（第 13 図 17・18）

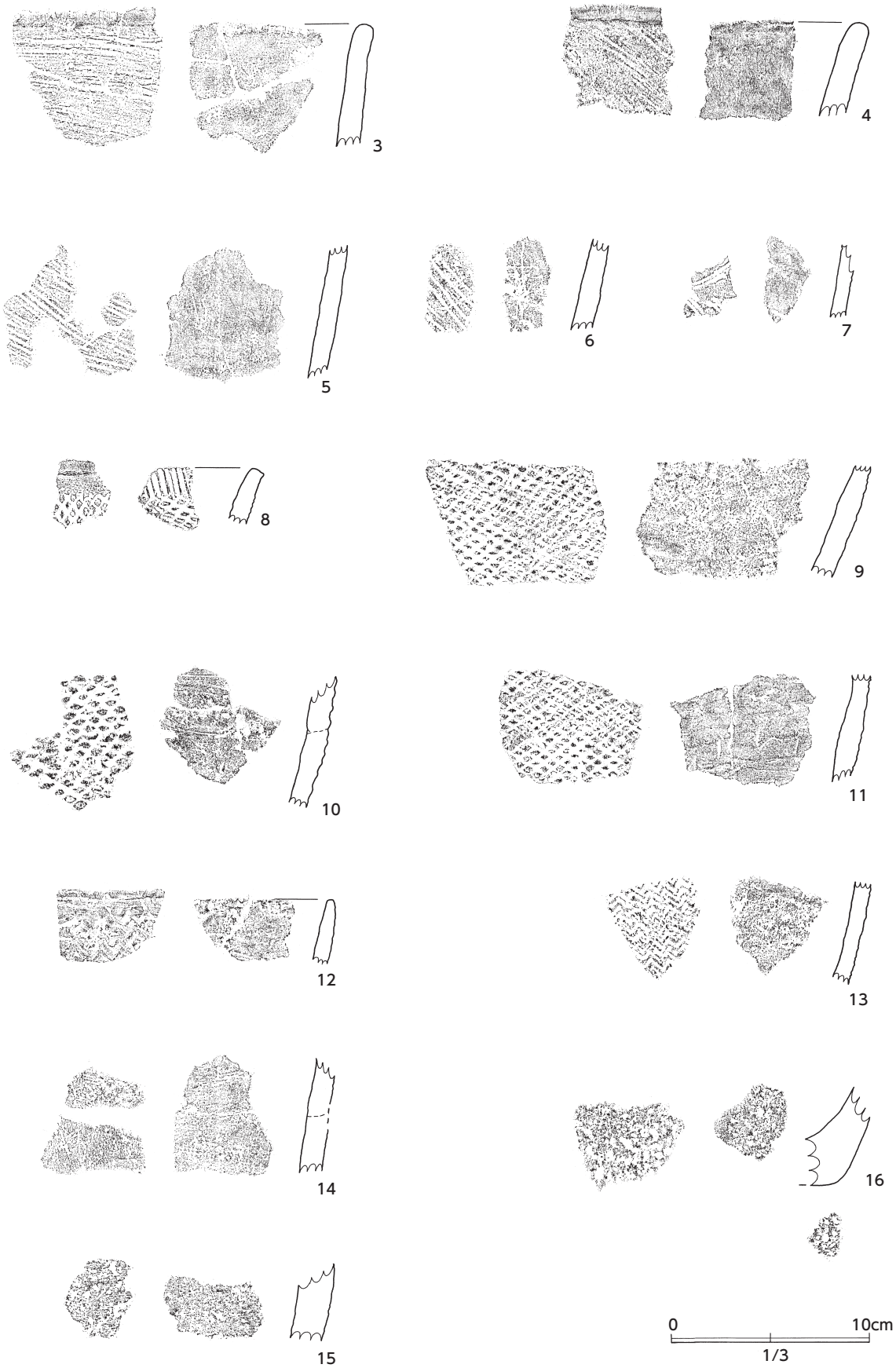
Ａ−２区のⅤ層下～Ⅵ層にかけて、石鏃２点が出土している。平面形態は 17、18 ともに二等辺三角形である。基部形態は 17 が平基であり、18 は凹基で浅い抉りを有する。利用石材は 17 がホルンフェルス、18 がチャートである。

スクレイパー（第 13 図 19）

19 はホルンフェルス製のスクレイパーである。厚みのある剥片を用いて、右側縁に連続した剥離を施し、弧状の連続した刃部を形成する。背面は自然面を残し、背面側から加工を施している。

二次加工剥片（第 13 図 20 ～ 24）

二次加工剥片は、Ⅴ層下面～Ⅵ層にかけて、Ａ−１区とＢ区で各１点、Ｃ区で３点の計５点が出土している。20 は不定形の剥片を素材とし、斜方向に打面が認められる。上面や右側面に明瞭な剥離はなく、背面左側縁に剥離が観察される。腰岳産黒曜石製。21 は縦長の剥片を素材とし、上端には、摂理面がある。左側面には、微細な剥離が認められる。赤色のチャート製。22 は縦長剥片を素材とし、上下端部近くの側縁に剥離がみられる。右側縁には使用痕と思われる微細な剥離が確認される。頁岩製。23、24 はともに厚みのある剥片を素材としている。23 は打面側の側縁と対面には剥離が認められ、右側縁には



第 12 図　山城城跡出土遺物実測図（1）

第１表　山城城跡出土遺物観察表

掲載番号	種別	器種	部位	区	出土位置	法　量（cm）			器面調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					Gr.・層・遺構	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	土師器	坏	ほぼ完形	C	SE3	11.9	5.5	4.9	回転ナデ	回転ナデ	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	3mm以下の明赤褐色粒を少量含む 3mm以下の灰色粒をわずかに含む 微細な黒色透明粒をわずかに含む	
2	土師器	坏	底部	C			(7.4)		回転ナデ	回転ナデ 指ナデ	淡橙 5YR8/4	淡橙 5YR8/5	微細な黒色粒をわずかに含む	
3	縄文土器	深鉢	口縁部	A-2					斜方向の貝殻条痕文	横ナデ	浅黄 2.5YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	1.5mm以下の無色透明光沢粒を多量に含む 1mm以下の黒色柱状光沢粒を多量に含む 1mm以下の褐色粒・灰白粒をわずかに含む	外面にスス付着
4	縄文土器	深鉢	口縁部	C	Ⅴ層下				斜方向の貝殻条痕文 スス付着	斜方向の丁寧なナデ	にぶい黄 2.5YR6/3	にぶい黄橙 10Y7/3	2mm以下の白色粒を少量含む 2mm以下の黄褐色粒を少量含む 2mm以下の透明粒をわずかに含む	外面にスス付着
5	縄文土器	深鉢	胴部	B					斜方向の貝殻条痕文	丁寧なナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/5 褐灰 10YR4/1	1mm以下の白色粒を少量含む 微細な透明粒を少量含む	
6	縄文土器	深鉢	胴部	A-2					斜方向の貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3 褐灰 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	微細な白色粒を少量含む 微細な透明粒をわずかに含む	外面にスス付着
7	縄文土器	深鉢	胴部	B	Ⅴ層下				ナデの後斜方向の貝殻条痕文	丁寧なナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	灰黄褐 10YR6/2	2mm以下の灰白粒を少量含む 1mm以下の無色半透明粒を少量含む 1mm以下の褐色粒をわずかに含む	
8	縄文土器	深鉢	口縁部	C	Ⅴ層下				楕円押型文	斜方向の押圧痕 楕円押型文	赤褐 5YR4/6	褐 7.5YR4/6	微細な透明粒をわずかに含む 微細な白色粒をわずかに含む	
9	縄文土器	深鉢	胴部	C	確認調査トレンチ				楕円押型文	横方向のナデ 指頭痕	にぶい赤褐 2.5YR4/4	にぶい赤褐 2.5YR4/5 にぶい黄橙 10YR6/4	2mm以下の白色粒を少量含む 微細な無色透明光沢粒をわずかに含む	
10	縄文土器	深鉢	胴部	C	Ⅴ層下				楕円押型文	横方向の工具ナデ	明赤褐 5YR5/6 黒褐 7.5YR4/2	灰褐 7.5YR4/2	微細な透明粒を少量含む 微細な白色粒を少量含む 微細な黒雲母をわずかに含む	
11	縄文土器	深鉢	胴部	C	確認調査トレンチ				楕円押型文	横方向のナデ 指頭痕	褐 10YR4/4	灰褐 7.5YR4/2	微細な無色透明光沢粒を少量含む 1mm以下の白色粒をわずかに含む	
12	縄文土器	深鉢	口縁部	B					山形押型文	横方向の工具ナデ スス付着	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/5	2mm以下の赤褐色粒を含む 1mm以下の無色透明光沢粒を含む	外面にスス付着
13	縄文土器	深鉢	胴部	B					山形押型文	横ナデ 指頭痕あり	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄褐 10YR 5/4 暗褐 10YR3/3	微細な透明粒を少量含む 1mm以下の赤色粒をわずかに含む	
14	縄文土器	深鉢	胴部	A-1					斜方向のナデ	横方向の工具ナデ 指おさえ	灰黄褐 10YR5/2	浅黄 2.5YR7/4 暗灰黄 2.5YR4/2	1mm以下の透明粒を少量含む 1mm以下の白色粒をわずかに含む	外面にスス付着
15	縄文土器	深鉢	胴部	C	Ⅴ層下				横方向のナデ	斜方向のナデ	橙 7.5YR 7/6	にぶい黄橙 10YR7/3	微細な透明粒を含む 2mm以下の白色透明粒を多量に含む 微細な黒色透明粒を少量含む	
16	縄文土器	深鉢	底部	C	Ⅴ層下				ナデ	斜方向のナデ	橙 5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/3	3mm以下の黒色粒を少量含む 2mm以下の白色粒を少量含む 2mm以下の白色透明粒を少量含む	

細かな剥離が認められる。頁岩製。23 は打面側の側縁と対面には剥離が認められ、右側縁には細かな剥離が認められる。頁岩製。24 は二次加工剥片であり、打面の対面と上下端部の側縁に剥離が施され、背面は礫面を残している。スクレイパー製作に伴い折損したものを、再加工した可能性も考えられる。ホルンフェルス製。

剥片（第 13 図 25 ～ 28）

25 は、やや不整形であるものの、縦長の素材を使用した剥片と考えられる。ホルンフェルス製。26 ～ 28 は縦長の剥片である。26 は頁岩製であり、ほぼ全周に剥離が認められ、鋭利である。右側縁には、微細な剥離が観察される。背面の一部には、自然面が残る。27、28 は、Ｂ区の調査区南壁の土層確認トレンチ近くで確認された縦長剥片である。Ｖ層最下面～Ⅵ層にかけての境界が不明瞭な面で確認されたため、縄文時代早期の遺物としたが、旧石器の可能性も考えられる。石材はともにホルンフェルス製である。

石核（第 14 図 29・30）

29 はホルンフェルス製の石核で、打面転移を繰り返し多方向から剥片剥離を行い、縦長および寸詰まりの剥片を剥出している。背面には礫面を残す。30 は泥岩のホルンフェルス製である。若干の打面転移が認められ、不定形な剥片を剥出している。

磨製石斧（第 14 図 31）

31 は磨製石斧で、Ｃ区の２号溝状遺構の埋土中から粘土瓦や打製石斧の未製品（第 14 図 33）等とともに出土した。基部の大部分を欠損している。両面に顕著な磨痕が認められる。現存で最大幅は上部付近にあり、刃部付近に向かって、やや幅が狭くなる。刃部は両刃であり、使用によるとみられる剥離が認められる。また、両側縁には敲打痕が観察される。砂岩製。

打製石斧未製品（第 14 図 32 ～ 35）

32 は、打製石斧の未製品で基部付近にあたると考えられる。全体に厚みがあり、下部が折損したものと考えられる。33 は 31 と同様、Ｃ区の２号溝状遺構の埋土中からの出土である。形状は、打製石斧に近いが、まだ礫面が厚く、全体的に剥離が粗雑で、刃部が斜めになり、片刃であることから剥離途中の段階と考えられる。34、35 はバチ形の打製石斧の未製品と考えられる。34 はまだ礫面が厚く、全体的に剥離が粗雑である。上面は平坦な礫面が残る。32 ～ 35 はすべてホルンフェルス製である。

礫器（第 15 図 36・37）

36 は、やや厚みのあるホルンフェルスを素材として利用した礫器である。大部分が礫面で、主に上端と右側縁に数度の打撃により粗い剥離を行っている。37 は扁平な砂岩を素材とし、両側縁の上部から下部の約４/５までを粗く剥離し、分銅形状を呈する。両側縁に抉りを有し、礫面をもつことからここに分類したが、両面に磨面がみられることから、磨石としての用途も考えられる。

石錘（第 15 図 38）

38 はＣ区の確認調査のトレンチから出土した。扁平な砂岩を素材とし、長軸側に数度の打撃による剥離を行い、抉りを作り出している。

磨石（第 15 図 39 ～ 42）

39 は、砂岩製の磨石である。楕円形で、両面および周縁の広い範囲に磨痕が認められる。表面の下部付近に、わずかに敲打痕が認められる。40 は、尾鈴酸性岩類の溶結凝灰岩を素材とする。大部分は

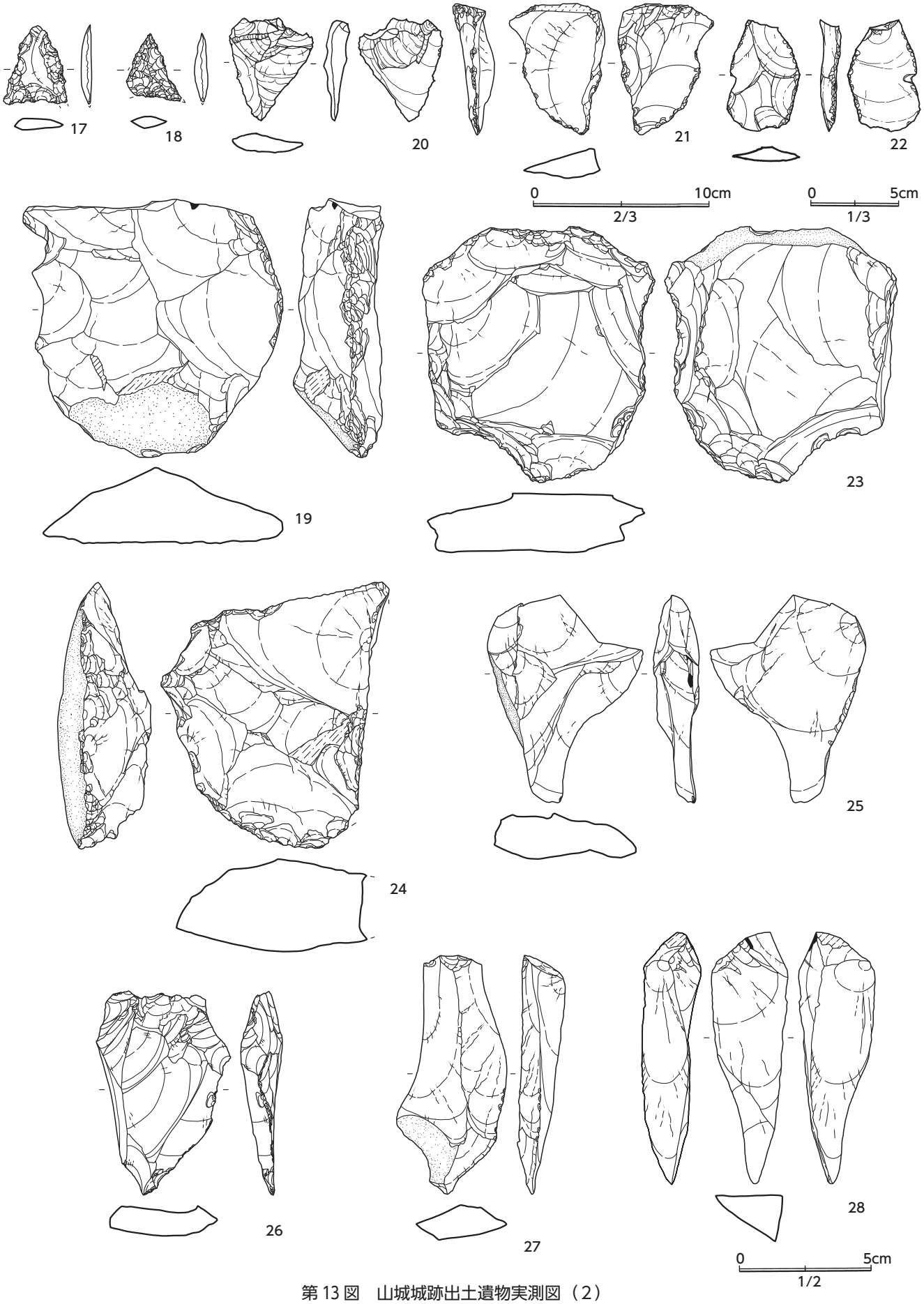
欠損しているが、残存状態で、両面および側面の広い範囲に、磨痕が認められる。41 は２号溝状遺構から出土した磨石で斑状花崗岩（花崗斑岩）を素材とし、表面の中央付近と裏面の一部に磨面が観察される。側縁には敲打痕がある。42 は、花崗岩製で、表裏両面に磨面が認められる。

敲石（第 15 図 43 ～ 47）

主たる用途が敲打と考えられる、43 ～ 47 を敲石に分類した。43 は平面形が楕円形を呈する。上下端に敲打痕が観察される。44 は上端と右側面および下端部に顕著な敲打痕が認められる。敲打痕は表面・裏面の上部にも認められる。表面・裏面の敲打痕がみられない下部は磨面としても使用されたと考えられる。45 は現存長 6.7 ㎝を測る。上端および両側縁に顕著な敲打痕が認められる。46 はＡ－２区の調査区北壁近く、Ｖ層下面で散礫とともに出土が確認された。下部に敲打痕がみられ、敲打痕の認められない上部の大部分には磨面がわずかに認められる。47 は最大長約 17 ㎝、最大幅約 11 ㎝、重量約 1.1 ㎏を測る。遺跡内ではもっとも大型の敲石である。平面形状は楕円形を呈し、表面の側縁の全周および右側面に密な敲打痕が観察される。表面の中央部は顕著な磨面によるものか全面がやや凹んでいる。裏面側はほとんど敲打痕や磨面は観察されず、自然面で船底状である。43 ～ 47 はすべて、砂岩製である。

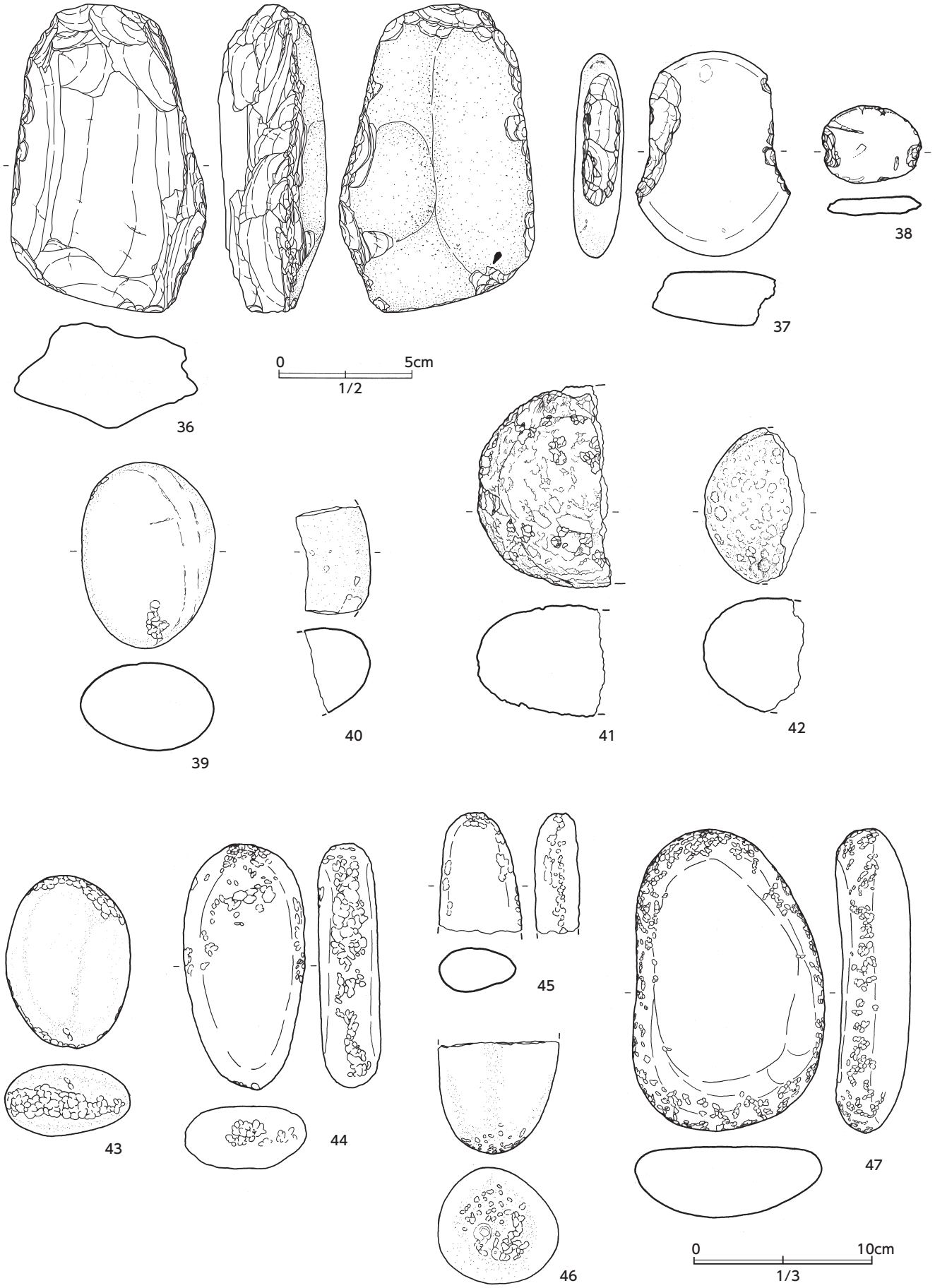
第２表　山城城跡出土石器計測表

掲載番号	器種	出土区	遺構・層位	石材	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)
17	石鏃	A-2	Ⅴ層下	ホルンフェルス	2.2	1.8	0.3	1.2
18	石鏃	A-2	Ⅴ層下	チャート	1.9	1.5	0.3	0.7
19	スクレイパー	B	Ⅴ層下	ホルンフェルス	9.8	9.9	2.9	328.2
20	二次加工剥片	A-1	Ⅴ層下	黒曜石（腰岳産）	2.9	2.4	0.6	2.9
21	二次加工剥片	B	Ⅴ層下	赤色チャート	3.7	2.7	0.9	7.6
22	二次加工剥片	C	Ⅵ層	頁岩	6.4	4.1	1.0	21.5
23	二次加工剥片	C	Ⅵ層	頁岩	9.7	8.8	2.2	264.2
24	二次加工剥片	C	Ⅴ層下	ホルンフェルス	10.1	8.6	3.5	256.2
25	剥片	C	Ⅵ層	ホルンフェルス	7.9	5.9	1.7	54.4
26	剥片	C	Ⅵ層	頁岩	7.7	5.1	1.2	51.0
27	剥片	B	Ⅴ層下Ⅵ層	ホルンフェルス	9.1	4.2	1.3	43.6
28	剥片	B	Ⅴ層下Ⅵ層	ホルンフェルス	9.5	2.9	1.7	44.4
29	石核	C	Tr1	ホルンフェルス	11.1	8.5	3.0	275.1
30	石核	C	Ⅴ層下	ホルンフェルス	9.4	9.0	3.0	333.2
31	磨製石斧	C	SE2	砂岩	9.2	4.5	3.6	237.1
32	打製石斧未製品	C	Ⅵ層	ホルンフェルス	11.1	5.7	3.9	304.7
33	打製石斧未製品	C	SE2埋土中	ホルンフェルス	16.2	8.2	4.0	713.0
34	打製石斧未製品	B	Ⅴ層下	ホルンフェルス	8.8	7.3	3.7	267.0
35	打製石斧未製品	C	Ⅴ層下	ホルンフェルス	6.1	7.5	2.1	126.4
36	礫器	B	Ⅴ層	ホルンフェルス	11.6	7.3	3.9	443.0
37	礫器	B	Ⅴ層	砂岩	11.4	8.6	3.0	383.8
38	石錘	C	Tr1	砂岩	4.4	5.7	1.0	36.1
39	磨石	B	Ⅴ層下	砂岩	10.4	7.5	4.9	530.0
40	磨石	A-2	Ⅴ層下	溶結凝灰岩	6.0	5.0	3.2	155.8
41	磨石	B	SE2埋土中	斑状花崗岩（花崗斑岩）	11.3	7.5	6.3	677.5
42	磨石	C	Ⅴ層下	花崗岩	8.7	5.6	6.3	353.1
43	敲石	A-2	Ⅴ層下	砂岩	9.7	7.0	4.0	333.0
44	敲石	B	Ⅴ層下	砂岩	13.7	6.9	3.5	506.8
45	敲石	A-2	Ⅴ層下	砂岩	6.7	4.3	3.0	101.3
46	敲石	A-2	Ⅴ層下	砂岩	6.3	6.8	6.5	373.0
47	敲石	B	SE2	砂岩	16.9	10.5	3.8	1107.0



第 13 図　山城城跡出土遺物実測図（2）

第 14 図　山城城跡出土遺物実測図（3）



第 15 図　山城城跡出土遺物実測図（4）

第Ⅳ章　串木遺跡第４地点の調査

第１節　基本層序

串木遺跡第４地点は一ツ瀬川左岸の台地上の標高約 34 ｍに立地する。北西側に位置する山城城跡と、約２ｍの比高差はあるが、同一段丘上であることから、削平等の影響を考慮しても土層堆積状況は概ね共通である。

基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：表土（耕作土）層厚は約 30 ～ 40 ㎝

Ⅱ層：黒色土（Hue10YR2/1）弱い粘性を帯びる

Ⅲ層：鬼界アカホヤ火山灰層（K-Ah 約 7,300 年前）層厚は約５～ 10 ㎝

Ⅳ層：黒色土（Hue7.5YR2/1）やや粘性を帯びる 層厚は約 15 ～ 30 ㎝

Ⅴ層：暗褐色土（Hue7.5YR3/4）縄文時代早期遺物包含層

Ⅵ層：褐色土（Hue7.5YR4/6）縄文時代早期遺物包含層

Ⅶ層：明褐色土（Hue7.5YR5/6）粘性を帯びる

Ⅷ層：褐灰色土（Hue7.5YR4/1）強い粘性を帯びる １～２㎜程度の乳白色、黄色の粒子を少量含む

Ⅸ層：褐灰色シルト（Hue7.5YR5/1）

Ⅹ層：砂礫層

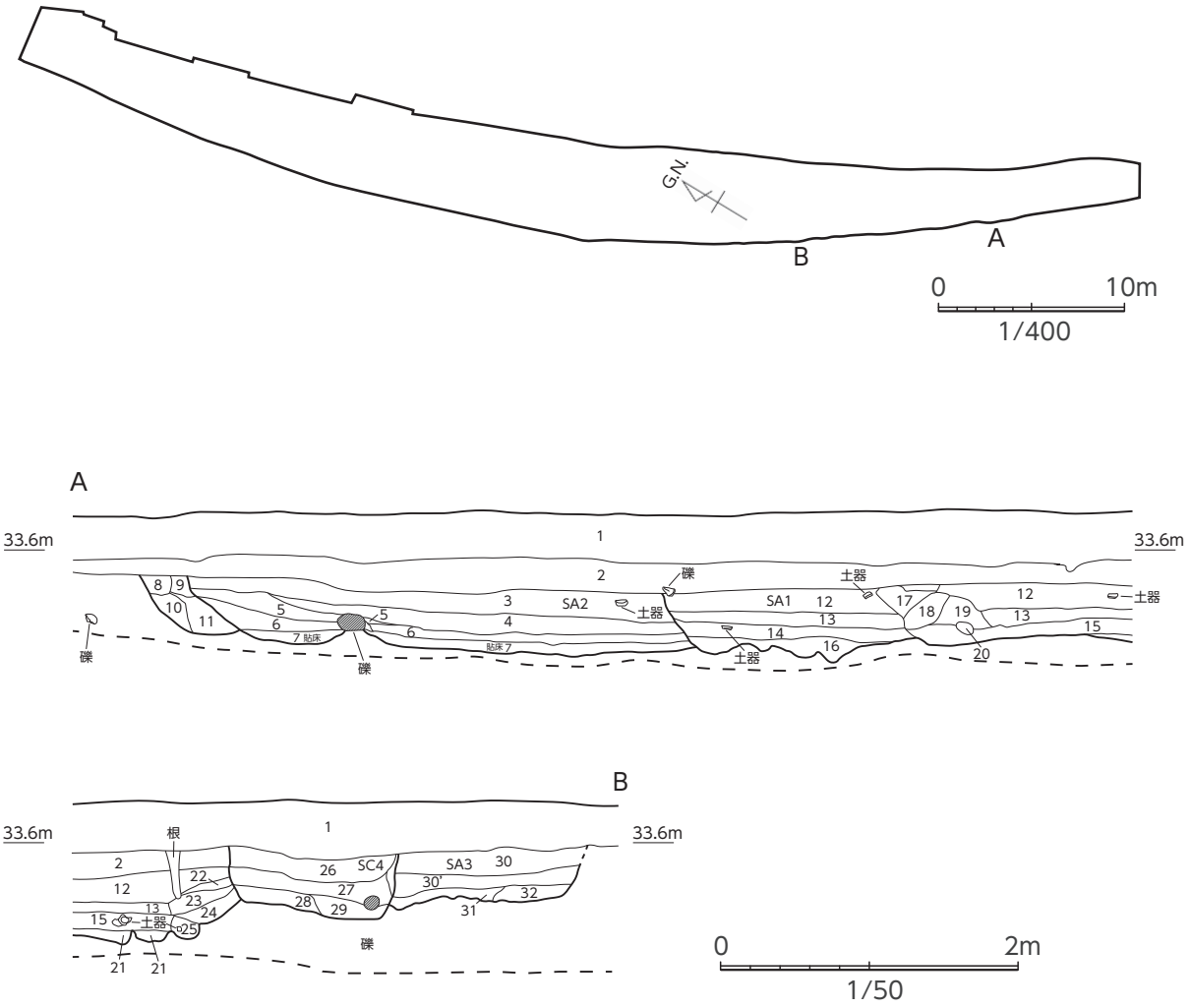
また、南側約 200 ｍに近接する串木遺跡第３地点の堆積状況は、層厚に差異はあるものの、第Ⅵ層までは概ね共通している。串木遺跡第４地点において、土層の残存状況は、県道や耕作に伴うとみられる造成の影響で一様ではなく、ｃ34・ｄ34 グリッド（第４図）を挟んで南北で土層残存状況に差異が認められた。南側では表土下に一部Ⅱ層が残存し、Ⅲ層の鬼界アカホヤ火山灰層の堆積が確認された。一方、北側の表土下はⅤ層（暗褐色土）、Ⅵ層（褐色土）であり、縄文時代早期遺物包含層の広がりが確認された。表土を除去すると、ほぼ平坦となったが、旧地形は南側から北側に向かって高まっていたものと考えられる。

第２節　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、調査区中央部から南側のⅢ層（アカホヤ火山灰）が残存する面で竪穴建物跡４軒（ＳＡ１～ＳＡ４）、Ⅲ層の消失している調査区北側では、Ⅴ層（暗褐色土）面で１軒（ＳＡ５）が確認された。ＳＡ１～ＳＡ３は切り合う状況で検出された。竪穴建物跡は、調査区内で１軒全体が確認できたものはなく、西側の県道杉安高鍋線や調査区東側の耕作地へ広がるとみられる。遺物は埋土中や床面付近から土師器の甕、壺、高坏、椀、須恵器の坏、高坏等が出土している。また、ＳＡ１、ＳＡ２の床面付近から検出された炭化物について、放射性炭素Ｃ 14 年代測定分析および樹種同定を行った。詳細については第Ⅴ章に記す。

１号竪穴建物跡（ＳＡ１）（第 17 ～ 20 図）

１号竪穴建物跡は、Ⅱ層（黒色土）の除去後に、ｄ36 ～ｅ37 グリッドにかけて確認された方形のプランである。南東側でＳＡ２、北西側でＳＡ３と切り合った状態で検出された。建物跡の半分程は西側の調査区外へ広がっている。平面精査での切り合い確認と、土層観察用ベルトでの断面観察の結果から、ＳＡ１はＳＡ２、ＳＡ３を切っていることから、３軒の中で、もっとも新しい時期の遺構と考えられる。



1. 表土(造成土)
2. 褐灰色土(10YR4/1)1㎜程度の白色・淡黄褐色粒、2㎜程度の炭化物粒をまんべんなく含む 近世以降の遺物を含む
3. 黒褐色土(7.5YR3/2)1～3㎜程度の橙色粒・炭化物粒を含む土師器を含む
4. 黒褐色土(7.5YR3/1)しまりがなくさらさら
5. 黒褐色土(10YR3/2)5㎜～3cm程度の明黄橙色(10YR6/8アカホヤ)ブロックを多量に含む
6. 黒褐色土(5YR2/1)1～5㎜程度の明黄褐色粒をまばらに含む 下面に土師器
7. 褐灰色土(5YR4/1)褐色ブロックを縞状に含む 黒色土や明黄褐色ブロックを含み硬くしまる(貼床)

SA2埋土

8. 灰黄褐色土(10YR4/2) 5cm程度の明黄褐色ブロックを含む しまりなし
9. 灰黄褐色土(10YR4/2)9に似る1～2㎜程度の明黄褐色ブロックを少量含む
10. にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまりがつよい
11. にぶい黄褐色土(10YR4/3)3～5㎜程度の明黄褐色粒、下面付近に褐色ブロックをまばらに含む
12. にぶい褐色土(10YR5/3)1～2㎜程度の橙色粒を少含む1cm程度の炭化物を含む土師器片を含む
13. 灰褐色土(7.5YR5/2)土師器小片をまばらに含む
14. にぶい褐色土(7.5YR5/4)ややしまりあり 土師器片を含む
15. にぶい褐色土(7.5YR5/4)14に似る 炭化物を多量に含む(サンプリング箇所)
16. 褐灰色土(7.5YR4/1)5㎜～2cm程度の明黄橙色ブロックを少量含む 褐色土ブロックを縞状に含み硬くしまる(貼床)
17. 灰褐色土(7.5YR4/2)1㎜程度の明橙色粒をわずかに含む
18. 褐灰色土(7.5YR4/1)1㎜～2cm程度の橙色粒を含み硬くしまる1㎜程度の炭化物粒をわずかに含む
19. 褐灰色土(7.5YR4/1)1㎜程度の炭化物粒をわずかに含むしまりなし
20. 褐灰色土(7.5YR4/1)3㎜程度の橙色ブロックを含み硬くしまる 下面に炭化物を含む 土師器片を含む
21. 褐灰色土(5YR4/1)1㎜程度の橙色ブロックを含む 土師器小片を含む(貼床か?)
22. にぶい褐色土(7.5YR5/3)12に似るが橙色粒を含まない2mm程度の炭化物粒をまばらに含む
23. 灰褐色土(7.5YR5/2)褐色ブロックをまばらに含む
24. 灰褐色土(7.5YR6/2)褐色ブロックを少量含む
25. 灰褐色土(7.5YR4/2)褐色ブロックをまんべんなく含む

SA1埋土

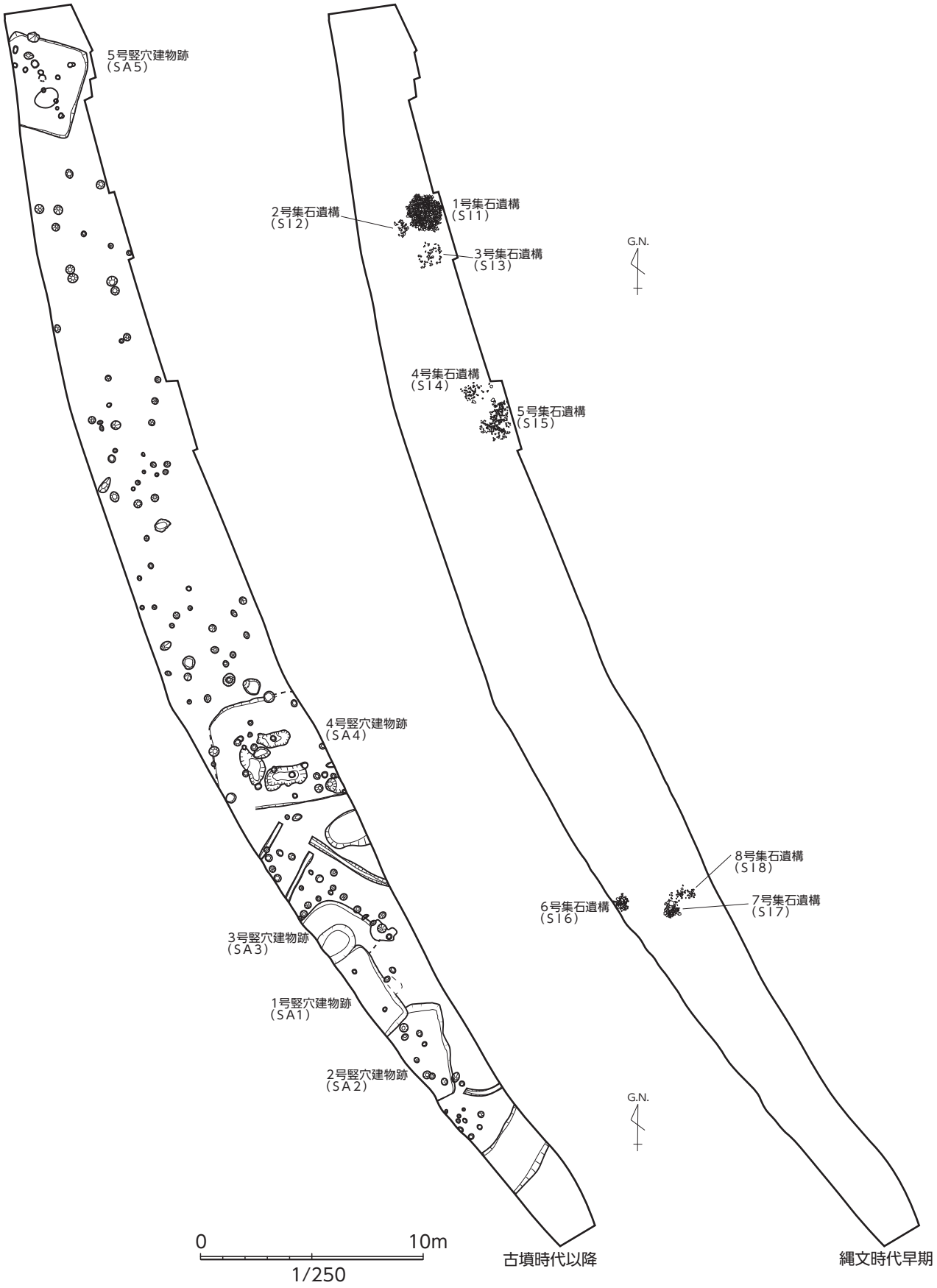
26. 黒褐色土(10YR3/1)ややしまる 2に似る
27. にぶい黄褐色土(10YR5/3)1㎜程度の橙色粒、褐色ブロックを含む
28. 黒褐色土(10YR3/2)2㎜～1cm程度の橙色ブロック含む
29. にぶい黄褐色土(10YR5/4)褐色ブロックを含む 27に似る

SC4埋土

30. 黒褐色土(10YR3/1)
30'. 黒褐色土(10YR3/2)30よりやや明るい 土師器を含む
31. 灰褐色土(7.5YR4/2)
32. 褐色土(7.5YR4/3)褐色ブロックを多量に含む

SA3埋土

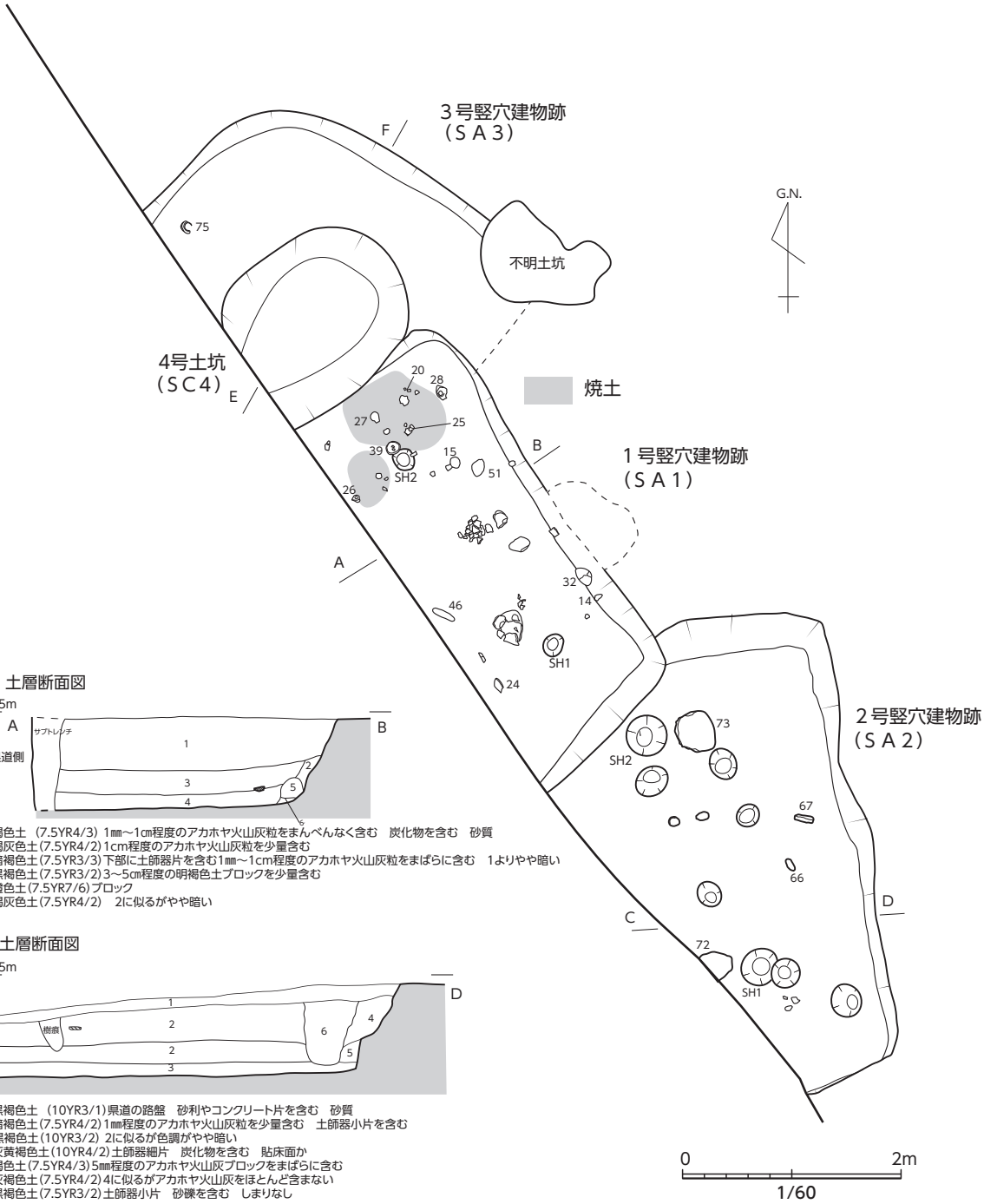
第16図　串木遺跡第4地点調査区土層断面図



第 17 図　串木遺跡第 4 地点遺構分布図

現存規模は、一辺約４ｍ× 1.7 ｍである。検出面からの深さは、最大で 0.5 ｍを測る。Ⅶ層（明褐色土）面まで掘削したのち、約 10 ㎝の貼床を施している。遺構内には柱穴と考えられる小穴２基（ＳＨ１、ＳＨ２）が確認できた。ともに径は約 20 ㎝で南東側に位置するＳＨ１は検出面からの深さは約 32 ㎝、北西側のＳＨ２は約 33 ㎝を測る。ＳＨ１、ＳＨ２間の距離は約 2.2 ｍである。小穴から推定される軸方位はＮ－49°－Ｗである。北西側の床面に、大小２か所の焼土の広がりが確認された。大きい焼土は、東西方向に約 1.0 ｍ、南北方向に約 0.4 ｍの不整楕円形状に北側壁面付近に広がる。焼土の堆積は北側が 20 ㎝と厚く南側に向かって薄くなる。焼土中には炭化物が含まれ、土師器壺（第 19 図 20）、高坏（第 19 図 23 ～ 27）、埦（第 20 図 39）が出土している。小さな焼土は前述した焼土の南西約 20 ㎝に近接し、南北方向に 0.5 ｍ、東西方向に 0.4 ｍの楕円形状に堆積していた。また、焼土の範囲外の床面や調査区西側壁面に炭化材が確認され、埋土下層と、貼床直上で出土した炭化材２試料の年代分析を行ったところ、1585 ± 20、1650 ± 20 年 14 Ｃ ＢＰの年代が得られた。較正年代等については第Ｖ章（第 10 表・第 32 図）を参照されたい。

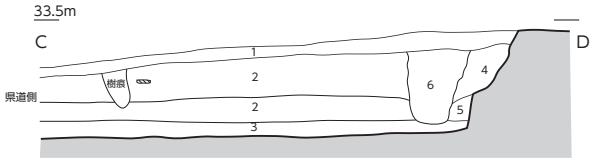
遺物は、埋土の中位から床面にかけて多く出土している。47 点を図化した。１～ 11 は土師器甕である。１は口縁上部がやや内傾し、口唇部は内側に段をもつ。外面には、まんべんなくススが付着する。２～９は甕の口縁部である。直線的に斜め上方に延び、口唇部がわずかに段をもつ。10、11 は上げ底の底部である。10 は底部が外反し著しい上げ底となる。底部からの立ち上がりには、粘土の貼り付け後に粗い調整がみられる。11 はやや上げ底気味で、外面には強い指押さえがみられる。内面の広範囲に黒斑が認められる。10 は鉢の可能性もある。12 ～ 21 は壺である。12 は刻み目突帯で、頸部付近とみられる。13 は胴部上位に最大径があり、その部分にススが付着する。底部はやや厚手でわずかに面をもつ平底である。14 は扁球胴をもつ長頸壺と考えられる。外面は丁寧なナデ調整であり、頸部内面には絞り痕跡が認められる。15 は焼土の南側約 20 ㎝の貼床面上で検出された完形の小型丸底壺である。法量は口径 6.4 ㎝、器高 9.9 ㎝、最大径は胴部下半にあり 8.7 ㎝である。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。底部内面には棒状の工具痕が残る。16 ～ 21 は底部である。16、17 は小さな平底、18、19 は平底、20、21 は丸底を呈する。19 の内面には、指押さえがみられる。22 ～ 31 は高坏である。口縁端部がやや外反する 22、23 と、内湾する 24 に大別できる。25 は体部が内湾気味にのびる。坏部と裾部の接合部に粘土充填がみられる。裾部はやや不明瞭な稜をなし、大きく開く。26 ～ 29 は脚部である。26 ～ 28 はやや薄手で、外方向に開き、29 は厚手で、柱状を呈する。30、31 は裾部である。端部は丸みを帯びる。32 ～ 40 は埦である。32 は口径 14.7 ㎝、器高 9.1 ㎝で、底部は丸底を呈する。やや器高が高い。33、34 は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸みをもつ。35 ～ 38 は器壁が薄く、口縁端部は尖り気味である。39、40 は底部である。39 は内外面ともに黒斑が認められる。40 は平底状になり、内湾しながら立ち上がる。鉢の可能性もある。41 は貼付突帯をもつ縄文時代の深鉢で、42 は外面格子目叩きの古代甕である。41、42 ともに建物跡の時期に伴うとは考えにくい。43、44 は石錘である。扁平な頁岩を素材とし、長軸側に数度の打撃による剥離を行い、抉りを作り出している。45 は砂岩製の台石である。平面形は楕円形で、上端と左側面に、わずかに敲打痕が認められる。表裏面の広範囲に磨痕が認められる。46、47 は敲石である。46 は砂岩製で棒状を呈する。上下端と右側の上部に敲打痕が認められ、表面中央部には、磨痕が観察される。ＳＡ２の 66 ～ 69 と岩質や形状、法量に類似点も認められるため、いわゆる、たも石的な用途も考えられる。47 は尾鈴山酸性岩（凝灰岩）を素材とする敲石である。円形基調で、外縁



ＳＡ１土層断面図

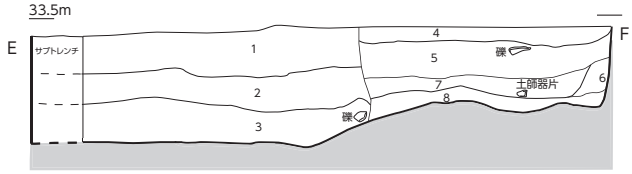
1. 褐色土（7.5YR4/3）1㎜～1㎝程度のアカホヤ火山灰粒をまんべんなく含む　炭化物を含む　砂質
2. 褐灰色土(7.5YR4/2)1㎝程度のアカホヤ火山灰粒を少量含む
3. 暗褐色土(7.5YR3/3)下部に土師器片を含む1㎜～1㎝程度のアカホヤ火山灰粒をまばらに含む　1よりやや暗い
4. 黒褐色土(7.5YR3/2)3～5㎝程度の明褐色土ブロックを少量含む
5. 橙色土(7.5YR7/6)ブロック
6. 褐灰色土(7.5YR4/2)　2に似るがやや暗い

ＳＡ2土層断面図



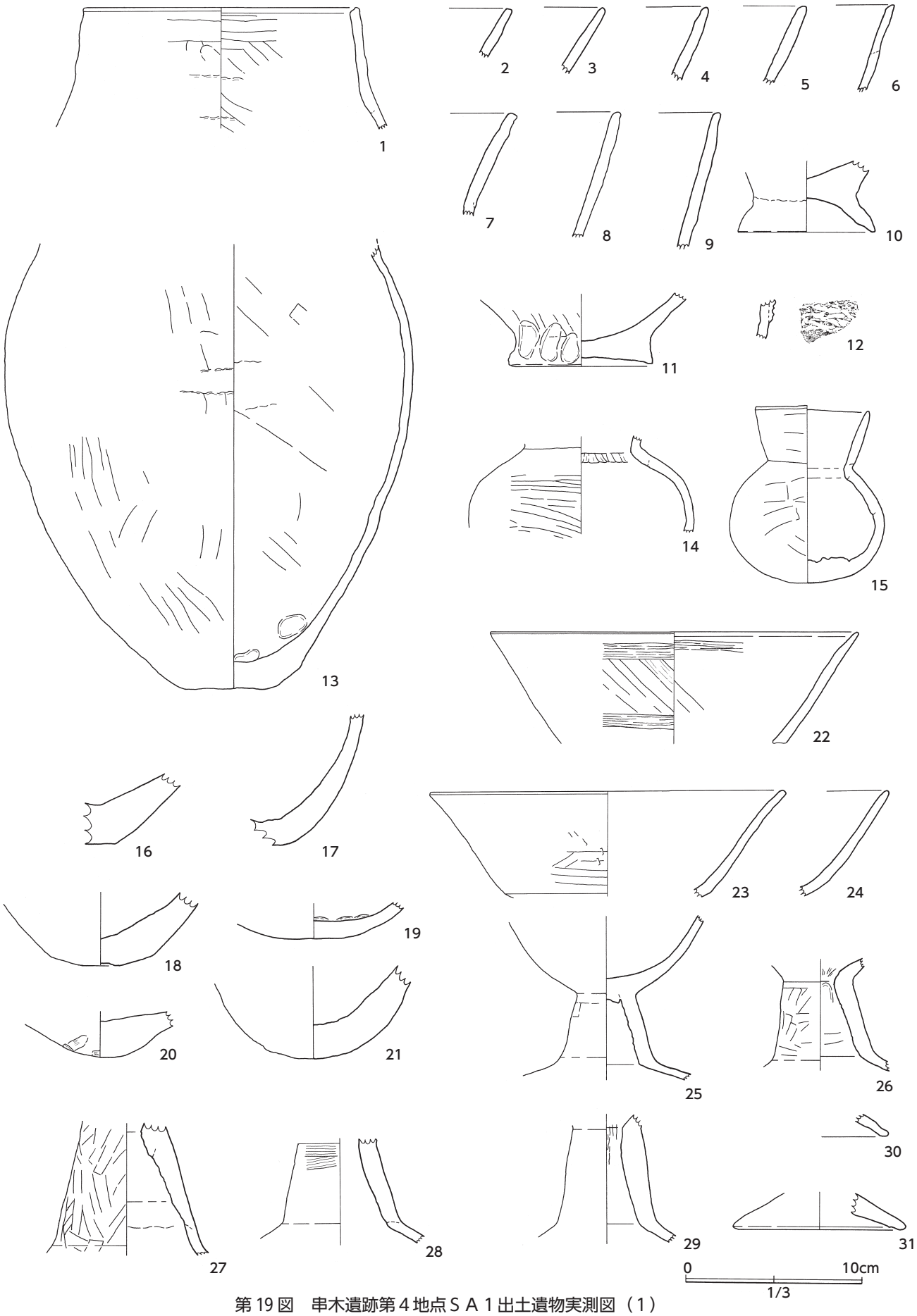
1. 黒褐色土（10YR3/1)県道の路盤　砂利やコンクリート片を含む　砂質
2. 暗褐色土(7.5YR4/2)1㎜程度のアカホヤ火山灰粒を少量含む　土師器小片を含む
2′ 黒褐色土(10YR3/2) 2に似るが色調がやや暗い
3. 灰黄褐色土(10YR4/2)土師器細片　炭化物を含む　貼床面か
4. 褐色土(7.5YR4/3)5㎜程度のアカホヤ火山灰ブロックをまばらに含む
5. 灰褐色土(7.5YR4/2)4に似るがアカホヤ火山灰をほとんど含まない
6. 黒褐色土(7.5YR3/2)土師器小片　砂礫を含む　しまりなし

ＳＡ3土層断面図



1. 褐色土(7.5YR4/3) 5㎜以下の炭化物をわずかに含む
2. 黒褐土(7.5YR3/2) 2㎝以下のアカホヤ土ブロックをわずかに含む　1㎝以下の炭化物を少量含む
3. 黒褐土(7.5YR2/2)　3～5㎝のアカホヤ火山灰を含む
4. 暗褐土(7.5YR3/3) 1㎝以下の礫をわずかに含む
5. 黒褐土(7.5YR3/2) 2㎝以下のアカホヤブロックをわずかに含む
6. 黒褐土(7.5YR2/2)　ややしまり有り
7. 黒褐土(7.5YR3/1)　1㎝以下の礫をわずかに含む
8. 明褐色土(7.5YR5/6) 基本土層Ⅶ層 弱い粘性をもつ　シルト質

第 18 図　串木遺跡第４地点ＳＡ１～ＳＡ３平面・土層断面実測図

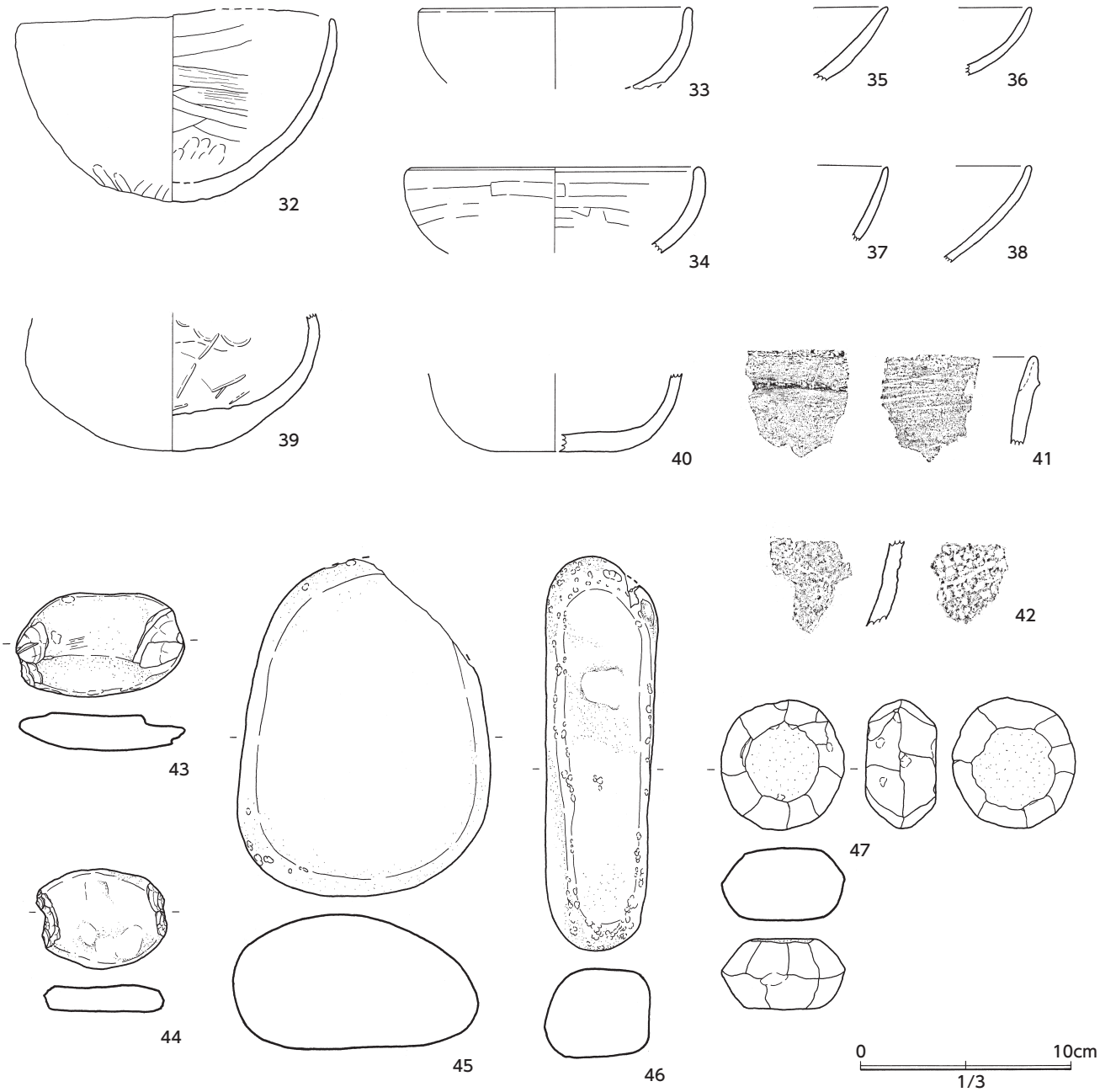


第 19 図　串木遺跡第４地点ＳＡ１出土遺物実測図（１）

は敲打により八面の角部を有し、側面は中央部に稜が入る。表裏面の中央部は不整円形の平坦面をもち、磨痕がみられる。

２号竪穴建物跡（ＳＡ２）（第 17・18・21・22 図）

２号竪穴建物跡は、Ⅱ層（黒色土）の除去後、ｅ 37 グリッドで確認された方形の建物跡である。北西側で、１号竪穴建物跡の隅角部分に切られた状態で検出された。建物跡は、西側の調査区外へ広がっている。現存規模は、南北方向の一辺が約４ｍ、東西方向の一辺は約 1.5 ｍである。検出面からの深さは最大 0.45 ｍを測る。Ⅶ層（明褐色土）面まで掘削した後、床面に約６㎝の貼床を施している。遺構内には柱穴の可能性のある小穴９基が確認できた。主柱穴とみられるのはＳＨ１とＳＨ２で、ＳＨ１は径約 30 ㎝、ＳＨ２は径約 35 ㎝、ＳＨ１－ＳＨ２間の距離は約 2.5 ｍを測る。検出面からの深さはとも



第 20 図　串木遺跡第４地点ＳＡ１出土遺物実測図（２）

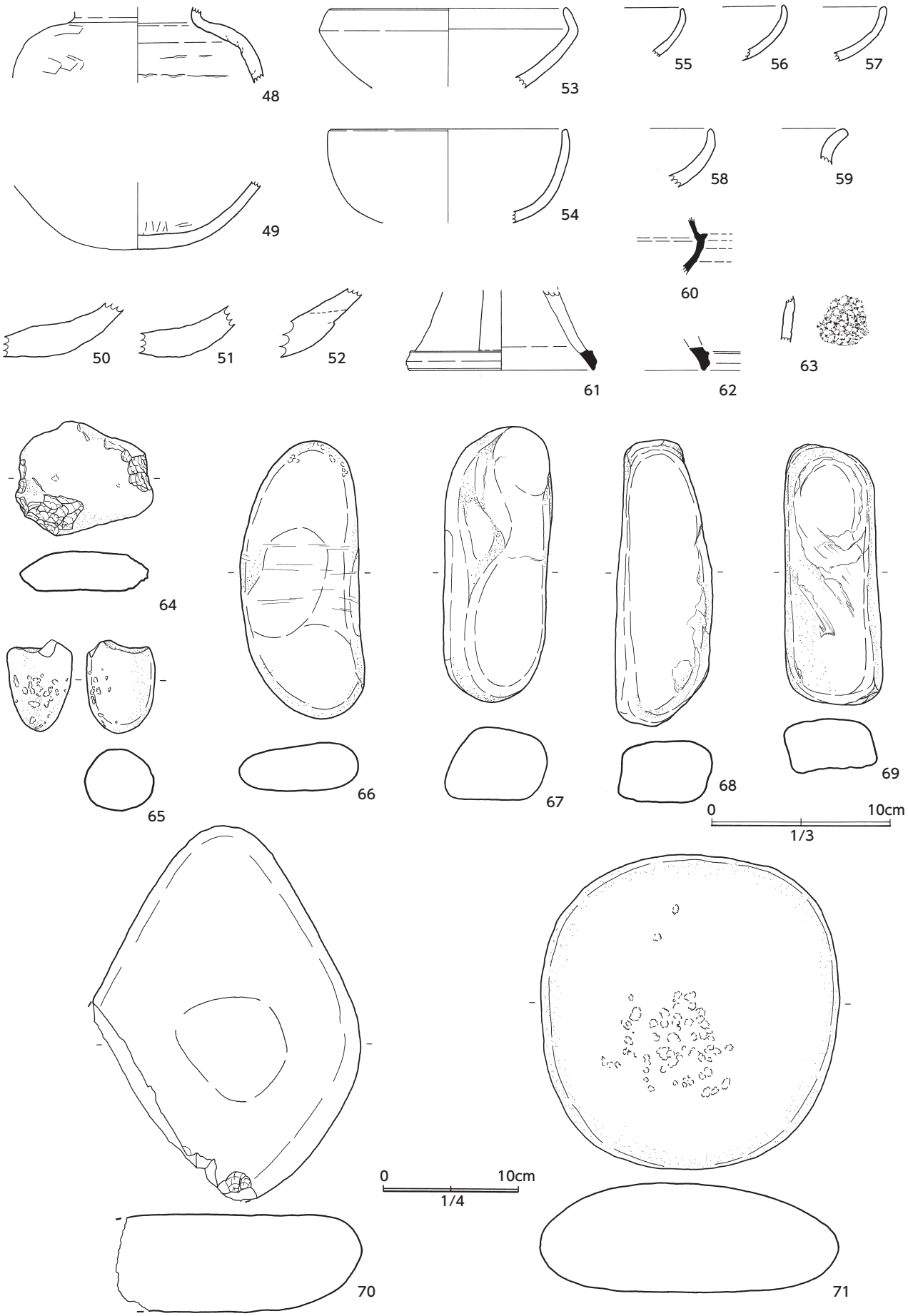
に 45 ㎝である。ＳＨ１、ＳＨ２から推定される建物跡の軸方位はＮ－32°-Ｗである。調査区南西壁にあたる、埋土下層床面付近で検出された炭化材の年代分析を行ったところ、2495 ± 20 年 14 Ｃ ＢＰの年代が得られた。建物内出土遺物は、古墳時代を主体とするものであり、炭化材の年代観は、建物跡の時期に伴うものではないと考えられる。較正年代等については第Ｖ章を参照されたい。

遺物は、埋土の中位から床面にかけて多く出土している。土器 16 点、石器 10 点の 26 点を図化した（第 21・22 図）。48 ～ 52 は壺である。48 は扁球気味の胴部である。外面は丁寧なナデ調整が施され、内面には粘土のつなぎ目が複数認められる。49 ～ 52 は平底の底部である。49 の外面は丁寧なナデ調整、内面は底部付近に指押さえがみられ、縦斜方向に指ナデの痕跡が残る。50 ～ 52 はやや厚手の底部で、ゆるやかに内湾しながら立ち上がる。53 ～ 58 は埦である。53 は口縁部がやや内傾し、口唇部は尖り気味である。54 はやや器高が高い埦であり、口縁部が内湾する。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。55 ～ 58 は口縁部である。口唇部が尖り気味の 55、56 と、丸みを帯びる 57、58 に大別される。59 は口縁部が外反し、口縁部は丸くおさめられる。甕の口縁の可能性がある。60 ～ 62 は須恵器である。60 は坏身である。立ち上がりは、直線的に上方へ延びる。受け部と立ち上がりの境に、わずかに凹みがみられる。61、62 は高坏の脚部で、61 は長方形とみられる透かし孔が穿たれている。推定口径は 10.2 ㎝を測る。62 は裾部で上面が面取りされていることから、透かし孔の一部とみられる。63 は古代の甕である。外面は、格子目叩きである。64 は石錘である。扁平な頁岩を素材とし、表裏面の長軸側に数度の打撃による剥離を行い、抉りを作り出している。表面は、長軸方向から約 20°斜方向に深い抉りがみられる。65 は砂岩製の敲石である。下端と左側縁に敲打痕が認められる。66 ～ 69 は砂岩製で、いわゆる、たも石である。編み物用として使用されたものと考えられる。長軸は約 15 ～ 16 ㎝と、長さに類似点がみられる。66 の中央部には、横方向に直線状の擦り痕が観察できる。67 ～ 69 には弱い磨面とみられる範囲はあるものの、ほぼ加工痕は認められない。70 ～ 73 は砂岩製の台石である。70 は中央部に不整円形状に磨面がみられる。71 は扁平で、表面に浅い敲打痕が認められる。72 は表面に線状の磨痕が残り、中央部はやや凹んでいる。73 は建物跡の西側にあたる調査区壁面で出土した台石である。重量は 21.4 kg を測る。建物の掘削後、貼床を施す際に設置されたと考えられる。表面の広範囲に顕著な敲打痕が認められる。

３号竪穴建物跡（ＳＡ３）（第 17・18・23 図）

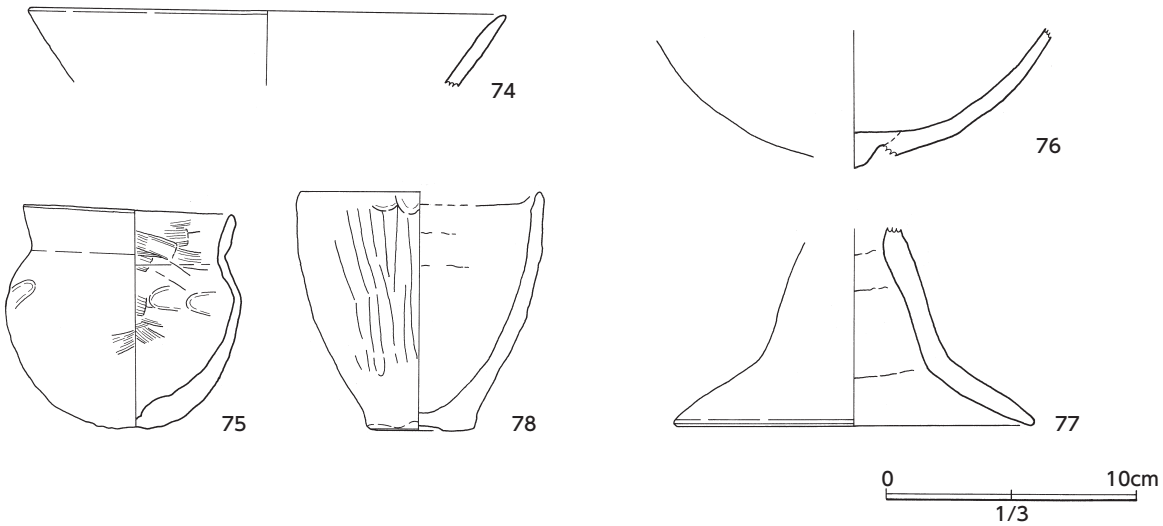
３号竪穴建物跡は、ｄ36 ～ｅ36 グリッドにかけて確認された建物跡である。ＳＡ１に南東側を切られ、東側は時期不明の土坑に切られている。南側の一辺は攪乱等のため検出することができなかった。建物跡はＳＡ１・ＳＡ２同様、西側の調査区外へ広がっている。検出した規模は、一辺約 1.3 ｍ× 2.9 ｍ、深さは最大 0.3 ｍを測る。明確な貼床は認められなかった。表土下から掘り込まれた、現存長軸 1.7 ｍ、短軸 1.4 ｍの楕円形の４号土坑に切られ、床面の中央部分を消失していた。精査を行ったものの床面に柱穴は確認できなかった。

床面中央部が残存していないため、検出された遺物数は少ない。５点を図化した。74、75 は壺である。74 は口唇部が尖り気味で、外傾する。内外面ともにナデ調整である。75 は北西側床面に口縁部を上に、ほぼ直立した状態で確認された。法量は口径 8.3 ㎝、底径 2.3 ㎝、器高 8.9 ㎝を測る。底部は小さな平坦面をもつ丸底を呈する。最大径は胴部上位にあり、9.3 ㎝である。76、77 は高坏である。76 は体部と口縁部の境に稜はみられず、坏部と裾部の接合部に粘土充填がみられる。77 の脚部はやや外側に開く柱



第 21 図　串木遺跡第４地点ＳＡ２出土遺物実測図（１）

第 22 図　串木遺跡第４地点ＳＡ２出土遺物実測図（２）



第 23 図　串木遺跡第４地点ＳＡ３出土遺物実測図

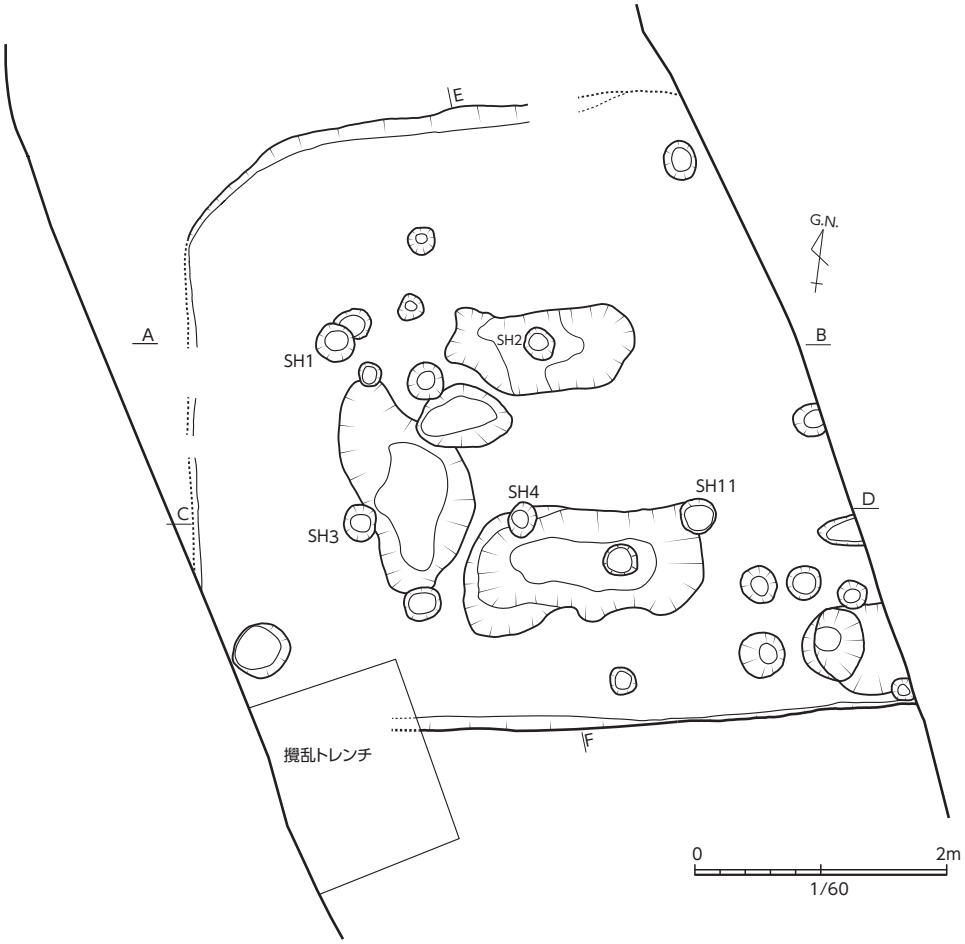
状を呈し、裾部との境は不明瞭である。裾端部は丸みを帯びる。78 は鉢である。法量は、口径約 9.5 ㎝、底径 4.3 ㎝、器高 9.4 ㎝を測る。外面には、ヘラ状工具による縦・斜方向のナデ調整が施される。

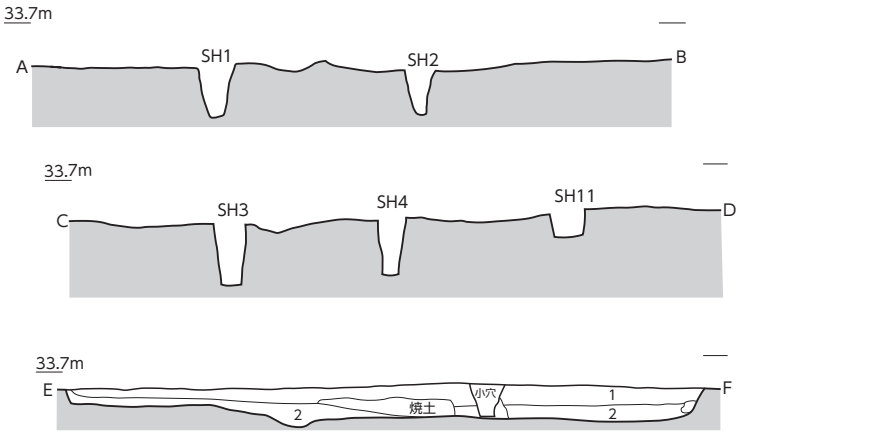
４号竪穴建物跡（ＳＡ４）（第 17・24・25 図）

４号竪穴建物跡は、ｃ34 ～ｄ35 グリッドにかけて確認された建物跡であり、東側は耕作地の下に広がる。串木遺跡第４地点で検出された建物跡の中で最大である。検出した規模で、一辺約 5.2 ｍ× 4.0 ｍを測る。検出面は南側のみに、薄く残存するⅢ層（アカホヤ火山灰）で、大半はⅤ層（暗褐色土）である。検出面からの深さは、南側で約 15 ㎝を測る。北側は、ほぼ床面での検出であった。わずかに貼床を施した痕跡が認められた。建物の床面中央部には、1.2 ｍ× 0.6 ｍの範囲に焼土がみられ、長軸 0.7 ｍ、短軸 0.5 ｍ、厚み約 5.0 ㎝を測る、不整楕円形の土坑が確認された。また、床面には焼土を取り囲むように不整形の掘り込みが３か所認められた。建物跡はＳＨ１～ＳＨ４の４本柱と考えられる。

柱穴の検出面からの深さは、ＳＨ１、ＳＨ２が約 40 ㎝、ＳＨ３が 45 ㎝、ＳＨ４が 20 ㎝を測る。壁帯溝等は確認されなかった。柱間はＳＨ１-ＳＨ２が約 1.6 ｍ、ＳＨ１-ＳＨ３が約 1.4 ｍ、ＳＨ２-ＳＨ４が約 1.8 ｍ、ＳＨ３-ＳＨ４が約 2.6 ｍを測る。

遺物は 26 点を図化した（第 25 図）79 ～ 86 は甕である。79 は最大径が胴部上位にあるとみられる。外面調整は粗い叩きであり、口縁部には厚くススが付着する。80、81 の口唇部は丸みを帯び、内外面ともにナデ調整が施される。82 ～ 85 は底部である。82、86 は底部から緩やかに外反しながら立ち上がり、83 は斜め上方に直線的に立ち上がる。84、85 は平底の底部から、やや内湾しながら立ち上がる。85 は小さな平底を呈し、外面に叩き調整がみられる。84、85 は壺の可能性もある。87 ～ 90 は壺である。87 ～ 89 は斜め上方に延び口唇部付近でわずかに外反する口縁部で、調整は内外面ともに横ナデが認められる。90 は小さな平底を呈し、底径 2.4 ㎝を測る。91 ～ 94 は高坏である。91、92 は坏体部と口縁部の境が不明瞭で、口縁部が外方向に大きく開く。93 は厚手で幅が狭い脚柱部で、坏部と接合部には粘土充填がみられる。94 は裾部であり、円形とみられる透かし孔が確認できる。内外面とも丁寧なナデ調整である。95 ～ 98 は石錘である。扁平な砂岩を素材とし、表裏面の長軸側に数度の打撃による剝離を行い、抉りを作り出している。97、98 は長軸方向に線状の擦痕がみられる。98 は両端の打欠きをつなぐように、幅１㎝の範囲で擦り痕が確認され、わずかに凹む。99 は敲石である。棒状の砂岩を素材とし、上下端部および右側面には、敲打痕が認められる。左側面から裏面に、ススの付着が認められる。裏面

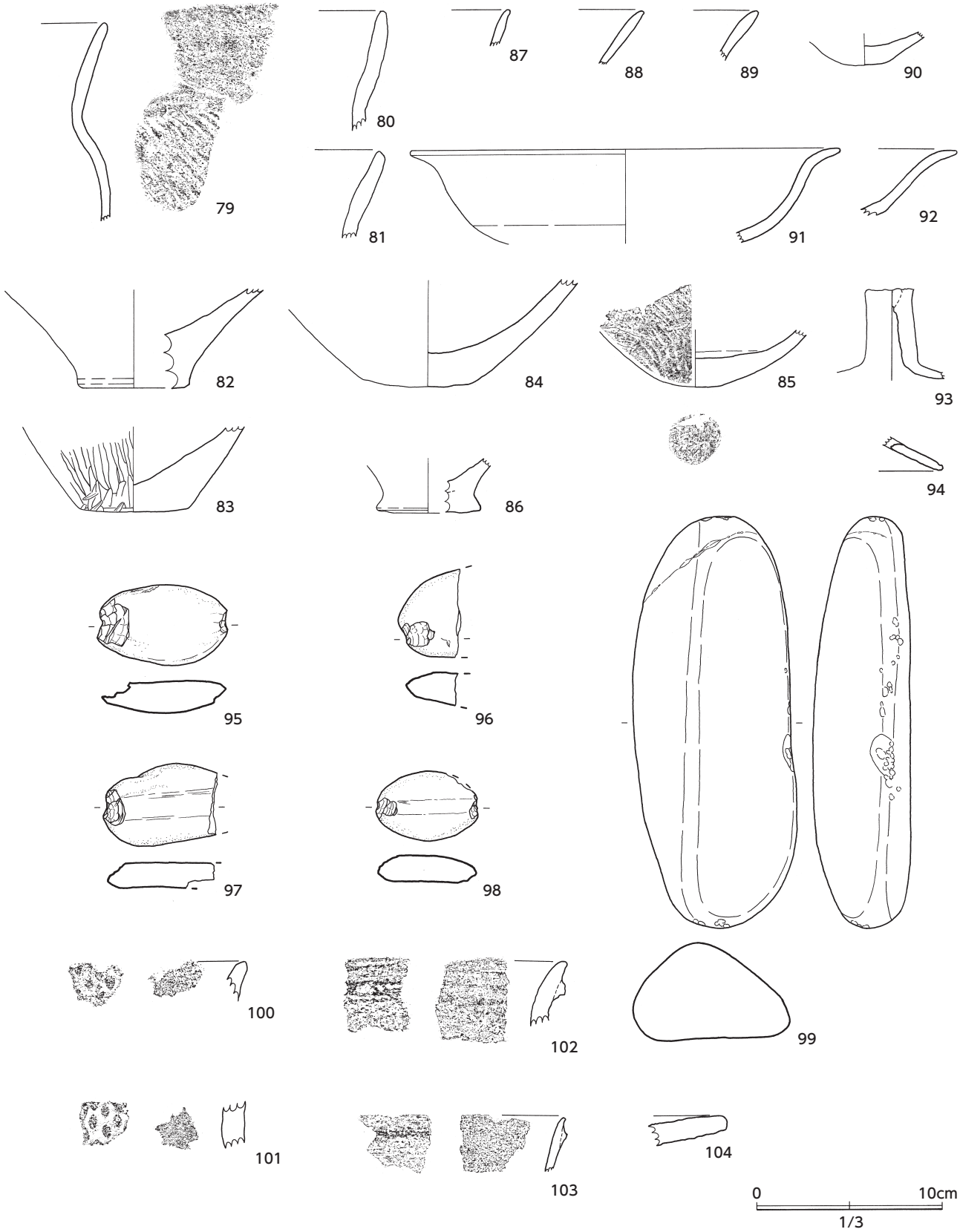




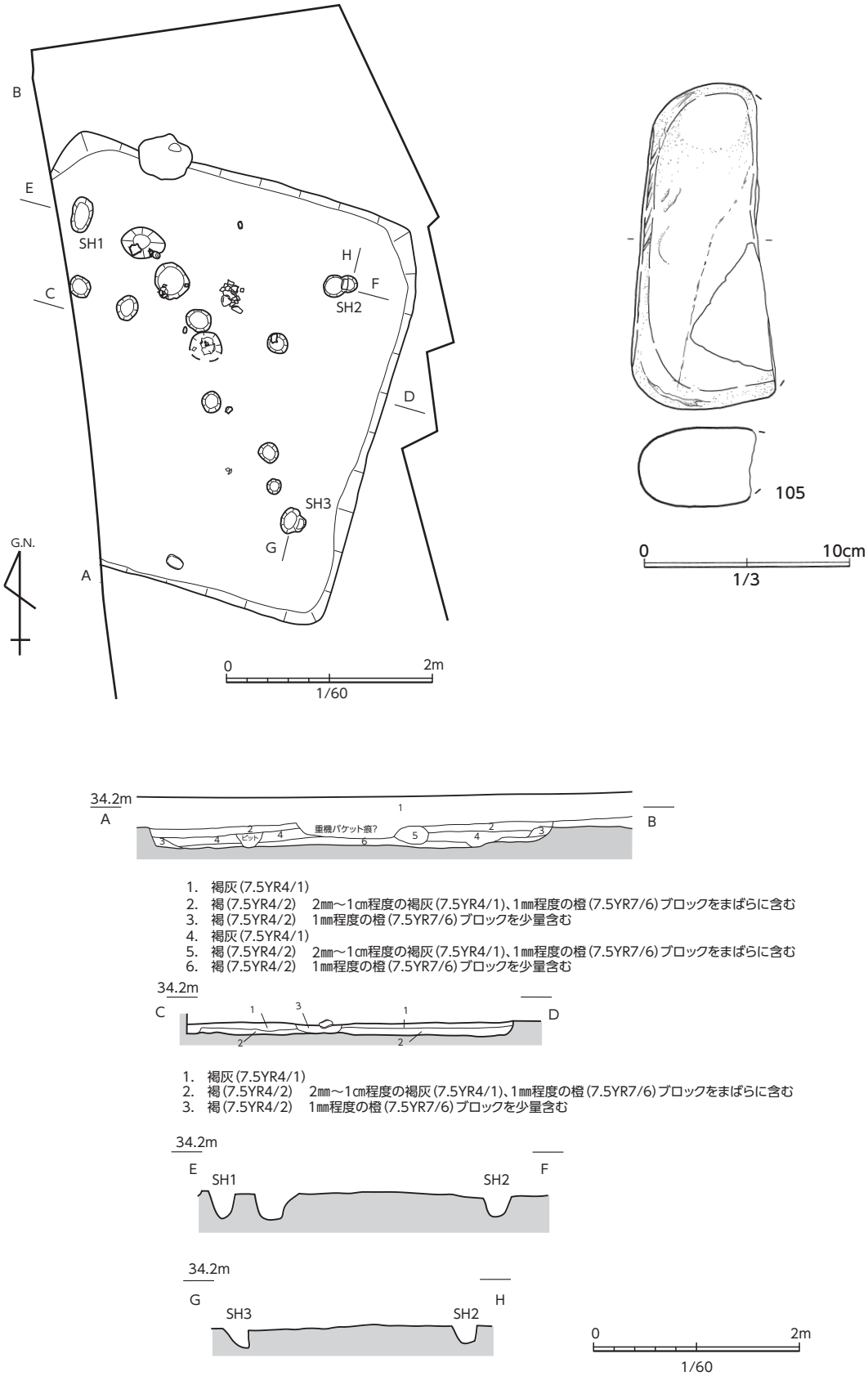
1. にぶい黄褐色（10YR5/4）1㎝程度のアカホヤ火山灰粒を含む
2. 暗褐色土（10YR4/4）2～3cm程度のアカホヤ火山灰ブロックを含む

0 2m
1/60

第 24 図　串木遺跡第４地点ＳＡ４平面・断面・土層断面図



第 25 図　串木遺跡第 4 地点ＳＡ４出土遺物実測図



第 26 図　串木遺跡第４地点ＳＡ５平面・柱穴断面・西壁土層断面及び出土遺物実測図

中央部には短軸方向に、幅約 3.0 ㎝を測る２条の付着痕跡が認められる。最大長 22 ㎝、幅 8.9 ㎝、厚さ 5.2 ㎝で、重量は約 1.4 ㎏を測る。100、101 は楕円押型文土器である。施文方向は斜位または縦位とみられる。102、103 は貼付突帯をもつ深鉢で、104 は台付皿の口縁部と考えられる。100 ～ 104 は建物跡の時期に伴う遺物ではない。

５号竪穴建物跡（ＳＡ５）（第 17・26 図）

５号竪穴建物跡は、調査区北端にあたるｂ28 ～ｂ29 グリッドで検出された。当初設定した調査区内で確認できたのは建物南端の一部だけであったため、北および東側に調査区を拡張し、広がりを確認した。検出面はⅤ層（暗褐色土）～Ⅵ層（褐色土）面である。平面は、南北方向の一辺約 3.9 ｍ、東西方向の一辺約 3.4 ｍの長方形を呈する。検出面からの深さは約 10 ㎝を測る。床面中央部で壺の底部と推定される土師器が確認されたものの、器壁が薄く、取り上げの際、破損してしまったため、掲載することができなかった。建物の床面で、小穴 13 基を検出した。ＳＨ１～ＳＨ３が主柱穴になると考えられる。それぞれの検出面からの深さは、ＳＨ１が約 31 ㎝、ＳＨ２が約 20 ㎝、ＳＨ３が 15 ㎝を測る。柱間はＳＨ１-ＳＨ２が約 2.6 ｍ、ＳＨ２-ＳＨ３が約 2.4 ｍである。明確な貼床や壁帯溝は確認されなかった。

105 は、ＳＡ５の北東側のＳＨ２の埋土中で確認された砂岩礫である。最大長 15.8 ㎝、最大幅約 7.0 ㎝、最大厚 4.1 ㎝、重量 685 ｇを測る。明瞭な加工や研磨痕はみられないことから、たも石として使用された可能性がある。

第３節　縄文時代早期の遺構と遺物

縄文時代早期の遺構は、集石遺構８基が確認された（第 17・27 ～ 29 図）。分布状況は、調査区北側のｂ30 グリッドで３基（ＳＩ１～ＳＩ３）、ｃ31・ｃ32 グリッドで２基（ＳＩ４・ＳＩ５）、南側で３基（ＳＩ６～ＳＩ８）である。北側はⅢ層（アカホヤ火山灰）下まで削平を受けており、５基はⅤ層面を掘削中に検出された。南側の３基はⅢ層が残存した範囲内で、古墳時代の竪穴建物跡の調査終了後、Ⅲ層を除去したｄ36・ｅ36 グリッドで検出された。北側で検出された集石遺構は、調査区北東壁面にも礫が認められることから、隣接する耕作地側にも広がっているものと推定される。検出された集石遺構には、明確に配石をもつものはなかった。構成礫は、被熱によって割れたと考えられる砂岩礫を主体とし、赤化が認められた。集石遺構の中で、埋土中に炭化物の出土が認められた３基（ＳＩ１、ＳＩ６、ＳＩ７）のうち、遺存状態の良好なＳＩ１、ＳＩ６の炭化物について、放射性炭素Ｃ 14 年代測定分析を行った。詳細については第Ⅴ章に記す。

１号集石遺構（ＳＩ１）（第 17・27・28 図）

ｂ30 グリッドに位置する。Ⅴ層下部とⅥ層の漸移的な層位で検出された。串木遺跡第４地点調査区の最も北側に位置する。検出された８基の集石遺構の中で、もっとも大型で礫の密集度が高い。遺構を構成する礫の大半は、うすく赤化した砂岩で拳大から人頭大の大きさである。外周には、人頭大程の比較的大きな円礫、亜円礫を配し、内部には被熱によって割れたと考えられる拳大の焼礫が密集している。礫は約 1.7 ｍ×約 1.6 ｍのほぼ円形状に広がる。精査の際、密集した礫内から黒曜石片が出土している。下部の掘り込みは、長軸約 1.4 ｍ、短軸約 1.3 ｍの不整な円形である。全周に、テラス状の平坦面が認められ、二段掘りとなっていた。床面はⅦ層に相当するとみられる。掘り込みの断面はＵ字状を呈し、検出面からの深さは約 0.2 ｍを測る。埋土はⅤ層由来と考えられる暗褐色土を主体とし、掘り込みの中

央付近の埋土上層から下層にかけて１～２㎝の炭化物が確認され、かたく締まり硬化している状況であった。底面に配石はなく、埋土中からの遺物の出土も認められなかった。確認された炭化物については、放射性炭素Ｃ14 年代測定を行った。（詳細は第Ｖ章を参照）

２号集石遺構（ＳＩ２）（第 17・27・28 図）

Ｂ30 グリッドで、ＳＩ１の西側約 1.0 ｍに位置する。検出時、ＳＩ１と同遺構の可能性を考えたが、精査を進めていく中で、礫の空白部分が広がることや、単独である程度まとまることから別遺構とした。８基の集石遺構の中でもっとも規模が小さく、34 個の被熱によって割れたと考えられる砂岩の角礫で構成され、約 0.7 ｍ×約 0.5 ｍの範囲に広がる。下部の掘り込みの平面は、約 0.55 ｍ×約 0.55 ｍの不整な円形で、検出面からの深さは 0.05 ｍと浅い皿状になる。被熱による赤化度は弱い。埋土内には、遺構に伴う遺物や炭化物の出土は認められなかった。

３号集石遺構（ＳＩ３）（第 17・27・28 図）

ＳＩ１の南東約 2.0 ｍの、ｂ30 グリッドに位置する。集石の密度は疎であり、1.3 ｍ× 1.0 ｍの範囲に約３～ 10.5 ㎝の破砕された砂岩礫 63 個が広がる。遺構の北側は、後世のピットによって切られている。下部に掘り込みは認められなかった。礫はすべて砂岩で、ほとんどの礫には、顕著な赤化が認められなかった。

４号集石遺構（ＳＩ４）（第 17・27・28 図）

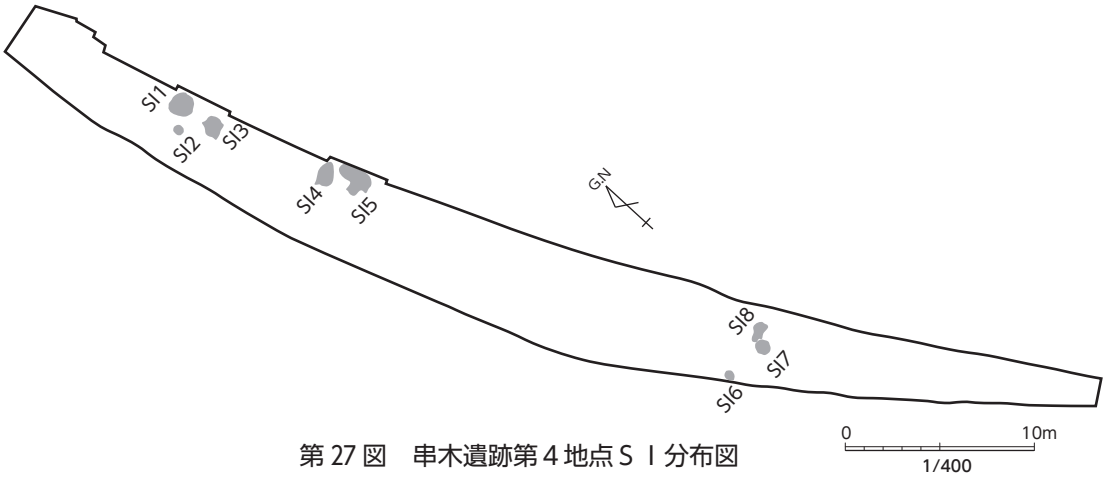
ＳＩ４は、ＳＩ１の南東約 8.0 ｍの、ｃ31 グリッドに位置する。淡く赤化した砂岩の亜円礫 80 個が、約 0.8 ｍ× 0.8 ｍの範囲に広がっている。周囲には、配石であった可能性のある人頭大の礫が確認された。周囲の集石遺構と比較し、破砕礫の割合が少ない。掘り込みはなく、遺構内および周辺での炭化物や遺物の出土は認められなかった。

５号集石遺構（ＳＩ５）（第 17・27・29 図）

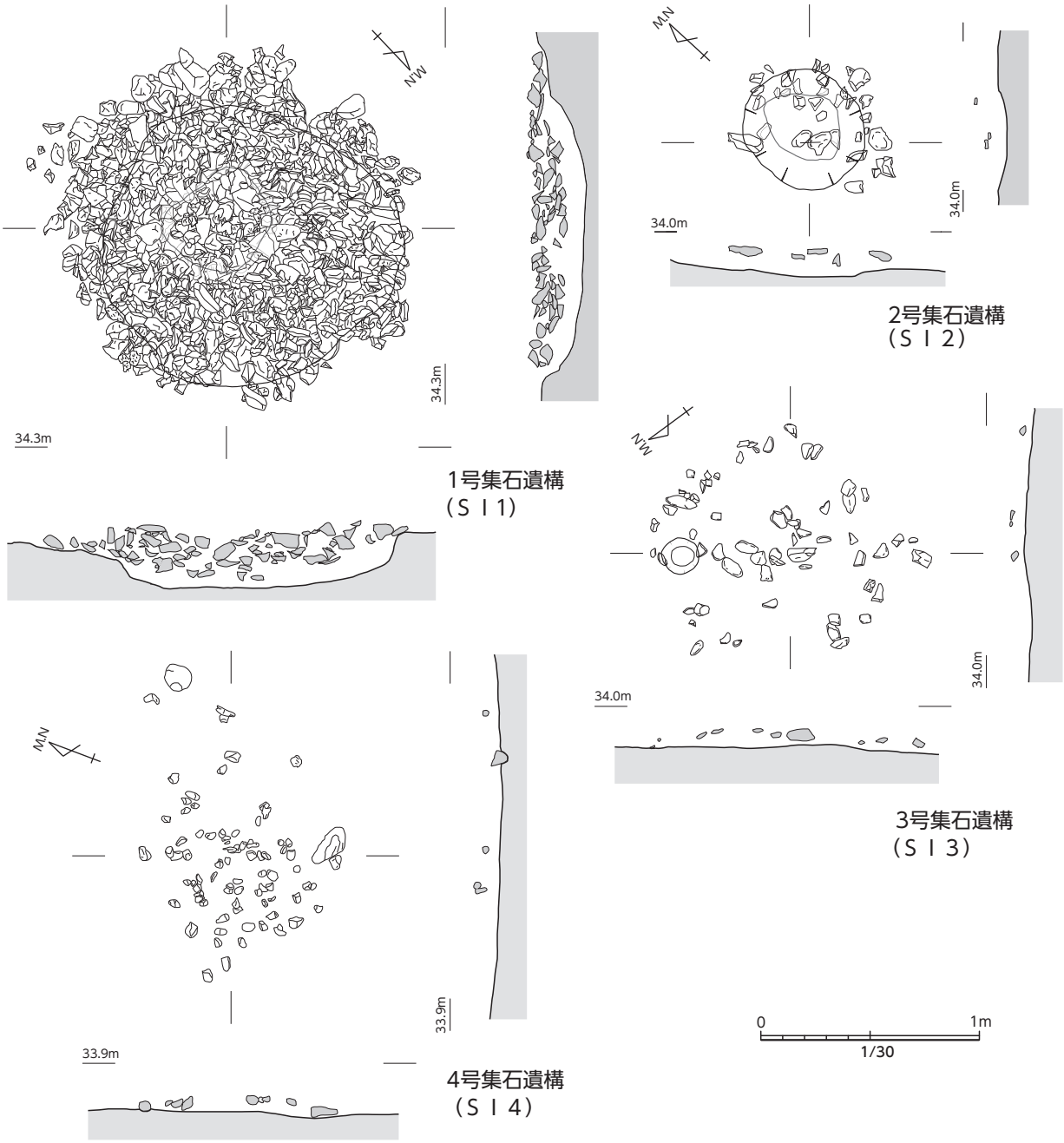
ＳＩ５は、ＳＩ４の南約 2.0 ｍに位置する。遺構は、東側調査区外へ延びていたため、拡張を行ったが、範囲を確定するには至らなかった。集石遺構は検出時で、約 1.7 ｍ×約 1.4 ｍの範囲に、人頭大から拳大までの大小さまざまな砂岩の円礫や角礫 256 個が点在している状況であった。周囲に礫の点在が認められない中、礫が比較的まとまっていたことから集石遺構と認定した。本来は、南側と北側で２基の集石遺構、または、複数のまとまりであった可能性も考えられたが、明確には分離が困難であったため、１基として扱った。礫は被熱によるとみられる淡い赤化が認められる。下部の掘り込みや遺物の出土は認められなかった。

６号集石遺構（ＳＩ６）（第 17・27・29 図）

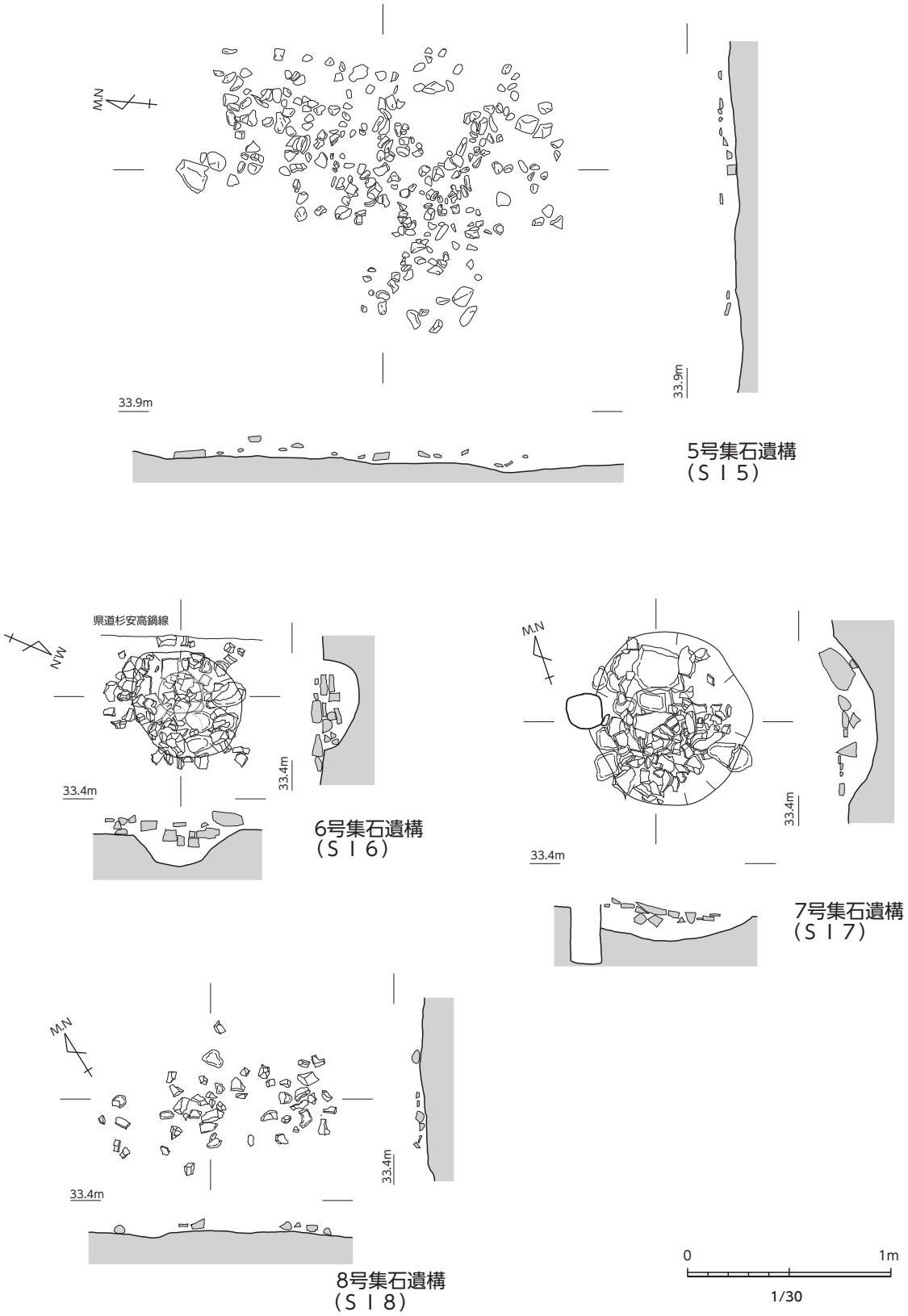
ＳＩ６は、ＳＡ３の調査終了後、Ⅲ層（アカホヤ火山灰）を除去し、ｄ36 グリッドで検出された。検出面はＶ層（暗褐色土）の上位面である。遺構は、約 0.7 ｍ×約 0.6 ｍのほぼ円形の範囲に礫が密集する。礫は被熱によって割れたと考えられる拳大の角礫や 15 ㎝程の亜角礫によって構成される。調査区北東側で検出されたＳＩ１～ＳＩ５と比較し、構成礫に角礫が多く、強い赤化がみられる。下部の掘り込みは、南北方向に約 0.6 ｍ、東西方向に約 0.5 ｍの規模の楕円形である。検出面からの深さは 0.2 ｍで、断面形はＵ字状を呈する。中央部に、0.5 ～ 1.5 ㎝程度の炭化材が検出された。掘り込み内下層の埋土は褐色土で、底面から約 0.1 ｍまでの埋土は炭化物が混入し、固くしまる。配石や遺物等の出土は認められなかった。底面付近で検出された炭化材については、放射性炭素Ｃ 14 年代測定を実施した。結果については第Ｖ章を参照されたい。



第 27 図　串木遺跡第４地点ＳＩ分布図



第 28 図　串木遺跡第４地点ＳＩ１～ＳＩ４実測図



第 29 図　串木遺跡第４地点ＳＩ５～ＳＩ８実測図

７号集石遺構（ＳＩ７）（第 17・27・29 図）

ＳＩ７は、ＳＡ３の床面検出時に確認された。ＳＩ６の東約 2.5 ｍにあたる e 36 グリッドで検出された。集石遺構の上面は、建物跡の床面構築に伴って上部礫が削平され、下部のみが遺存したと考えられる。礫は約 0.75 ｍ×約 0.6 ｍの範囲に広がる。配石と推定される約 20 ～ 30 ㎝の扁平な礫を含み、やや大型の角礫によって構成されていた。礫の大部分には、被熱によるとみられる赤化とひび割れがみられた。下部に掘り込みを有し、約 0.85 ｍ×約 0.8 ｍの不整円形で、西側の一部を後世のピットによって消失している。検出面からの深さは約 0.2 ｍ、断面形はＵ字状を呈する。埋土はＶ層（暗褐色土）を基調とし、底面はやや濁った暗褐色土である。ＳＩ６と同様、掘り込みの中央部に炭化物が確認され、配石と考えられる礫の下部、底面より約 0.1 ｍの厚みで炭化物を含む固くしまった埋土が確認された。

８号集石遺構（ＳＩ８）（第 17・27・29 図）

ＳＩ８は、ＳＩ７の北東約 1.0 ｍにあたる e 36 グリッドに位置する。礫の密度は疎で、東西方向に約 1.2 ｍ×約 0.5 ｍの範囲に礫 47 個が広がる。ＳＩ７が扁平で大型の礫で構成されていたのとは対照的で、ＳＩ８の大部分は、破砕され、うすく赤化した約３～ 10 ㎝の砂岩礫で構成されている。遺構の西側は、ＳＡ３の壁面に近接しており、下部に掘り込みや遺物の出土は認められなかった。

第４節　時期不明の遺構と遺物

第Ⅲ層（アカホヤ火山灰）面で検出された、第Ⅱ層（黒色土）由来の埋土を主体とするものは、ピット群、土坑２基、溝状遺構５条である。包含層より縄文時代から近世の遺物が出土し、そのうち 18 点を図化した。

４号土坑（ＳＣ４）（第 30 図）

ＳＣ４は d 36 グリッド、ＳＡ３の床面の中央部付近で検出された。長軸約 1.7 ｍ、短軸約 1.4 ｍの楕円形で、検出面からの深さは約 0.2 ｍを測る。遺構の南東側で、１号竪穴建物跡（ＳＡ１）を切る。埋土はⅡ層を含んだ褐灰色土で、拳大の礫が多量に含まれていた。

遺物は６点を図化した。106 ～ 109 は甕である。106 は口縁部がやや直口し、口唇部は尖り気味である。外面全体にススが付着する。内面は粗いナデ調整が施される。107 ～ 109 は底部である。107 はドーナツ状の上げ底を呈し、緩やかに斜め上方に立ち上がる。108、109 はやや厚手で丸底である。109 は外面に叩き調整がみられる。110 は壺である。口縁は緩やかに内湾し、口唇部は尖り気味である。内面胴部上半に粘土の接合痕が認められる。111 は高坏である。脚柱部で、厚手である。坏部と裾部の接合部に粘土充填がみられる。

７号土坑（ＳＣ７）（第 30 図）

ＳＣ７は c 32 グリッドに位置し、検出面はⅥ層（褐色土）である。長軸約 0.7 ｍ、短軸約 0.55 ｍ、検出面からの深さは約 0.2 ｍを測る。埋土上面にはアカホヤ火山灰粒を含み、炭化物粒が確認された。

遺物は焼礫に混じって出土している。112 は縄文時代の深鉢の底部で、上げ底を呈する。立ち上がりは直線的で、内外面ともに粗いナデ調整が施される。

ピット・大型柱穴（第 30 図）

調査区内でピット 106 基を検出した。大半の埋土は黒色土を主体とする。ピット径は約 0.2 ～ 0.4 ｍで、検出面からの深さは約 0.2 ～ 0.35 ｍを測る。

ＳＨ 21 から、113 の土師器の小皿が出土している。法量は、口径約 8.4 ㎝、底径約 6.5 ㎝、器高約 1.9

cmを測る。底部はヘラ切りである。C33グリッドで検出され、N－70°－Wに延びるＳＨ41～ＳＨ44は径約0.6～0.8ｍと規模が大きく、柱間は約１～２ｍである。もっとも大型のＳＨ42の中央には柱痕が認められた。大型の建物跡と推定され、周辺を精査したものの対応する遺構は確認できなかった。

１号溝状遺構（ＳＥ１）（第30図）

ＳＥ１は調査区南端、ｆ38グリッドで検出され、N－35°－Eに延びる。検出面はⅡ層（黒色土）である。両端は調査区外へ延びている。現存長2.5ｍ、最大幅2.3ｍ、検出面からの深さは約0.3ｍを測る。断面観察の結果、溝状遺構の壁面の南側は緩やかに、北側は直線的に立ち上がる。埋土は黒褐色土を主体とする。

埋土中から出土した遺物３点を図化した。114は土錘である。中央部が最大幅4.2cmとなる。最大長1.7cm、最大厚1.6cm、推定孔径0.45cmを測る。重量は９ｇである。115、116は石錘である。扁平な礫を素材とし、表裏面の長軸側に数度の打撃による剥離を行い、抉りを作り出している。116は表面の長軸左側と裏面右側に大きく抉りが認められる。表面中央部に横方向の擦り痕が認められる。115は頁岩製、116は砂岩製である。

２号溝状遺構（ＳＥ２）（第30図）

ＳＥ２は、ＳＥ１の北西約1.5ｍのｆ37グリッドで検出された。弧状を呈し、検出長約２ｍ、最大幅約0.3ｍ、検出面からの深さは約0.2ｍを測る。断面は箱型を呈する。埋土は黒褐色土で、遺物等の出土は認められなかった。

３号溝状遺構（ＳＥ３）（第30図）

ＳＥ３は、ｄ35～ｅ36グリッドにかけて検出され、N－65°－Wに延びる。南東側は調査区外へ延び、北西側は消失する。検出した長さは約4.0ｍ、最大幅0.4ｍ、検出面からの深さは約0.3ｍを測る。断面は箱型を呈する。埋土は黒褐色土で、遺物等の出土は認められなかった。

４号溝状遺構（ＳＥ４）（第30図）

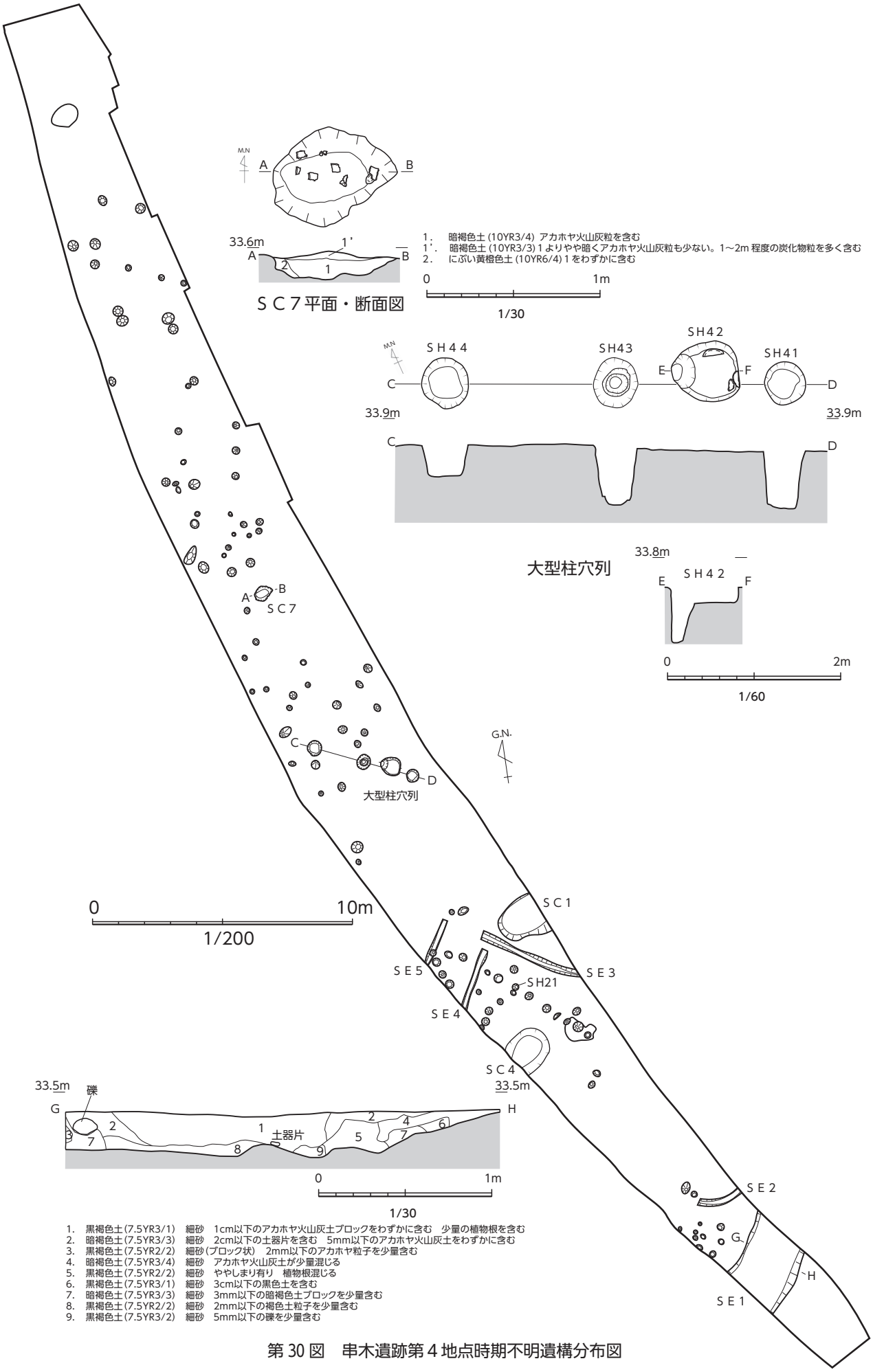
ＳＥ４は、ｄ35～ｅ36グリッドにかけて検出され、N－23°－Eに延びる。南西側は調査区外へ延び、北東側はＳＥ３の手前で消失する。方向的にＳＥ３と、ほぼ直行するものと考えられる。検出した長さは約2.5ｍ、最大幅0.3ｍ、検出面からの深さは約0.2ｍを測る。断面は箱型を呈する。埋土は黒褐色土で、遺物等の出土は認められなかった。

５号溝状遺構（ＳＥ５）（第30図）

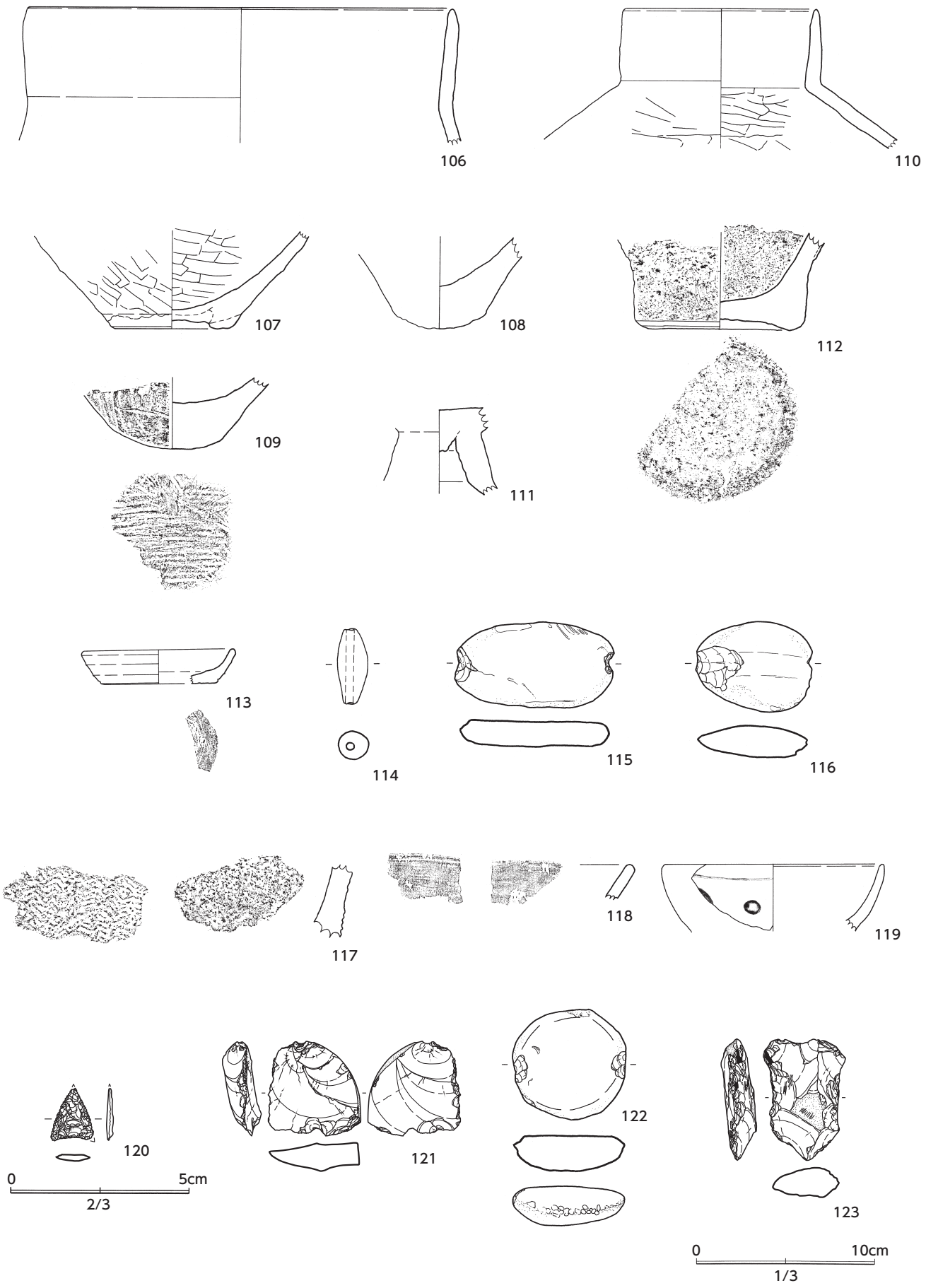
ＳＥ５は、ｄ35グリッドで検出された。ＳＥ４の北側1.5ｍでほぼ並行し、N－23°－Eに延びる。南西側は調査区外へ延び、北東側は浅くなり消失する。検出した長さは約2.0ｍ、最大幅0.3ｍ、検出面からの深さは約0.2ｍを測る。断面は箱型を呈する。埋土は黒褐色土で、遺物等の出土は認められなかった。

包含層出土遺物（第31図）

117は押型文土器で、外面に密な山形押型文がみられる。118は黒色磨研土器の浅鉢である。口縁部は丸みを帯びる。119は肥前系の丸碗である。外面に蛍文がみられる。18世紀後半～19世紀とみられる。120は黒曜石（桑木津留産）製の石鏃である。凹基で浅い抉りを有する。121は頁岩製の二次加工剥片である。不定形の剥片を素材とし、左側縁と下端部に微細な剥離が認められる。右側面は礫面を残す。122は砂岩製の石錘である。円形で表裏面の左右に数度の打撃による剥離を行い、抉りを作り出している。下端には敲打痕が認められる。123は打製石斧の未製品で、基部付近にあたるとみられる。全体に厚みがあり、下部が折損したものと考えられる。



第 30 図　串木遺跡第４地点時期不明遺構分布図



第 31 図　串木遺跡第４地点ＳＣ・ＳＨ・ＳＥ・包含層出土遺物実測図

第３表　串木遺跡第４地点出土遺物観察表（１）

掲載番号	種別	器種	部位	出土位置	法　量（cm）			器面調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				Gr.・層・遺構	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	土師器	甕	口縁～胴部	SA1	(15.2)			連続する指押さえ 横ナデ スス付着	沈線あり 横ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	1mm以下の赤色粒を多量に含む 微細な金色粒をわずかに含む	
2	土師器	甕	口縁部	SA1				横ナデ スス付着	横ナデ	橙 5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	1mm以下の赤色粒を少量含む	
3	土師器	甕	口縁部	SA1				横ナデ	横ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	1mm以下の褐色粒を含む 1mm以下の雲母をわずかに含む 0.5mm以下白色粒を含む	
4	土師器	甕	口縁部	SA1				横ナデ スス付着	横ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	1mm以下の赤色粒を少量含む 1mm以下の白色粒をわずかに含む	
5	土師器	甕	口縁部	SA1				斜方向のナデ スス付着	斜方向のナデ	にぶい黄 7.5YR6/4	浅黄橙 7.5YR8/4	1mm以下の赤褐色粒を少量含む 微細な光沢粒をわずかに含む	
6	土師器	甕	口縁部	SA1				ナデ 風化著しい スス付着	横ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	5mm以下の赤褐色粒を多量に含む	
7	土師器	甕	口縁部	SA1				ナデ	ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	3mm以下の褐色粒を含む 3mm以下の灰色粒を含む 2mm以下の白色粒を少量含む	
8	土師器	甕	口縁～胴部	SA1				ナデ スス付着	横ナデ 斜方向のナデ	浅黄橙 10YR8/4 にぶい黄橙 10YR6/4	浅黄橙 10YR8/4	1mm以下の赤色粒を多量に含む 微細な金色粒をわずかに含む	
9	土師器	甕	口縁部	SA1				横方向・斜方向の工具ナデ スス付着	横方向・斜方向の工具ナデ	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/3	5mm以下の赤褐色粒を微少に含む 1mm以下の白色粒をわずかに含む	
10	土師器	甕	底部	SA1		(7.6)		ナデ 指押さえ	ナデ	浅黄橙 10YR8/4	暗灰 N3/	6mm以下の褐色粒を含む 1mm以下の白色粒をわずかに含む	
11	土師器	甕	底部	SA1		(8.1)		斜方向のナデ スス付着 強い指押さえ	ナデ 全体的に黒斑	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	2mm以下の灰色粒を多量に含む 2mm以下の黒色粒・灰白色粒をわずかに含む 微細な透明粒を少量含む	
12	土師器	壺	頸部	SA1				刻目貼付突帯	横ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	1mm以下の赤色粒を多量に含む	
13	土師器	甕	胴部～底部	SA1		5.0		粗いケズリ スス付着	斜方向の工具ナデ 指頭痕 一部黒斑	にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい橙 7.5YR7/4	5mm以下の赤褐色粒を多量に含む 微細な透明粒をわずかに含む	
14	土師器	壺	頸部～胴部	SA1				横ナデ 横・斜方向のミガキ 一部黒斑	ナデ しぼり痕 一部黒斑	橙 7.5YR7/6	浅黄 2.5YR7/4	3mm以下の褐色粒・灰色粒を含む 1mm以下の雲母をわずかに含む 微細な透明粒をわずかに含む	
15	土師器	小型壺	完形	SA1	6.4	8.7	9.9	丁寧なナデ 一部黒変	横ナデ 指頭痕 粗い工具痕	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/5	微細な灰色粒をわずかに含む 微細な透明粒をわずかに含む 微細な雲母をわずかに含む	
16	土師器	壺	底部	SA1				縦方向のナデ スス付着	斜方向のナデ 指頭痕	にぶい黄橙 10YR7/3	灰黄褐 10YR5/2	2mm以下の赤褐色粒を少量含む	
17	土師器	壺	底部付近	SA1				横ナデ	縦方向の指ナデ 指頭痕	黄橙 10YR 8/6	浅黄橙 10YR8/4 灰黄褐 10YR6/2	2mm以下の赤褐色粒を少量含む	
18	土師器	壺	胴部～底部	SA1		(3.0)		ナデ 強い工具痕	斜方向のナデ 強い工具痕 炭化物付着	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/3	5mm以下の赤褐色粒・灰色粒を多量に含む 微細な雲母をわずかに含む	
19	土師器	壺	底部	SA1		3.6		ナデ スス付着	ナデ 指頭痕あり 黒斑あり	浅黄橙 7.YR8/4	黄橙 10YR8/6	0.5mm以下の褐色粒を少量含む	
20	土師器	壺	底部	SA1				ナデ 不定方向の工具痕あり	粗いナデ	浅黄 2.5YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/4	2mm以下の褐色粒を含む 2mm以下の白色粒をわずかに含む	

第４表　串木遺跡第４地点出土遺物観察表（２）

掲載番号	種別	器種	部位	出土位置	法　量（cm）			器面調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				Gr.・層・遺構	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
21	土師器	壺	胴部～底部	SA1		(2.4)		強い工具痕あり	多方向の強い工具痕 炭化物付着	にぶい黄橙 10YR7/4	褐灰 10YR6/1	5mm以下の赤褐色粒を多量に含む 5mm以下の灰色粒を多量に含む 2mm以下の白色粒を含む	
22	土師器	高坏	坏部	SA1	(20.6)			横方向のハケ目 一部ナデ消し	ハケ目 横ナデ	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	1mm以下の赤色粒をわずかに含む 2mm以下の金色粒をわずかに含む	
23	土師器	高坏	口縁～頸部	SA1	(20.0)			横ナデ 工具痕あり スス付着	スス付着 斜方向のナデ	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄 2.5YR6/3	微細な透明粒をわずかに含む 微細な金色粒をわずかに含む	
24	土師器	高坏	口縁～胴部	SA1				ナデ(風化気味)	横方向のハケ目後 横方向のナデ	浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	0.5mm以下の褐色粒・灰色粒を多量に含む 微細な透明粒・雲母をわずかに含む 6mm以下の赤褐色粒をわずかに含む	
25	土師器	高坏	坏部～裾部	SA1				ナデ スス付着	多方向のナデ 円周に沿ったナデ	淡黄 5YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	微細な赤褐色粒をわずかに含む 微細な雲母をわずかに含む 微細な白色粒をわずかに含む	
26	土師器	高坏	脚部	SA1				ナデ	ナデ しぼり痕	明黄褐 10YR7/6	灰白 10YR8/1 明黄褐 10YR7/6	微細な雲母をわずかに含む 2mm以下の褐色粒を少量含む 微細な白色粒をわずかに含む	
27	土師器	高坏	脚部	SA1				丁寧なナデ	縦方向の工具痕 しぼり痕	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	5mm以下の赤褐色粒を含む 5mm以下の白色粒を少量含む 2mm以下の灰色粒をわずかに含む	
28	土師器	高坏	脚部～裾部	SA1				横方向のナデ	円周に沿ったナデ しぼり痕	浅黄橙 10YR8/4	橙 7.5YR7/6	5mm以下の赤褐色粒をわずかに含む 5mm以下の灰色粒をわずかに含む 微細な雲母をわずかに含む	
29	土師器	高坏	裾部	SA1				ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	1mm以下の褐色粒を含む 0.5mm以下の雲母をわずかに含む	
30	土師器	高坏	裾部	SA1				横ナデ (風化ぎみ)	ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/6	1mm以下の褐色粒を含む 微細な透明光沢粒をわずかに含む 1mm以下の雲母をわずかに含む	
31	土師器	高坏	脚部	SA1		(9.8)		ナデ	ナデ	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/4	2mm以下の灰色粒をわずかに含む 1mm以下のを褐色粒をわずかに含む	
32	土師器	椀	口縁～底部	SA1	14.7	-	9.1	ナデ ケズリ状のナデ	横ナデ 丁寧なナデ	橙 7.5YR7/6 浅黄橙 7.5YR8/4	明黄褐 10YR7/6 褐灰 10YR4/1	1mm以下の赤色粒を少量含む 微細な透明・金色粒をわずかに含む	
33	土師器	椀	口縁～胴部	SA1	(12.6)			横ナデ (風化ぎみ)	横ナデ 丁寧なナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	1mm以下の褐色粒を含む 0.5mm以下の白色粒・雲母をわずかに含む	
34	土師器	椀	口縁～胴部	SA1	13.6			横方向のナデ	横方向のナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	微細な赤褐色粒・灰色粒・透明粒をわずかに含む	
35	土師器	椀	口縁～胴部	SA1				横ナデ	横ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	2mm以下の赤褐色粒をわずかに含む 微細な雲母をわずかに含む	
36	土師器	椀	口縁～胴部	SA1				ナデ	丁寧なナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/4	1.5mm以下の褐色粒を含む 微細な雲母をわずかに含む	
37	土師器	椀	口縁	SA1				横ナデ 縦・斜方向のミガキ	横ナデ (風化ぎみ)	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	微細な透明光沢粒を含む 微細な褐色粒をわずかに含む	
38	土師器	椀	口縁～胴部	SA1				横ナデ 黒斑あり	ナデ	浅黄橙 10YR/4 浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	1mm以下の褐色粒・赤褐色粒を少量含む 1mm以下の雲母をわずかに含む	
39	土師器	椀	胴部～底部	SA1				ナデ 一部黒斑	ナデ 指頭痕 一部黒斑	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	1.5mm以下の雲母を含む 1mm以下の褐色粒・白色粒をわずかに含む	
40	土師器	椀	胴部～底部	SA1		(5.6)		風化気味 スス付着 一部黒変	ナデ 炭化物付着 一部黒斑	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/3	3mm以下の赤褐色粒を多量に含む 2mm以下の灰色粒を含む 微細な雲母をわずかに含む	

第５表　串木遺跡第４地点出土遺物観察表（３）

掲載番号	種別	器種	部位	出土位置	法　量（cm）			器面調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				Gr.・層・遺構	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
41	縄文土器	深鉢	口縁	SA1				横ナデ 貼付突帯 スス付着	横ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	微細な光沢粒を少量含む 微細な白色粒を少量含む	
42	土師器	甕	胴部	SA1				格子目 叩き	ナデ	浅黄橙 10YR8/4	灰黄 2.5Y6/2	3mm以下の褐色粒を少量含む 1mm以下の白色粒をわずかに含む	
48	土師器	壺	頸部～胴部	SA2				横ナデ	横ナデ しぼり痕	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	4mm以下の赤褐色粒を多量に含む 2mm以下の灰色粒を含む 微細な雲母をわずかに含む	
49	土師器	壺	胴部～底部	SA2		5.6		横ナデ	縦・横方向のヘラミガキ 黒斑	浅黄橙 7.5YR8/4	灰 5Y4/1 浅黄橙 10YR8/4	3mm以下の褐色粒を含む 1mm以下の灰色粒・透明光沢粒をわずかに含む 微細な雲母をわずかに含む	
50	土師器	壺	底部	SA2				ナデ	ナデ 黒斑	にぶい黄橙 10YR7/3 淡黄 2.5Y8/3	浅黄橙 10YR8/3 灰白 2.5Y7/1	2mm以下の灰色粒を少量含む 1mm以下の褐色粒を少量含む 1mm以下の白色光沢粒・透明光沢粒をわずかに含む	
51	土師器	壺	胴部～底部	SA2				縦方向のナデ 強い工具痕	縦方向のナデ	灰黄褐 10YR6/2	灰黄 2.5Y6/2	3mm以下の灰色粒を多量に含む 2mm以下の赤褐色粒を含む 2mm以下の白色粒を少量含む	
52	土師器	壺	底部	SA2				粗いナデ 工具痕あり	粗いナデ 黒斑あり	浅黄橙 10YR8/3	黄灰 2.5Y5/1	5mm以下の赤褐色粒を含む 2mm以下の白色粒をわずかに含む 微細な透明光沢粒をわずかに含む	
53	土師器	椀	口縁～胴部	SA2	(13.0)			横ナデ	ナデ	浅黄橙 10YR8/3 7.5YR8/6	橙 7.5YR7/6	4mm以下の褐色粒を含む 3mm以下の灰色粒を含む 微細な黒色光沢粒をごくわずかに含む	
54	土師器	椀	口縁～胴部	SA2	(13.1)			横ナデ	横ナデ 黒斑あり	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	0.5mm以下の褐色粒をわずかに含む 1mm以下の雲母をわずかに含む	
55	土師器	椀	口縁～胴部	SA2				ナデ 一部黒斑	横ナデ	黄橙 10YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	微細な赤褐色粒をごくわずかに含む	
56	土師器	椀	口縁～胴部	SA2				風化のため調整不明	風化のため調整不明	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	微細な赤褐色粒をごくわずかに含む	
57	土師器	椀	口縁～胴部	SA2				ナデ	回転ナデ	橙 5YR7/6	黄橙 10YR8/4	2mm以下の赤褐色粒を含む 微細な雲母をわずかに含む	
58	土師器	椀	口縁～胴部	SA2				ナデ	横ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	1mm以下の赤褐色粒をわずかに含む 1mm以下の灰色粒をわずかに含む	
59	土師器	甕	口縁部	SA2				ナデ 黒変 スス付着	ナデ 黒変	灰 5Y4/1	にぶい褐 7.5YR5/4	4mm以下の灰色粒を含む 4mm以下の褐色粒を含む 1mm以下の白色粒をごくわずかに含む	
60	須恵器	坏身	受部	SA2				回転ナデ ケズリ	回転ナデ	灰黄 2.5Y5/1	灰黄 2.5Y5/1	1mm以下の白色粒をわずかに含む	
61	須恵器	高坏	脚部	SA2		(10.2)		回転ナデ	回転ナデ	黄灰 2.5Y6/1	灰白 2.5Y7/1	3mm以下の白色粒を少量含む 2mm以下の灰色粒を少量含む 微細な黒色粒を含む	透かし孔あり
62	須恵器	高坏	脚部	SA2				回転ナデ	回転ナデ	灰 7.5Y4/1	灰白 N7/	1mm以下の白色粒を含む	透かし孔あり
63	土師器	甕	胴部	SA2				格子目叩き	ナデ スス付着	橙 5YR7/6	暗灰黄 2.5YR5/2	3mm以下のにぶい褐色粒を含む 3mm以下の灰色粒を含む	
74	土師器	壺	口縁部	SA3	19.0			横ナデ わずかにスス付着	横ナデ スス付着	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	2mm以下の灰色粒・褐色粒を含む 1mm以下の雲母をわずかに含む	
75	土師器	小型壺	ほぼ完形	SA3	8.3	2.3	8.9	指ナデ 一部黒斑・白斑 多方向の工具痕	横方向のナデ 一部黒斑 しぼり痕	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/4	5mm以下の褐色粒を含む 4mm以下の褐色粒を含む 4mm以下の白色粒を少量含む	

第６表　串木遺跡第４地点出土遺物観察表（４）

掲載番号	種別	器種	部位	出土位置	法　量（cm）			器面調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				Gr.・層・遺構	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
76	土師器	高坏	脚接合部	SA3				ナデ 脚接合部	風化のため調整不明	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	赤褐色粒・灰色粒を多量に含む	
77	土師器	高坏	脚部	SA3		(14.1)		横ナデ 一部スス付着	ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4 橙 5YR6/6	2mm以下の灰色粒・褐色粒を含む 1.5mm以下の雲母をわずかに含む	
78	土師器	鉢	口縁～底部	SA3	(9.5)	4.3	9.4	ナデ へら状工具による縦・斜方向のナデ	ナデ 一部黒斑	浅黄橙 10YR8/4	明黄褐 10YR7/6	3mm以下の褐色粒を含む 3mm以下の灰色粒を少量含む 2mm以下の白色粒をわずかに含む	
79	土師器	甕	口縁～胴部	SA4				斜方向の工具ナデ 厚くスス付着	横ナデ 工具ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	3mm以下の赤褐色粒を少量含む	
80	土師器	甕	口縁部	SA4				ナデ	スス付着	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	4mm以下の赤褐色粒を多量に含む 4mm以下灰色粒多量に含む 3mm以下の白色粒を少量含む	
81	土師器	甕	口縁部	SA4				ナデ スス付着	斜方向のナデ 一部黒斑	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	3mm以下の明赤褐色粒を含む 3mm以下の灰白色粒を含む 微細な雲母をわずかに含む	
82	土師器	甕	底部	SA4		(5.4)		斜方向のナデ スス付着	横ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	3mm以下の赤色粒を少量含む 微細な雲母をわずかに含む	
83	土師器	甕	底部	SA4		(5.8)		縦方向のヘラミガキ 工具痕多数 スス付着 黒斑あり	ナデ	浅黄 2.5Y7/4	浅黄橙 10YR8/4	4mm以下の褐色粒・灰色粒を多量に含む 1mm以下の白色粒をわずかに含む	
84	土師器	甕	底部～胴部	SA4		4.2		ナデ スス付着	ナデ 欠損部大	橙 10YR6/6 黄橙 8/6	褐灰 10YR5/1	4mm以下の赤褐色粒を多量に含む 微細な透明粒をわずかに含む	
85	土師器	甕	胴部～底部	SA4		-		叩き後ナデ	横ナデ 指押さえ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	3mm以下の赤褐色粒を多量に含む 微細な雲母をわずかに含む	
86	土師器	甕	底部	SA4		(5.5)		ナデ スス付着	粗いナデ 黒斑あり	浅黄 2.5Y7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	3mm以下の褐色粒・灰色粒を含む 0.5mm以下の雲母をわずかに含む	
87	土師器	壺	口縁部	SA4				横ナデ	横ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	3mm以下の赤褐色粒を含む 3mm以下の灰白粒を含む 2mm以下の灰色粒を少量含む	
88	土師器	壺	口縁部	SA4				横ナデ	横ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	5mm以下の赤褐色粒を含む 3mm以下の灰白粒を少量含む 2mm以下の灰色粒をわずかに含む	
89	土師器	壺	口縁部	SA4				横ナデ	横ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	5mm以下の赤褐色粒を含む 2mm以下の灰色粒を少量含む 2mm以下の白色粒を少量含む	
90	土師器	壺	底部	SA4		2.4		ナデ 黒斑あり	ナデ 黒斑あり	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	1.5mm以下の褐色粒を含む 0.5mm以下の雲母をわずかに含む	
91	土師器	高坏	口縁～坏部	SA4	(22.9)			ナデ ミガキ後ナデ	ナデ	黄橙 10YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	微細な光沢粒を含む 微細な透明粒を少量含む	
92	土師器	高坏	口縁～坏部	SA4				ナデ	ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	3mm以下の褐色粒をわずかに含む 微細な透明粒を多量に含む	
93	土師器	高坏	脚部	SA4				ナデ	ナデ しぼり痕	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	3mm以下の褐色粒を含む 3mm以下の灰色粒を含む 2mm以下の雲母をわずかに含む	
94	土師器	高坏	裾部	SA4				ナデ	横ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	2mm以下の褐色粒を少量含む 2mm以下の雲母を少量含む	透かし孔あり
100	縄文土器	深鉢	口縁部	SA4				楕円押型文	ナデ	橙 7.5YR7/6 橙 5YR6/6	橙 7.5YR7/6	2mm以下の黒褐色粒を少量含む 1mm以下の白色透明粒を含む 2mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む	

第７表　串木遺跡第４地点出土遺物観察表（５）

掲載番号	種別	器種	部位	出土位置	法　量（cm）			器面調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				Gr.・層・遺構	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
101	縄文土器	深鉢	胴部	SA4				楕円押型文	ナデ	橙 5YR6/6	橙 7.5YR7/6	5mm以下の赤褐色粒を少量含む 2mm以下の黒色光沢粒を含む 2mm以下の透明粒を多量に含む	
102	縄文土器	深鉢	口縁部	SA4				ナデ 貼付突帯文 一部黒斑	横ナデ 一部黒斑	にぶい黄橙 10YR7/3	褐灰 10YR3/1	4mm以下の灰色粒を多量に含む 4mm以下の黒色粒を多量に含む 微細な透明粒をわずかに含む	
103	縄文土器	深鉢	口縁部	SA4				横ナデ 貼付突帯文 スス付着	横ナデ	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR6/2	4mm以下の灰色粒を含む 微細な透明粒を多量に含む 2mm以下の褐色粒を含む	
104	縄文土器	台付皿	口縁部	SA4				粗いナデ	ナデ	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	4mm以下の赤褐色粒を少量含む 2mm以下の灰色粒を含む 微細な透明粒を含む	
106	土師器	甕	口縁～胴部	SC4	(23.7)			ナデ スス大量に付着	風化のため調整不明	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	5mm以下の褐色粒を多量に含む 4mm以下の灰色粒を少量含む 1mm以下の白色粒をわずかに含む	
107	土師器	甕	底部	SC4		(6.5)		斜方向のナデ 強い工具痕	ナデ 強めの工具痕あり 一部黒斑	にぶい黄橙 10YR7/4	黄橙 10YR8/6	5mm以下の褐色粒を多量に含む 3mm以下の白色粒を少量含む 微細な透明粒を含む	
108	土師器	甕	底部	SC4		3.5		ナデ 強い工具痕あり	ナデ	浅黄橙 10YR8/3	褐灰 10YR6/1	5mm以下の褐色粒を多量に含む 4mm以下の灰色粒を多量に含む 1mm以下の雲母を含む	
109	土師器	甕	底部	SC4		3.1		叩き後ナデ	ナデ 強い工具痕あり	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR6/1	4mm以下の赤褐色粒を多量に含む 4mm以下の灰色粒を多量に含む 3mm以下の白色粒を含む	
110	土師器	壺	口縁～胴部	SC4	(10.6)			ナデ 斜・横方向の工具痕あり	横ナデ 横・斜方向の工具ナデ	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	2mm以下の褐色粒を多量に含む 2mm以下の灰色粒・白色粒を少量含む 1mm以下の雲母をわずかに含む	
111	土師器	高坏	坏部～脚部	SC4				ナデ 一部黒斑	強い工具痕あり 粗いナデ	浅黄橙 10YR8/4 褐灰 10YR6/1	浅黄橙 10YR8/4	2mm以下の褐色粒を多量に含む 2mm以下の灰色粒を含む 微細な透明粒を含む	
112	縄文土器	深鉢	底部	SC7		(9.4)		ナデ	ナデ 一部黒斑	橙 7.5YR7/6	白灰 10YR8/1 褐灰 10YR5/1	5mm以下の灰色粒を多量に含む 3mm以下の白色粒を含む 微細な雲母をわずかに含む	
113	土師器	皿	口縁～底部	SH21	(8.4)	(6.5)	(1.9)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/6	7mm大の赤褐色粒を1つ 2mm以下の赤褐色粒をわずかに含む	ヘラ切り底
117	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅳ層上				山形押型文	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	4mm以下の灰色粒を多量に含む 2mm以下の白色半透明粒・灰色粒をわずかに含む	
118	縄文土器	浅鉢	口縁部	Ⅳ層上				横ナデ 横方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	微細な透明光沢粒を少量含む 3mm以下の赤褐色粒をわずかに含む	黒色磨研
119	磁器	丸碗	口縁部	Ⅱ層	(12.4)			施釉	施釉	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	精良	

第８表　串木遺跡第４地点出土土製品計測表

掲載番号	種別	器種	出土位置	大きさ（mm）				重量（g）
			Gr.・層	最大幅	最大長	最大厚	推定孔径	
114	土製品	土錘	SE1	4.2	1.7	1.6	0.45	9.0

第９表　串木遺跡第４地点出土石器計測表

掲載番号	器種	遺構・層位	石材	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（g）	備考
43	石錘	SA1	頁岩	4.9	7.9	1.7	85.0	
44	石錘	SA1	頁岩	4.6	6.2	1.3	50.2	
45	台石	SA1	砂岩	16.9	12.0	6.7	1700.0	磨石としての使用も想定される
46	敲石	SA1	砂岩	18.6	5.3	5.6	790.0	たも石としての用途も想定される
47	敲石	SA1	尾鈴山酸性岩（凝灰岩）	6.1	5.8	3.4	178.1	
64	石錘	SA2	頁岩	9.1	7.7	2.1	127.2	
65	敲石	SA2	砂岩	5.3	3.9	3.4	90.3	
66	たも石	SA2	砂岩	15.4	6.6	2.8	460.0	磨石としての使用も想定される 中央部に横方向の擦痕あり
67	たも石	SA2	砂岩	15.3	5.9	5.2	611.5	磨石としての使用も想定される 中央部に横方向の擦痕あり
68	たも石	SA2	砂岩	15.9	5.4	3.4	488.0	磨石としての使用も想定される 中央部に横方向の擦痕あり
69	たも石	SA2	砂岩	14.5	5.4	3.2	435.0	
70	台石	SA2	砂岩	19.8	15.0	5.4	2136.4	中央部に磨面あり
71	台石	SA2	砂岩	17.4	16.6	6.1	2650.1	
72	台石	SA2	砂岩	30.4	32.2	10.8	15000.0	
73	台石	SA2	砂岩	36.0	41.2	10.5	21400.0	建物跡西側壁面に据えた状態で出土 床面掘削後、貼床を作る際に設置か
95	石錘	SA4	砂岩	4.3	6.9	1.7	63.9	
96	石錘	SA4	砂岩	4.7	(3.15)	1.7	33.9	
97	石錘	SA4	砂岩	4.2	(10.7)	1.4	56.2	両端の打欠をつなぐように擦れた痕跡あり
98	石錘	SA4	砂岩	3.8	5.4	1.3	39.0	両端の打欠をつなぐように擦れた痕跡あり
99	敲石	SA4	砂岩	22.0	8.9	5.2	1390.0	たも石としての用途も想定される 裏面に巻き付けたようなスス付着痕が認められる
105	たも石	SA5	砂岩	15.8	7.0	4.1	685.0	
115	石錘	SE1	頁岩	4.8	9.9	1.5	101.5	
116	石錘	SE1	砂岩	5.0	6.4	1.9	86.0	
120	石鏃	Ⅴ層上	黒曜石（桑木津留産）	1.4	1.2	0.2	0.3	
121	二次加工剥片	Ⅴ層下（Ⅵ層）	頁岩	5.3	5.2	1.6	51.7	
122	石錘	Ⅴ層上	砂岩	6.3	6.3	2.0	119.4	
123	打製石斧未製品	Ⅴ層上	ホルンフェルス	6.8	4.6	1.7	60.7	

第Ⅴ章　自然科学分析の結果

第１節　自然科学分析の概要

串木遺跡第４地点の集石遺構２基（ＳＩ１、ＳＩ６）と竪穴建物跡２軒（ＳＡ１、ＳＡ２）から採取された炭化材について自然科学分析を行った。分析内容は、放射性炭素年代測定および樹種同定である。以下に、分析項目ごとに試料の詳細、分析方法、分析結果および考察・所見を記載する。

第２節　放射性炭素年代測定

１　はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}Ｃ）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約５万年前までの年代測定が可能である（中村, 2003）。

２　試料と方法

試料は、集石遺構と竪穴建物跡から採取された№１～№５の計５点である。表 10 に試料の詳細および前処理･調整法を示す。測定は加速器質量分析法（ＡＭＳ法：Accelerator MaSS Spectrometry）で行った。

３　測定結果

ＡＭＳ法によって得られた^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（^{14}Ｃ）年代および暦年代（較正年代）を算出した。表 10 にこれらの結果を示し、図 32 に各試料の暦年較正結果（較正曲線）を示す。

（１）δ^{13}Ｃ（デルタ）測定値

試料の測定^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}Ｃ／^{12}Ｃ）。この値は標準物質（ＰＤＢ）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ^{13}Ｃ値を－25（‰）に標準化することで同位体分別効果を補正している。

（２）放射性炭素（^{14}Ｃ）年代測定値

試料の^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比から、現在（ＡＤ 1950 年基点）から何年前かを計算した値。^{14}Ｃの半減期は 5730 年であるが､国際的慣例により Libby の 5568 年を使用している。付記した統計誤差（±）は１σ（シグマ）（68.2％確率）である。^{14}Ｃ年代値は下１桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下１桁を丸めない暦年較正用年代値を併記した。

（３）暦年代（Calendar YearS）

放射性炭素（^{14}Ｃ）年代を実際の年代値に近づけるために、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中^{14}Ｃ濃度の変動や^{14}Ｃの半減期の違いを較正している。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な^{14}Ｃ測定値および福井県水月湖の年縞堆積物データなどにより作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 20、較正プログラムは OxCal 4.4 である。暦年代（較正年代）は、^{14}Ｃ年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により２σ（シグマ）（95.4％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。（）内の％表示は、その範囲

内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4　所見

加速器質量分析法（ＡＭＳ）による放射性炭素年代測定の結果、№1では7840 ± 25年ＢＰ（2σの暦年代でＢＣ 6771 ～ 6758，6753 ～ 6719，6703 ～ 6596年）、№2では8835 ± 30年ＢＰ（ＢＣ 8198 ～ 8110，8096 ～ 8069，8067 ～ 8037，8015 ～ 7778年）、№3では1585 ± 20年ＢＰ（ＡＤ 428 ～ 544年）、№4では1605 ± 20年ＢＰ（ＡＤ 419 ～ 483，487 ～ 538年）、№5では2495 ± 20年ＢＰ（ＢＣ 771 ～ 724，707 ～ 662，653 ～ 544年）の年代値が得られた。

なお、樹木（炭化材）による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、考古学的所見よりも古い年代値となることがある。

文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」. 日本第四紀学会,p.3-20.

中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社,p.301-322.

Bronk RamSey, C.（2009）BayeSian AnalySiS of Radiocarbon dateS. Radiocarbon, 51（1）, p.337-360.

Paula J Reimer et al.,（2020）The IntCal 20 Northern HemiSphere radiocarbon age calibration curve（0-55 kcal BP）. Radiocarbon, 62（4）, p.725-757.

第３節　樹種同定

1　はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2　試料

試料は、放射性炭素年代測定（第２節）に用いられたものと同一の炭化材５点である。試料の詳細を表11に示す。

3　方法

以下の手順で樹種同定を行った。

１）試料を洗浄して付着した異物を除去

２）試料を割折して、木材の基本的三断面（横断面：木口，放射断面：柾目，接線断面：板目）を作成

３）落射顕微鏡（40 ～ 1000倍）で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

4　結果

表11に同定結果を示し、写真図版（58頁）に各分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記す。

コナラ属コナラ節　QuercuS Sect. PrinuS　ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火

炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ 15 m、径 60 ㎝ぐらいに達する。

コナラ属アカガシ亜属　QuercuS Subgen. CyclobalanopSiS　ブナ科

中型から大型の道管が１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ 30 m、径 1.5 m以上に達する。

カエデ属　Acer　カエデ科

小型で丸い道管が散在する。道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細な螺旋肥厚が存在するがやや不鮮明になっている。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で１～６細胞幅である。道管の内壁には微細ならせん肥厚が存在する。

以上の特徴からカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の特徴からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ 20 m、径１ｍに達する。

ヒサカキ属　Eurya　ツバキ科

小型で角張った道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く 60 を越えて観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で１～３細胞幅であり、多列部と比べて単列部が長い。

以上の特徴からヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ 10 m、径 30 ㎝である。

５　所見

串木第４遺跡から採取された炭化材について樹種同定を行った。その結果、集石遺構の№1（ＳＩ１）と№2（ＳＩ６）はコナラ属コナラ節、竪穴建物跡の№3（ＳＡ１，下層 194）はヒサカキ属、№4（ＳＡ１，貼床直上）はカエデ属、№5（ＳＡ２，南西区）はコナラ属アカガシ亜属と同定された。

ブナ科のコナラ属コナラ節とコナラ属アカガシ亜属は、強靱で弾力に富むことから建築部材や農具などに用いられ、火力が強く火持ちが良いことから燃料材（薪炭材）としても優良である。コナラ属アカガシ亜属は照葉樹林の主要構成要素であり、弥生時代以降の西南日本ではとくに農工具に用いられることが多い。なお、コナラ属の種実（ドングリ）は食用としても有用である。

ヒサカキ属は、強さ中庸で、杭や農具をはじめ小細工物、器具などに用いられる。また、伐採後の更新が早いことから薪材としても利用される。ヒサカキ属は林内、尾根筋、海岸等に自生し、二次林内に多い樹種である。カエデ属は、耐朽性と保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭などに広く用いられる。カエデ属は山野や低山の林内に生育し、やや湿気のある肥沃な環境を好む。

文献

伊東隆夫・山田昌久(2012)木の考古学. 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司(1985)木材の構造. 文永堂出版, 290p.

島地 謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧. 雄山閣, 296p.

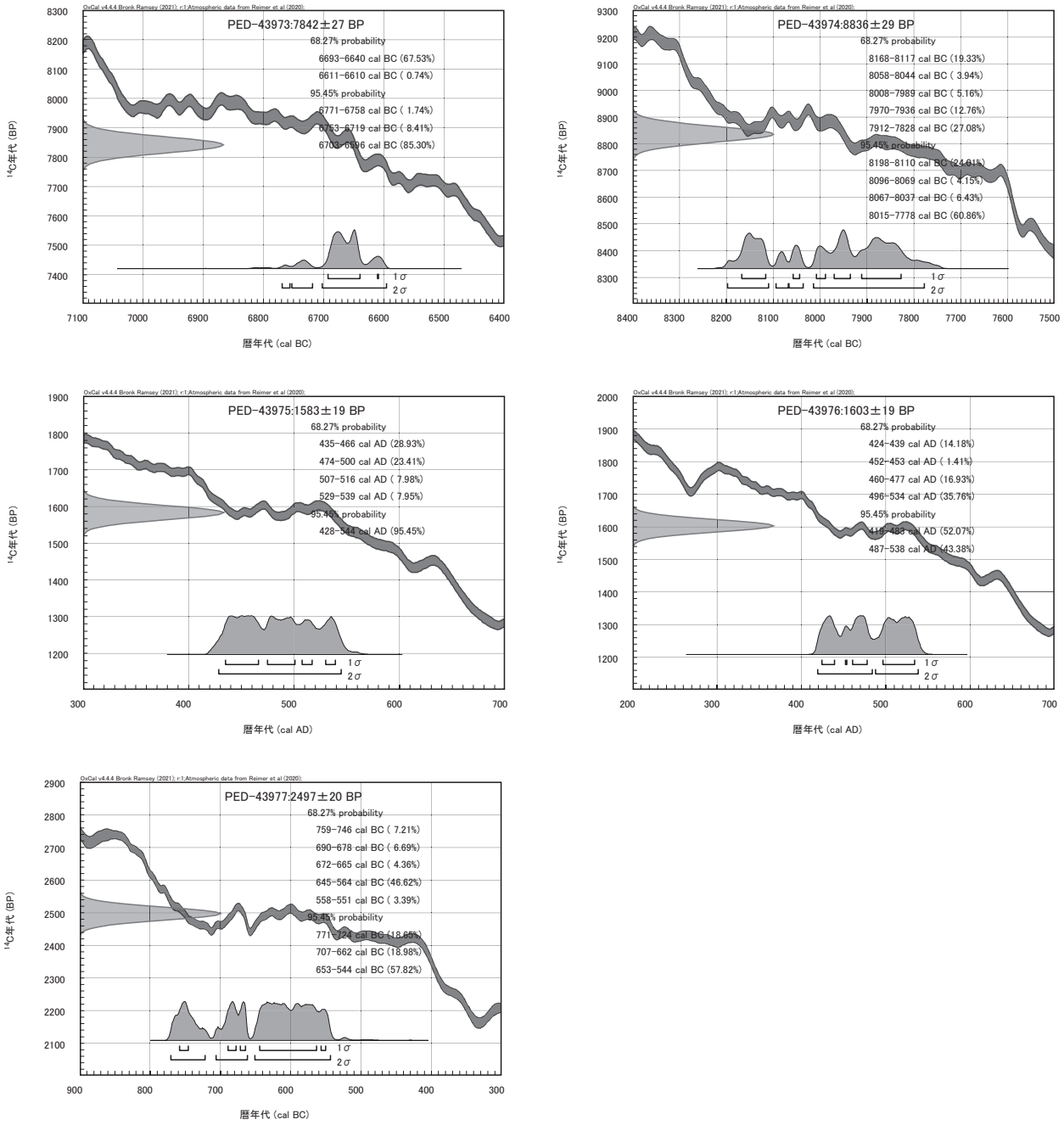
山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史. 植生史研究特別１号. 植生史研究会, 242p.

第10表　串木遺跡第４地点における放射性炭素年代測定結果

試料No.	測定No. PED-	試料の詳細	種類	前処理	δ^{13}C (‰)	^{14}C年代 (年BP)	暦年較正用年代(年BP)	暦年代（較正年代）	
				測定法				1σ（68.2%確率）	2σ（95.4%確率）
1	43973	ＳＩ１集石遺構	炭化材	超音波洗浄 有機溶剤処理 AAA処理 AMS法	-27.86±0.19	7840±25	7842±27	cal BC 6693-6640 (67.53%) cal BC 6611-6610 (0.74%)	cal BC 6771-6758 (1.74%) cal BC 6753-6719 (8.41%) cal BC 6703-6596 (85.30%)
2	43974	ＳＩ６集石遺構	炭化材	超音波洗浄 有機溶剤処理 AAA処理 AMS法	-25.74±0.22	8835±30	8836±29	cal BC 8168-8117 (19.33%) cal BC 8058-8044 (3.94%) cal BC 8008-7989 (5.16%) cal BC 7970-7936 (12.76%) cal BC 7912-7828 (27.08%)	cal BC 8198-8110 (24.01%) cal BC 8096-8069 (4.15%) cal BC 8067-8037 (6.43%) cal BC 8015-7778 (60.86%)
3	43975	ＳＡ１竪穴建物跡 下層194	炭化材	超音波洗浄 有機溶剤処理 AAA処理 AMS法	-29.66±0.14	1585±20	1583±19	cal AD 435-466 (28.93%) cal AD 474-500 (23.41%) cal AD 507-516 (7.98%) cal AD 529-539 (7.95%)	cal AD 428-544 (95.45%)
4	43976	ＳＡ１竪穴建物跡 貼床直上	炭化材	超音波洗浄 有機溶剤処理 AAA処理 AMS法	-26.76±0.16	1605±20	1603±19	cal AD 424-439 (14.18%) cal AD 452-453 (1.41%) cal AD 460-477 (16.93%) cal AD 496-534 (35.76%)	cal AD 419-483 (52.07%) cal AD 487-538 (43.38%)
5	43977	ＳＡ２竪穴建物跡 南西区	炭化材	超音波洗浄 有機溶剤処理 AAA処理 AMS法	-27.29±0.17	2495±20	2497±20	cal BC 759-746 (7.21%) cal BC 690-678 (6.69%) cal BC 672-665 (4.36%) cal BC 645-564 (46.62%) cal BC 558-551 (3.39%)	cal BC 771-724 (18.65%) cal BC 707-662 (18.98%) cal BC 653-544 (57.82%)

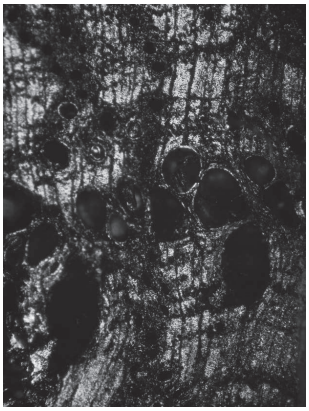
第11表　串木遺跡第４地点における出土炭化材の樹種同定結果

No.	遺構・層位等	結果（学名/和名）	
1	ＳＩ１集石遺構	QuercuS Sect. PrinuS	コナラ属コナラ節
2	ＳＩ６集石遺構	QuercuS Sect. PrinuS	コナラ属コナラ節
3	ＳＡ１竪穴建物跡，下層194	Eurya	ヒサカキ属
4	ＳＡ１竪穴建物跡，貼床直上	Acer	カエデ属
5	ＳＡ２竪穴建物跡，南西区	QuercuS Subgen. CyclobalanopSiS	コナラ属アカガシ亜属


OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PED-43973:7842±27 BP
68.27% probability
6693-6640 cal BC (67.53%)
6611-6610 cal BC (0.74%)
95.45% probability
6771-6758 cal BC (1.74%)
6753-6719 cal BC (8.41%)
6703-6596 cal BC (85.30%)
14C年代 (BP)
暦年代 (cal BC)
1σ
2σ
OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PED-43974:8836±29 BP
68.27% probability
8168-8117 cal BC (19.33%)
8058-8044 cal BC (3.94%)
8008-7989 cal BC (5.16%)
7970-7936 cal BC (12.76%)
7912-7828 cal BC (27.08%)
95.45% probability
8198-8110 cal BC (24.01%)
8096-8069 cal BC (4.15%)
8067-8037 cal BC (6.43%)
8015-7778 cal BC (60.86%)
14C年代 (BP)
暦年代 (cal BC)
1σ
2σ
OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PED-43975:1583±19 BP
68.27% probability
435-466 cal AD (28.93%)
474-500 cal AD (23.41%)
507-516 cal AD (7.98%)
529-539 cal AD (7.95%)
95.45% probability
428-544 cal AD (95.45%)
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)
1σ
2σ
OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PED-43976:1603±19 BP
68.27% probability
424-439 cal AD (14.18%)
452-453 cal AD (1.41%)
460-477 cal AD (16.93%)
496-534 cal AD (35.76%)
95.45% probability
416-488 cal AD (52.07%)
487-538 cal AD (43.38%)
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)
1σ
2σ
OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PED-43977:2497±20 BP
68.27% probability
759-746 cal BC (7.21%)
690-678 cal BC (6.69%)
672-665 cal BC (4.36%)
645-564 cal BC (46.62%)
558-551 cal BC (3.39%)
95.45% probability
771-724 cal BC (18.65%)
707-662 cal BC (18.98%)
653-544 cal BC (57.82%)
14C年代 (BP)
暦年代 (cal BC)
1σ
2σ

第 32 図　暦年較正結果

串木遺跡第４地点の木材



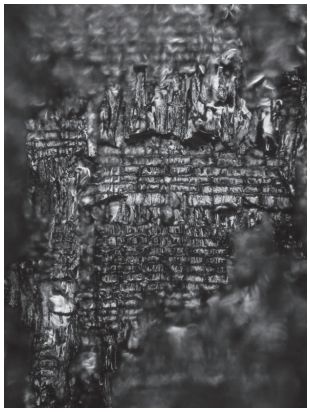
横断面　0.1mm

放射断面　0.1mm

接線断面　0.1mm

コナラ属コナラ節　試料番号１

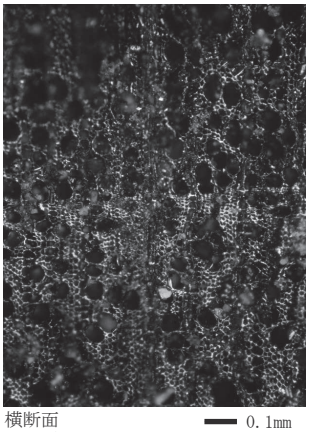
横断面　0.1mm



放射断面　0.1mm

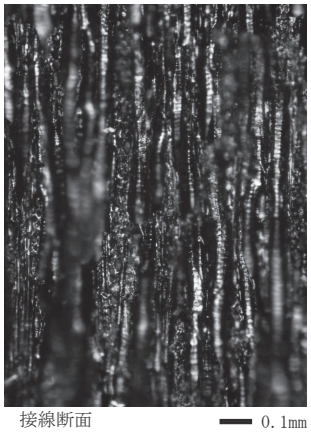
接線断面　0.1mm

コナラ属アカガシ亜属　試料番号５



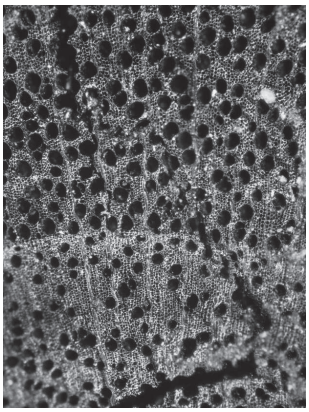
横断面　0.1mm

放射断面　0.1mm



接線断面　0.1mm

カエデ属　試料番号４



横断面　0.1mm

放射断面　0.1mm

接線断面　0.1mm

ヒサカキ属　試料番号３

第Ⅵ章　総括

山城城跡と串木遺跡第４地点では、縄文時代早期や古代～中世にかけての遺構・遺物が確認された。地形的にもつながりがあるため、それぞれの遺跡について記述することで、まとめにかえたい。

第１節　山城城跡の遺構と遺物

山城城跡では、縄文時代早期と古代～中世の遺構・遺物が確認された。縄文時代早期で検出された遺構は、集石遺構５基（ＳＩ１～ＳＩ５）である。今回の調査では、散礫の中で特に焼礫が密集する部分を集石遺構として認定した。分布は、小さな谷の北側にあたるＡ-１区に集中している。集石遺構内の焼礫は、拳大程の破砕された角礫が大部分を占め、石材は近辺の崖面や近隣の河川にて採取可能な砂岩である。すべて円形や不整形の掘り込みを有する。５基ともに配石は伴わず、遺物や炭化物の出土も確認されなかった。焼礫の密集する範囲が認められない散礫は、調査区全体に分布がみられた。調査範囲が狭いことや、調査区壁面にも焼礫があり、南に向かって緩やかに傾斜する地形であることから、集石遺構の分布はさらに南にも広がるものと考えられる。

縄文土器は貝殻条痕文と押型文、粗製の無文土器が出土している。押型文土器のうち楕円押型文は、やや粗大な粒状で施文方向は斜位である。山形押型文は間隔の広い山形文と比較的微細な横位の山形文に大別される。出土遺物から判断し、遺構は縄文時代早期前半頃の所産としておきたい。

石器については、北西部に位置する市房山由来や、城跡南側に位置する一ツ瀬川で採取できる石材を利用したものとみられる。出土した石器を検討すると、二次加工剥片や剥片などの頁岩系の石材は刃器に、磨石、敲石など砂岩や花崗岩系の石材は礫石器に利用するなど、石材の選択がなされたとみられる。

古代～中世の遺構は、Ⅲ層（アカホヤ火山灰）面で検出されたＢ区の１号溝状遺構と、Ｂ区で検出されたピット群がある。溝状遺構は、曲輪の東西軸とやや斜交し、N-62°-Eを指向する。埋土はⅡ層由来の黒色土である。断面は逆台形を呈し、調査区外へ延びる。溝の南側にはピット群が広がり、土師器小片や焼土を含むピットも認められた。ピットの規模は、直径0.2～0.6ｍ、深さ0.3～0.8ｍを測り、埋土は溝状遺構と類似した黒色土で、アカホヤ火山灰粒を少量混入するものと、混入の認められないものに大別できる。ピット間の距離は、平均約0.6ｍである。掘立柱建物として復元できるものはなかった。調査箇所は『日向地誌』に記載のある中世城館跡である山城跡の一部にあたる。城の縄張り上はもっとも北端に位置することから、曲輪の短軸（東西方向）に軸をそろえるようなピットは柵列の可能性も考えられる。

遺物は、曲輪の北東端にあたるＣ区で出土したヘラ切り底の坏１、２がある。１は、器形と法量から９世紀末～10世紀初頭のもので、串木遺跡第３地点で検出された１号土壙墓出土の土師器（10世紀前半）とほぼ同時期の可能性がある。２は器壁が薄く丁寧な調整が施される。胎土が精良で、底部に板目状の痕跡が認められることから、13世紀頃のもと考えられる。

第２節　串木遺跡第４地点の遺構と遺物

縄文時代と古墳時代の２時期の遺構が検出され、遺物の多くは古墳時代の竪穴建物跡からの出土である。

縄文時代では、集石遺構が８基検出された。調査区北側で５基（ＳＩ１～ＳＩ５）、南側で３基（ＳＩ６～ＳＩ８）である。北側の５基は、Ⅴ層（暗褐色土）面で検出され、ＳＩ１、ＳＩ２は掘り込みを有する。掘り込みは楕円形または円形で、拳大の焼礫が充填されている。ＳＩ１の埋土中から出土した炭化物について樹種同定と放射性炭素年代分析を行った結果、コナラ属コナラ節・7840 ± 25（ＢＰ）

という結果が得られた。一方、南側の３基に関しては、Ⅲ層下のⅥ層（褐色土）で検出された。ＳＩ６、ＳＩ７は、ほぼ円形の掘り込みを有し、ＳＩ６は配石を伴う。２基ともに底面から約0.1ｍの厚みで、炭化物を含むかたく締まった黒褐色の埋土が確認された。ＳＩ６の配石下で検出された炭化物の樹種同定と放射性炭素年代測定の結果、コナラ属コナラ節・8835 ± 30（ＢＰ）という結果が得られた。集石遺構からの遺物の出土は認められなかったため、検出層位での時期判断となるが、放射性炭素年代測定の結果、北側と南側で検出された集石遺構は、縄文時代早期に属し、時期差があると考えられる。山城城跡の集石遺構同様、焼礫の大部分は砂岩で、近辺の崖面や河川で採取可能な石材が使用されている。

古墳時代では、５軒の竪穴建物跡が検出され、そのうち３軒（ＳＡ１～ＳＡ３）には切り合い関係が認められる。建物跡は調査区外へ広がっているため、断定はできないもののＳＡ１、ＳＡ２の柱穴の位置関係やＳＡ４、ＳＡ５で確認された柱穴の並びから、検出された５軒は４本柱を持ち、一辺約４～５ｍの方形プランの建物跡と考えられる。ＳＡ１はＳＡ２・ＳＡ３より新しく、軸方位はN－49°－Wを指向する。ＳＡ１の床面の北東側に焼土の広がりが確認され、地床炉の痕跡と思われる。焼土内や周囲で確認された炭化材２個体について、樹種同定と放射性炭素年代測定を行った結果、ヒサカキ属・1585 ± 20（ＢＰ）とカエデ属・1605 ± 20（ＢＰ）という値が得られた。(第32図・第10、11表参照)。ヒサカキ属、カエデ属は建築材の一部や、薪などの燃焼材として使用されたと考えられる。焼土はＳＡ１の北、約10ｍに位置するＳＡ４の床面中央部でも確認された。

出土遺物に関して、ＳＡ１の土器は土師器が主体である。甕は口縁部が直口するものや最大径が胴部上半にあるものがあり、底部は小さな平底や丸底を呈する。壺は、頸部に突帯を有するもの、扁球胴となり長頸のもの、小型丸底壺などが特徴的である。ＳＡ２では、土師器の甕がみられず、口縁部が内傾する椀と器高の高い椀の２種類が確認された。須恵器はＳＡ２のみで出土している。坏身は口縁部の立ち上がりが直線的で上方に延び、高坏は長方形の透かし孔が認められる。田辺編年（田辺昭三 1981）のＴＫ23～ＴＫ47型式段階に相当すると考えられる。ＳＡ３では、底部が小さな平底を呈する小型壺や小型鉢が確認されている。ＳＡ４で出土した土器では、タタキ調整の甕がある。最大径が胴部上位にあるとみられ、外面には粗い調整とともにススが著しく付着する。床面中央部で確認された焼土とともに、日常容器である煮炊き具として使用されたと考えられる。ＳＡ５の中央部出土の土師器は脆く、取り上げの際に破損し、図化することはできなかった。検出された建物跡は部分的であり、出土遺物からの情報は断片的であるが、新富町上薗Ｆ地区のＩ～Ⅲ期の幅に入ることや、ＳＡ２出土の須恵器などから、串木遺跡第４地点で検出された建物跡は５世紀後半頃と考えられる。切り合い関係が認められた３軒の建物跡（ＳＡ１～ＳＡ３）の出土遺物を検討した結果、ほぼ時期差が認められないことから、短期間に建て替えが行われたものと考えられる。

また、道路拡張に伴う幅約５ｍの調査区内で建物跡５軒が確認されたことから、周囲にも当該時期の集落跡が広がる可能性があり、穂北地区の歴史を知る上で、貴重な成果である。

２遺跡は土層の堆積状況が共通し、地理的なつながりが看取される。縄文時代早期の集石遺構が合計13基検出されたことからも、遺跡間に存在する谷地形を囲むように共通の生活圏が形成されていたものと考えられる。

【引用・参考文献】
田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
新富町教育委員会1995『上園Ｆ地区・溜水第２遺跡』新富町文化財報告書第18集

1　山城城跡・串木遺跡第４地点遠景（北西より）

2　山城城から平城跡を望む（南より）

山城城跡・串木遺跡第４地点遠景

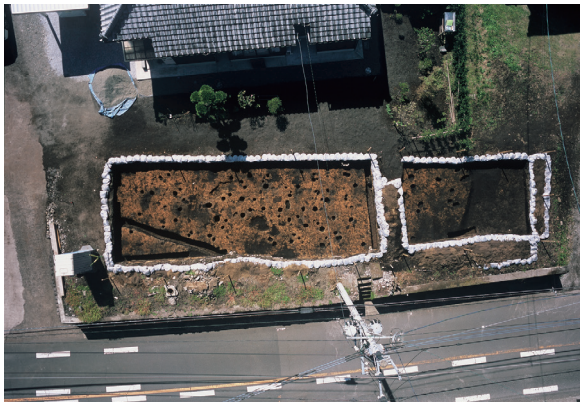
1　串木遺跡第４地点調査区全景

2　串木遺跡第４地点竪穴建物跡の切り合い（ＳＡ１～ＳＡ３）

串木遺跡第４地点調査区全景・近景

1　山城城跡調査区全景

2　山城城跡土層断面（北西より）



3　山城城跡ＳＨ・ＳＥ分布状況

4　山城城跡Ｂ区ＳＥ１検出状況（東より）

5　山城城跡Ｂ区ＳＨ検出状況（西より）

山城城跡全景・溝状遺構・ピット群検出状況

1　山城城跡Ａ－２区ＳＨ検出状況（南東より）

2　山城城跡Ａ－１区ＳＨ完掘状況（東より）

3　山城城跡Ａ－２区ＳＨ完掘状況（東より）

4　山城城跡Ｂ区ＳＨ・ＳＥ１完掘状況（東より）

5　山城城跡Ａ－１・Ａ－２・Ｂ区散礫検出状況

山城城跡溝状遺構・ピット群完掘・散礫検出状況

1　山城城跡Ａ－１区散礫検出状況

2　山城城跡Ａ－２区散礫検出状況（南東より）

3　山城城跡Ｂ区散礫検出状況（東より）

4　山城城跡Ｃ区散礫検出状況（西より）

5　山城城跡Ａ－１区ＳＩ１～ＳＩ５検出状況（南より）

山城城跡散礫・集石遺構検出状況

1　山城城跡出土土師器

2　山城城跡出土縄文土器（表）

3　山城城跡出土縄文土器（裏）

山城城跡出土土器

1　山城城跡出土石鏃・二次加工剥片（1）

2　山城城跡出土スクレイパー・二次加工剥片（2）・剥片

山城城跡出土石器（1）

1　山城城跡出土石核・磨製石斧・打製石斧未製品

2　山城城跡出土礫器・石錘・磨石・敲石

山城城跡出土石器（2）

1　串木遺跡第４地点ＳＡ検出状況（北より）

2　串木遺跡第４地点ＳＡ１～ＳＡ３床面遺物出土状況（北より）

3　串木遺跡第４地点ＳＡ１完掘状況（北より）

4　串木遺跡第４地点ＳＡ２完掘状況（北東より）

5　串木遺跡第４地点ＳＡ４遺物出土状況（南西より）

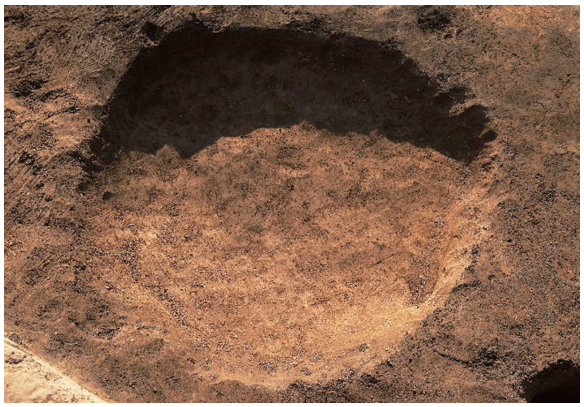
6　串木遺跡第４地点ＳＡ４貼床検出状況（北西より）

7　串木遺跡第４地点ＳＡ５検出状況（南東より）

8　串木遺跡第４地点ＳＡ５完掘状況（北東より）

串木遺跡第４地点竪穴建物跡

1　串木遺跡第４地点ＳＩ１～ＳＩ３検出状況（北東より）



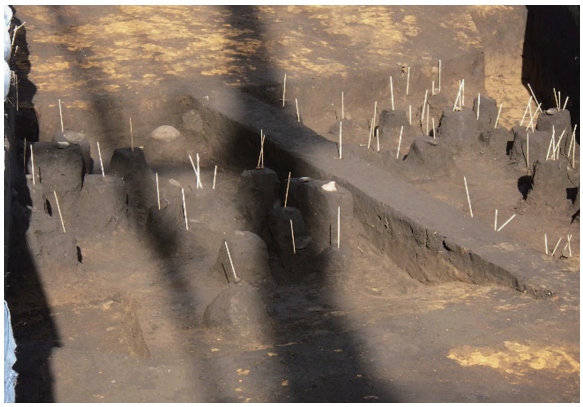
2　串木遺跡第４地点ＳＩ１掘り込み完掘状況（北東より）

3　串木遺跡第４地点ＳＩ４・ＳＩ５検出状況（西より）

4　串木遺跡第４地点ＳＩ６検出状況（東より）

5　串木遺跡第４地点ＳＩ７・ＳＩ８検出状況（東より）

6　串木遺跡第４地点ＳＩ６掘り込み完掘状況（東より）



7　串木遺跡第４地点ＳＥ１遺物出土状況（南より）

8　串木遺跡第４地点ＳＡ掘削作業風景（北東より）

串木遺跡第４地点集石遺構・溝状遺構

1　串木遺跡第４地点ＳＡ１出土土器（1）

2　串木遺跡第４地点ＳＡ１出土土器（2）

3　串木遺跡第４地点ＳＡ１出土土器（3）

串木遺跡第４地点ＳＡ１出土遺物（1）

1　串木遺跡第４地点ＳＡ１出土土器（4）

2　串木遺跡第４地点ＳＡ１出土石器

串木遺跡第４地点ＳＡ１出土遺物（2）

1　串木遺跡第４地点ＳＡ２出土土器

2　串木遺跡第４地点ＳＡ２出土石器（1）

串木遺跡第４地点ＳＡ２出土遺物（1）

1　串木遺跡第４地点ＳＡ２出土石器（２）

2　串木遺跡第４地点ＳＡ３出土土器

串木遺跡第４地点ＳＡ２出土遺物（２）・ＳＡ３出土遺物

1　串木遺跡第４地点ＳＡ４出土土器

2　串木遺跡第４地点ＳＡ４・ＳＡ５出土石器

串木遺跡第４地点ＳＡ４・ＳＡ５出土遺物

1　串木遺跡第４地点ＳＣ４・ＳＣ７出土土器

2　串木遺跡第４地点ＳＥ１・ＳＨ出土遺物

3　串木遺跡第４地点包含層出土遺物

串木遺跡第４地点ＳＣ・ＳＥ・ＳＨ・包含層出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	やまじょうしろあと・くしきいせきだい４ちてん
書名	山城城跡・串木遺跡第４地点
副書名	県道杉安高鍋線（山城工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第261集
編著者名	橋本 英俊
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地　TEL 0985-36-1171
発行年月日	西暦2022年３月25日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
山城城跡（やまじょうしろあと）	西都市大字穂北字平城（さいとしおおあざほきたあざひらじょう）704-2ほか	45208	2022	32°08′52	131°22′59″	2020.08.17～2021.01.12	約360㎡	県道杉安高鍋線（山城工区）道路改良工事
串木遺跡第４地点（くしきいせきだいちてん）	西都市大字穂北字串木（さいとしおおあざほきたあざくしき）725-1ほか		2021	32°08′47	131°23′04″		約250㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山城城跡	城跡	縄文時代	集石遺構５基	縄文土器　石器	
		古代～中世	溝状遺構１条　ピット群	土師器　陶磁器	
串木遺跡第４地点	集落跡	縄文時代	集石遺構８基	縄文土器　石器	
		古墳時代	竪穴建物跡５軒	土師器　須恵器　石器	

要約

山城城跡は中世山城の曲輪の一部である。ピット群や溝状遺構が検出された。縄文時代では集石遺構５基が確認された。

串木遺跡第４地点は古墳時代中期の集落跡である。竪穴建物跡５軒が検出され、須恵器や土師器が出土している。縄文時代では集石遺構８基が確認された。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第261集

山城城跡・串木遺跡第４地点

県道杉安高鍋線（山城工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022年３月

発　行　　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985(36)1171　　FAX 0985(72)0660

印　刷　　株式会社 都城印刷
〒885-0055　宮崎県都城市早鈴町1618番地
TEL 0986(22)4392　　FAX 0986(22)4891

Saito City

Yamajyo Citadel ruins・Kushiki Site4th Point

The Report of Excavation by Miyazaki Prefectural Archaeological Center
vol.261

2022
Miyazaki Prefectural Archaeological Center